僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と幻想郷と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２６５３Ｚ

【作者名】
影月

【あらすじ】
バカテスと東方のコラボです。
明久魔改造、咲夜はＰＡＤじゃない（ここ重要）、文才皆無なんですが頑張ります
あと更新ですが思いつきで書くんでいきなり5話進んだりとかまばらです。
ストック？何それおいしいの？
１５指定は残酷描写等あるためつけています。
キャラ紹介は話が進むたびたまに修正します

挨拶兼補足

初めまして影月です。
このｓｓはバカとテストと召喚獣と東方とちょっとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。
東方キャラ登場（頑張ります）
お話のメインはバカテス本編
過度のブレイク＆ａｍｐ；キャラ崩壊
メルブラ要素あり
等ございます。お気をつけて下さい。
あとキャラ設定ですが、
明久、咲夜は同じ歳、霊夢、魔理沙は2、早苗は明久の一つ下となっております。

そして最後に…咲夜はＰＡＤではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト日の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「Ｚｚｚｚ…」
「…ひ…ろ。…久……てば…」
「う…ん？」
「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」
「ふ…うあぁぁぁ…なんだ…妹紅か…どうしたの？」

朝、なにやら呼ばれたので起きてみると、目の前に妹紅がいた…

彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まぁホントはまだ色々とあるんだけど、それはのちほどに。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう？

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思ってな。幽香もいるし早く着替えてこいよ」
「え、あ…うん、わかったよ」
「…二度寝すんなよ？」
「しないよ！？」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替えよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい！！

制服に着替えて（間違えても女子の制服じゃないからね！？）リビングに行くと、

「あら、明久おはよう。今日は起きるの遅かったわね」
「幽香おはよう」

声を掛けてきた少女（作者「え？少女（ピチューン」）なんか電波が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。
実際はというと、彼女達は「幻想郷」ということは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけないらしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより・・・

「なんで今日は遅いってわかったの？」
「そこの花から聞いたのよ」
「あ～なるほど」

花から聞いた…聞き様によってはおかしな発言だけど事実である。
彼女達は「～程度の能力」というものを持っており（人間でも持っている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」
その名前の通り、花を操ったり、会話したりできる。

「よし、じゃあご飯作るけど、何かご要望とかはある？」
「「お任せする（するわ）」」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こうしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかった…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

プロローグ1（後書き）

うん…ｇｄｇｄだ…ｏｒｚ
読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？
１つけてほしい
２いらないかな
期限は４日ほどでお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね～ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です
一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行っておりオリジナルで
東方儚月抄と似たような事件も起こっているということになってます。
なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

ｓｉｄｅ明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書けてないだけです。（私を見ないでぇぇぇ、てかメタるなあああｂｙ作者）また電波が…ま、まぁテストに集中しよう…

ガタッ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん！？大丈夫！？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生！？体調を崩してるのにその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」
「……退席……します…」
「では姫路、君は無得点だ」

そう言って、教卓に戻ろうとする教師。ちょっ、まさかこの教師倒れた人間に自分で保健室に行けって言うのか！？

「……しつ…れい…しま…あ…！？」
「！？」

教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになったのでとっさにその体を受け止める。

「大丈夫？姫路さん？ほら、掴まって、保健室まで連れて行くから」
「吉井くん…でも…」
「気にしないで」

さすがに、ほっとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている！！早く席につけ！！」
「こんな状態の人を放っておくなんて出来ません！！」
「貴様も、無得点にするぞ！」
「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になったほうがましです」
「待て、吉井貴様！」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…

「姫路さん、ちょっとごめんね？」
「え？……／／／／／／／！？」

ちょっとあれだけど抱えて（俗に言う、お姫様だっこ）行こう。

ｓｉｄｅ明久ｅｎｄ

ｓｉｄｅ妹紅

やっぱ、明久だよな。
自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたしな…。

（さ～てどうしようかな…）

明久は無得点だし、あいつがいないとこ行ってもつまらないしな…
幽香もそうみたいだし…
いっその事名前無記入で出すかな？

「チッ、屑が…」

そう考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…

「まったく、あのバカの考えてることはわからん。ましてやあの屑ごときが私を侮辱して…」

…うん、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタッ！！！』』

あら？音が二つ？気になってそっちを見てみると、すっごい笑顔の幽香が…なるほど考えてることは同じってことだな…

「？何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか！？」

なんか言ってるけどまあいい…

「とりあえず…」

「えぇ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち！？」

「「最低な屑は、お前だ（貴様よ）」」

『『ドゴン！！！！！！！！』』

「げふ！！？？」

「じゃあ、私も退席しますね」
「私も退席するわ」
なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…
あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハァ…
ｓｉｄｅ妹紅ｅｎｄ
ｓｉｄｅ明久
なんか教室からすごい音がした気が…気のせいだな…
よし着いた。
「失礼します」
「あら？明久君、どうしたの？」
「永…八意先生いたんですね。すいません急患です」
「そう、じゃあそこのベットに寝かせて」
彼女は八意　永琳。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」
「そうですか」
「でも、明久君?テスト中じゃないの?」
「実は……」

とりあえず、さっきあったことを永林に話した…

「ふ～ん…その先生って何て名前?」
「え?鬘先生です」
「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの?」
「もうテストは受けれないし妹紅と幽香を待とうかと」
「あら、それならお話しましょうか。今暇なのよね」
「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聴いたとこ、永琳が一層笑っていない笑顔になったことだけはここに記そう。

帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（二人は＋2時間）説教を食らった・・・

プロローグ2（後書き）

おまけ

「でもさ慧音、その教師明久のこと侮辱したんだよ？」

「？どういうことだ？」

「あ～それはね（幽香説明中）……っということよ」

「……ほう、でその教師の名前は？」

「髪先生（慧音切れてるな…）」

「（切れてるわね…）」

『プルプルガチャッ』

「あぁ、永琳か？ちょうどよかった…実は…ということだから頼む」

「「（ご愁傷さま）」」

後日、この教師は首になったそうだ…（妹紅談

第1話　朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。
でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話　朝の会合

4月…

今日は文月学園の始業式である…
その頃明久は…

「Ｚｚｚｚ…」
「…う…ん…Ｚｚｚｚ…」
「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなさ…」
「うん？ふあぁ…あ、幽香おはよう」
起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう？
「…おはよう。ところでそれ、何？（ニコッ」
「え？（隣を見る）…うんまず、理由言いたいから聞いてくれる？」
「まぁ…聞いてあげるわ…」
隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠っていた…遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃったんだろう…
「実は昨日モン○ン３してて…」
「…何時までしてたの？」
「えっと3時くらいまでは記憶がある」
「……」
「……」
「はぁ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって言ってるでしょ…」
「あははは…ごめん…」
「まぁいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」
「えっ・・・」
「それとこれとは話は別よ（ニコッ」

「ハイ、ワカリマシタｏｒｚ」
こうして僕は死亡フラグを立てた…

「明久ごめんな。寝くなっちゃってそのまま寝ちゃった…」
「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけましだよ…」
朝ご飯を作っている途中、起きてきた妹紅が謝ってきた。でもみんな抱き癖があるのだろうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてきてるし
「あはは、まぁ明久なら大丈夫でしょ」
「ひどいな～僕は普通の人間だよ？」
「…普通の人間が砲撃とかを切ったりしねえよ…まぁかっこいいけどさ…／／／（ボソッ」
「？どうかした？」
いきなり顔赤くしてどうしたんだろう？
「いや／／／何でもない／／／」
「そう？ところでさ…」
やっぱりこれは言わなきゃだよね…

「妹紅…やっぱり男子制服で行く気？」
そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…
「ん？あ～、うんだってスカートって慣れなくて…それに似合わないし」
「そうか…僕は似合うと思うけどな～」
「あははは／／／まぁその、ありがとう」
「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ～」
「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝って」
「わかった」
さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

文月学園前

「おはよう、吉井、藤原、風見」
校門前でスーツを着た先生に出くわした。
「おはようございます、て…西村先生」
「おはようございます、鉄人」
「おはようございます、西村先生」
「あぁ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかったか?あと藤原、西村先生と呼べと言ってるだろう」
「気のせいですよ、先生」
「え?かっこいいと思うけどな…鉄人って」
彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。
「まぁいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」
結果が書かれた封筒を鉄人が僕と二人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。
「吉井、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」
「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」
「そうか…」
案の定、Fクラスだった。まぁ仕方ないよね、途中退席だし
「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ!」
「「あいつが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ(したからよ)」」
「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかろう…」
「うっ…それはたしかに…」
「言いごたえ出来ないわね…」

「まぁ今回は罰も受けているから処分はなしだ…吉井と上白沢先生たちに礼を言っとけよ？」
「「…はい」」
「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」
「んっ、そうか。」
あまり話しこんでると遅刻しちゃうしね

第1話　朝の会合（後書き）

1話まで書けた…一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。
あと生活ですが、ゲームは買うけど日常に余裕があるくらいには節約しています。
暮らしとして
幽香　明久　慧音と妹紅
てな感じにアパートに住んでいます。

第2話　AクラスとFクラスのゴリラ（前書き）

…え？ＰＶ２０００超え…？頑張らないとだな…

第2話　AクラスとFクラスのゴリラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていこうぜ」
始まりは妹紅のこの一言だった。
「確かに時間あるし、見ていこうか」
「そうね」
少年少女達移動中…

「……」
「アハハハ…」
「何よこれ…」
目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…
「無駄にお金のかかった教室だね…」
「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！。」
「格差社会ってやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性、学年主任の高橋洋子が立っていた。
「あ、やぱりあの先生が担任なんだ…」
「私あの先生苦手だな…」
「私、間違ってもAクラスじゃなくてよかったかも、って今実感したわ…」
これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどうも高橋先生が苦手らしい。
「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」
「？？？？？？？？はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女、霧島翔子だった

「同性愛者か…」
「「え？」」
霧島翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。
「いや、霧島さんには同性愛者じゃないかって噂があるじゃない？」
「あ～確かにそうだな」
「それがどうかしたの？」
「いや…僕にはそう思えなくてね…もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないと思ってね」
「「そう…なんでこれで自分のことには気づかないんだろう（のかしら）…（ボソッ」」
「？」

「そろそろ教室行こうか」
僕たちはFクラスの教室に歩き出した。
この時僕は、僕たちを見ている銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねぇ…僕たちいつの間に別世界に来たのかな？」
「明久、現実を見てくれ…私だって逃避したいの我慢してるんだから…」
「これは…ひどいわね…」
今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だった。
「と、とりあえず中に入ろ。きっと外よりはマシだよ。」
「そうだな…」
「そうね」
そう言って、僕は教室のドアを開いた。

『ガラッ』
「おはよ「さっさと席つきやがれ、蛆虫やろう」う?」
なんだろう、この教室。入った第一声罵倒だった…
「って雄二なんで教卓に立ってるの?」
「そりゃ担任が「「蛆虫やろうとは言い根性してるな（わね）…」」え?」
罵声を浴びせた少年、坂本雄二はその方に目を向けた。

そこにはもこたn…妹紅とUS…幽香がすごい笑顔で立っていた…
「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」
「まて、それはお前たちじゃなくて明久のことで…」
「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」
「「覚悟出来てるんだろうな（わよね）?」」
「ち、ちょっと待ってくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!。だから?????????あ、明久!。助けてくれ!。」
雄二が助けを求めてくる…仕方ない…
「二人とも…」
「「なに?明久」」
「あとでやってもかまわないから、今は席に着こう?」
「「そうだな（そうね）」」
「ち、ちょっと待て明久!?見捨てる気か?!」
雄二は必死に助けを求めるが、
「だって原因雄二じゃん」
僕は切り捨てることにした。

第2話　Aクラスとfクラスのゴリラ（後書き）

次回のお話は？
とうとう始まった本編、雄二のおとしめようとする策略に明久はどう対抗するのか？
お楽しみに（大ウソです

第3話　自己紹介と粉砕されるちゃぶ台（前書き）

明久の紹介どうしようかな…あと最初の担任変更ｂ

第3話　自己紹介と粉砕されるちゃぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」
「あ、すいませ…って慧…上白沢先生…」
後ろから声がかけられたので振り返ってみると、そこには慧音が立っていた。
彼女は上白沢　慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている
「あ、慧音おはよう」
「藤原さん、学校では上白沢先生です」
敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）…上白沢慧音です」
「なぁ、明久慧音どうしたんだ？」
「さっき黒板見たときチョークがなかった…」
「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」
ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチョークを取りに行った…
「うおぉぉぉ！！すげぇ美人だ！！」
「不思議な帽子をかぶってるが、逆に美人度が増してる！！」
戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いてるようにも見えたけど気のせいのはずだ…）
「えっと、何かありますか？」
「付き合ってください！！」
「「「異端者には、死を！」」」
「すいませんでした！！！」

「「ばかばっかね」」
「…ハァ」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」
その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。
「あと言っておくが、わしは男じゃ」
「「「「な、なんだと!?」」」」
みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……土屋康太」
次に自己紹介したのは小柄な体の少年、土屋康太だ。彼はあるあだ名を持っているがまあいいだろう。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、
「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、
「吉井明久を殴る事です♪」

『シュッ!』（幽香がペンを投げた音）
『ガツン!!!』（慧音がチョークで相さ…はじいた音）
「え…？」
呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げないように」
「考えとくわ」
「幽香…」
「…わかったわよ…」
僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に関しては投げる前に止めた）
「島田さんもそのような発言は控えるようにしてくださいね（ニコッ」
「は、ハイ…（あの二人…吉井とどういう関係かしら…）」
島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだろう…
「あいつには気をつけなきゃだよな」
「そうね…」
「どうしたの？二人とも」
「「気にするな（気にしないで）」」
2人はそれぞれ笑顔で言った。

「・・・・です、よろしく」
次は妹紅だな
「藤原妹紅です、男子制服を着ているが女なんであしからず」
「なるほど木下みたいなものか」
「じゃから、わしは男じゃ！！」
うん…もう突っ込むまい…
「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」
「「「「異端者には、死…」」」」
「明久に手出したら…」

『バギャンッッッ！！！』（ちゃぶ台が砕け散る音）

「こうなるからよろしく」
「「「「ＹＥＳ　ｓｉｒ！」」」」
「も、妹紅…」
「だって明久に…」
「それもだけどちゃぶ台…」
僕らの前には砕け散った妹紅のちゃぶ台…
「…」
「…」
「明久、ちゃぶ台一緒に使わせて…」
「別にいいけど…」
おっと次は僕か…う～んこの微妙な空気どうしよう…仕方ない…
「ーコホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね♪」
…ボケよう
次の瞬間、
「「「ダァァーーリィーーン！！。」」」
野太い男の大合唱。
「（言えるわけないだろう／／／／）」
「（明久ってそう呼ばれるのが好きなのかしら？）」
「（何言ってるんだ、あいつは／／／／）」
やばい、吐き気が…空気を変えるためとはいえやるんじゃなかった
…しかし妹紅と幽香と慧音はなんで顔赤いんだろう？
「？？？？？？？？失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお願いします。」
さぁ気を取り直して次は幽香だね
「風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ」

ふう、普通だ…
「あと、明久の幼馴染でもあるわ」
すっごい笑顔で言い放った…やっぱりこの人Sだ…僕が困るところをそんなに見たいのか・・・？
「くそう、なんで吉井ばかり・・・」
「あんな不細工が…」
うわ～みんなひどいや…精神的ダメージがやばい…
「あと、明久に手を出したら…」
？やばっ！？

『ゴウッ！！！』（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）
『バシッ！！！』（幽香の手をあわてて明久が止めた音）
「どうしたの？」
「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…でも手加減してたみたいだね…）」
「…仕方ないわね…「あの、遅れて、すいま、せん。」…」
「「「え？。」」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

第3話　自己紹介と粉砕されるちゃぶ台（後書き）

さて机が二つ犠牲になるところでした。
慧音の頬の血は気のせいさ…（ハハハ
ちなみにチョークとペンは相殺で粉砕しました。

第４話　理由と試験戦争（前書き）

ＰＶ２０００っていったころにはもう３０００行きそうだ…

第４話　理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。
走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？？？？？」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持った少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると１人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいるんですか？」

聞き方によっては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない
元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。
そんな彼女が学年最下位のＦクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その？？？？？？？振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして？？？？？？？」
やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…（プロローグ2参照
「明久…」
「大丈夫だよ妹紅ちょっとね…」
いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…
すると先ほどの姫路さんの発言に

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」
「ああ、化学だろ？あれはむずかしかったな。」
「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」
「黙れ一人っ子。」
「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「「「「異端者には…「昨日私は明久の家に泊まってたからあり得ないな」「ちょっ、妹紅！？」…チクショオオオオオオオ！！！！！」」」」
これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願いします！」
そう言うと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。
「き、緊張しました～～」
そう言って瑞希が卓袱台に突っ伏した。
「あのさ姫「姫路」・・・」
体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやがった…
「は、はい。何ですか？え～と・・・・」
「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」
「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。
「ところで体調もう大丈夫なの？」
「よ、吉井君！？」
声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだろう…ちょっと悲しい…
「姫路。明久がブサイクですまん。」
「そ、そんな！目もパッチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」
「そうね、女性に向かって蛆虫っていう奴よりははるかにかっこいいわね」
「うん、ゴリラよりは絶対かっこいいな」
「うぐっ・・・ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持ってる奴がいたな。」
「それって誰ですか！？」
雄二が言うと嫌な予感しかしないな…
「確か久保ーー」
「久保？」
「利光だったかなあ。」

久保利光ー♂（性別　オス）

…うん、だろうと思ったよ…
「…（ホッ」
「ゴリラ…」
「え？…」
「「覚悟はできてるか（わよね）？」」
「ちょっ！？」

「ほらそこ、静かにしなさい」
「あ、すいませ…」

『バキッ、パラパラ…』（教卓が残骸となった）

「…ちょっと、替え持ってきますね（あの学園長どうシメテくれようか…）」
「あ、手伝いましょうか？」
「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待っててください」
さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…
「・・・・雄二、ちょっといい？」
「ん？なんだ？」
暇になったからか欠伸をしている雄二に声をかける。
「ここじゃ話しにくいから、廊下で。」
「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」
「雄二この教室の設備なんだけど。」
「ああ、想像以上に酷いもんだな。」
「そこで僕からの提案。Ａクラス相手に試召戦争をやってみない？」
「・・・・何が目的だ。」
雄二が警戒するように目を細めてこちらを見る
「何がって、姫路さんと妹紅達のためだよ」
「……」
「あの教室じゃ体調崩すのは目に見えてるからね」

「お前…本当に明久か？」
「それどういう意味さ！？」
「まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Ａクラス相手に試召戦争をやろうと思ってた所だ。」
「え、どうして？」
「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」
「？？？」
「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

「ではクラス代表の坂本君、最後にお願いします」
雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。目立ちたがりだね～雄二
「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」
「じゃあゴリラで」
妹紅…
「所で皆に一つ聞きたい。」
そう言うと雄二は視線を巡らせた。
かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Ａクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・・不満はないか？」

「「「「大ありじゃぁっ！！！！」」」」

Ｆクラス魂の叫びである。ちょっと耳が痛い…

「だろう?俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・・Fクラスはｱクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう…すごく不安に感じる…

第４話　理由と試験戦争（後書き）

おまけ

「明久、ゴリラと何話してたんだ？」

「うん？あ～試験召喚戦争についてね」

「あら、楽しそうねそれ」

「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配なんだよ」

「「／／／／／／／／」」

「？」

第5話　戦力と観察処分者（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ゴシゴシゴシ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第5話　戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う！！」
壇上で自己紹介をしていた雄二のいきなりの提案。だが、いきなり言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。
「勝てるわけがない！」
「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」
「姫路さんが居たら何もいらない。」
「もこたん付き合って」
「断る」
「ゆうかりん罵ってください」
「……シニタイノカシラ？」
「うおおおおおおおおお！！！！！」
何だろう、カオスだ…
試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。
試験召喚獣は戦争中の道具と思ってくれていい。
しかし雄二の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。
片や2学年の成績が悪かった人たちが集まったFクラス。
片や2学年の成績上位の人たちが集まったAクラス。
戦力の差は明白だった。
「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる！」
しかし雄二は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放った。提案した僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか？
「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃っているからな。今からそれを説明してやる！」
そうゆうと雄二は少し間をおいて、ある一カ所を見た。
「土屋。畳に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてない

でこっちに来い」
「……！！（ブンブン）」
「は、はわっ！？」
「あらあら…」
「ゆ、幽香？…」
「？どうしたの明久？覗かれてないわよ？」
「……くっ」
「いや、よく手を出さなかったな～って…」
「…すぐに切れてると迷惑かけるもの…」
「そうか…」
まあ話は戻してっと、土屋は畳の跡を隠しながら雄二の元へと行く。
「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」
「……！！」
雄二の発言に、クラスのどよめきが走る。
彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムッツリーニとなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の対象として挙げられている。
「ム、ムッツリーニだと！？」
「馬鹿な、奴がそうだというのか！？」
「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ…」
「あぁ。ムッツリの名に恥じない姿だ…」
「……」
まぁ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思うよ…友人として
「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだって、その力は知っているはずだ」
「えっ？　わっ、私ですかっ！？」
「あぁ、主戦力だ。期待している。」
姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」
「彼女なら、Ａクラスにも引けをとらない」
「あぁ、彼女がいれば何もいらない」
「あと風見幽香もＡクラス並みの点数保持者だ」
「そうだ！！幽香様がいた！！」
「ゆうかりいいいいいいん！！！」
「明久…ねえあれヤッテイイ？」
「…ダメだからね？」
「藤原妹紅に関しても、古典、歴史関係はＡクラス並みだ」
「「「「もこた～～ん！！」」」」
「幽香の気持ちわかるかも…」
「アハハハ…」
「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」
Ａクラスの優子さんという双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。そして、雄二は…？
「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」
「それじゃあ、実力はＡクラスレベルが４人もいるって事かよ？もしかしたら、やれるんじゃないか？」
「あぁ、なんかやれそうな気がしてきた！」
やっぱ雄二は人をまとめるのがうまいな…こういうとこは悪友として認めてるんだけど…
「それに吉井明久もいる！」
その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言があるね…
静まりかえる教室…なんで僕の名前を言うかなぁ。
「誰だ？　吉井明久って？」
「知らねぇよ。」
雄二の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラスメイトはざわつき始めた。
「そうか、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、

学園史上初の観察処分者だ。」
雄二は僕を指さして言わなくてもいいことまで言った。雄二の奴・・・
・
「・・・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」
まぁ、普通そういう評価だよね…
「あぁ、学年１のバカの屑だ」
そこまで言うかこのゴリラ…
「ほう…ゴリラ…そんなに燃やされたいのか？」
「そうね…肉片にして花の肥やしにしようかしら…でも花がかわいそうね…」
「し、しかし明久は教師の許可をもらって俺たちより召喚獣扱ってる分操作技術だけなら学年１だ」
「それってすごいのか？」
「あぁ、盾くらいにはできる」
妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言いようだな…
「これだけの有名人が揃っているんだ。お前ら、勝って当然だろ？」
「そうだ！　これだけの人物がいるんだ！　絶対勝てる！」
「もしかしたら打倒Ａクラスも夢じゃない！」
「そうだ！　俺たちに必要なのは座布団じゃない！　リクライニングシートだ！」
まずは俺たちの力の証明としてＤクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ！？」
「「当然だ！！」」
「ならば全員筆を執れ！　出陣の準備だ！！」
「「おぉぉぉぉぉっ！！」」
「俺たちに必要なのは、卓袱台じゃない！　Ａクラスのシステムデスクだ！！」
「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」」
「お、おー・・・・・」
雰囲気に押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を

挙げる。

何だろう…僕には不安しかないよ…

第5話　戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…
ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは２０％くらいとします。
思いつき次第次話を投稿します。

第６話　宣戦布告とＵＳＣ（前書き）

幽香様降臨

第6話　宣戦布告とＵＳＣ

「明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」
「待った雄二。下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」
予想的中か…
「大丈夫だ、騙されたと思って行ってみろ。俺は友人を騙すような事はしない。」
「いや、よく騙すでしょ？」
「…じゃあ私が行こうか？」
「まて藤原、お前が行ったら…」
「だって危険はないんだろ？それなら問題ないじゃないか」
「そ、それは…」
はぁ、いくら嘘だってわかってても妹紅をそんなとこに行かせたくないしな…
「わかったよ…じゃあ僕が行ってくるよ」
僕は宣戦布告の為に教室を出た。さっさとすませよう。

ｓｉｄｅ妹紅
「さすが明久だな。簡単に騙されやがる」
ゴリラがクククと笑ってやがる…やっぱり…
「やはりそんな魂胆じゃったのか、雄二よ」
「それ以外何があるんだ、秀吉」
ため息をはきながら木下はゴリラに言った。やっぱりこいつ燃やすべきかな…でも
「だったら残念だったな、ゴリラ」

「？　何がだ。あとその呼び方はやめろ」
「だって幽香がついていったからな」
「？どういう意味だ？」
まぁ、明久もいるしそこまでしないだろう。

ｓｉｄｅ明久

さてＤクラス前に到着した…
「待ちなさい、明久」
「あれ？幽香どうしたの？」
「私も行くわ」
本当は断りたいところだけど、まぁ危険になったら庇えばいいか…
「失礼します」
「？誰、君」
ちょうどいいや
「ごめんだけど代表呼んでもらえるかな？」
「いいわよ、平賀君」
「？なんだい」
「あ、えっとＤクラスの代表ですか？」
「そうだけど…」
代表が疑わしい目でこっちを見てくる…さっさと言って帰ろう…
「えっとＦクラスはＤクラスに対して宣戦布告します」
「え？」
そりゃ驚くよね…
「おいお前ふざけてんのか？」
Ｄクラスの男子だろう…いきなりこちらを睨んできた。
それに従って複数人立ち上がってるし…ハァ…
「てかさ、こいつって確か観察処分者じゃね？」
『ピクッ』
「あ～あのバカの代名詞の？」

『ピクピクッ』
「そうそう、人間の屑の代表」
『ブチッ』
あっ…
「じゃあかたずけても問題な「ねぇ、貴方達…」なんだ？」
「代表と明久の話だから首を突っ込まないようしてたけど、貴方達常識ないの？」
ダメだ…笑顔なんだけど目が笑ってない…
「ましてや、さっきから聞いてれば明久の侮辱ばっかり…」
「お、お前何言って「私ね、自分のものが侮辱されるのはとっても我慢ならないの」「えっ、僕ってものなの？」えっ、え？」
「ということで…いい声で鳴いてね♪」
「ちょっ、ま…」

side妹紅

ぎゃあああああああああ…！！！！
「「「「！？」」」」
ものすごい悲鳴のするなか、私は落ち着いていた。
「やっぱりか…」
「…どういうことだ？」
「あいつはな自分のものに手を出されるのが大嫌いなんだ。おまけに…」
「おまけに？」
「ＵＳＣ（アルティメットサディスティッククリーチャー）、あいつの通称だ」
「え？だが学園ではそんな…」

「基本明久が押さえてたからな…だが堪忍袋も切れたんだろう、おもにお前が原因で」
「…」
雄二としてはさっきの悲鳴は明久のものであってほしいと思ったんだろう…
するとドアが開いて…
「お、下ろしなさい／／／／／」
「下ろしたらまた暴れるでしょ？」
明久が幽香をお姫様だっこして現れた……いいな…

ｓｉｄｅ明久

ふう…なんとか被害を抑えることができた…
「大丈夫か？明久」
「うん、まぁ幽香が暴れたので助かったよ…止めるのに時間かかったけど」
「吉井～」
島田さんがなんか腕を掴んでくる…てか、かなり痛い！！！！！
「ちょっとさっきのどういうことか聞きた「「それより前に放せ（放しなさい）」」わ、わかったから首掴まないで…」
「大丈夫か？明久よ」
「秀吉…うん大丈夫だよ」
なんか向こうでいざこざが起こってるけど無視だ…
「それより坂本君、貴方…」
「よーし！　ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋上に行くぞ！」
あ、逃げた。まぁ、あの状態の幽香を相手にしたくないのはわかる…
はぁ、先が思いやられる…

第6話　宣戦布告とUSC（後書き）

さて書き忘れてましたが慧音は職員室に戻っています、授業の用意で。

「ほう…忘れるとはいい度胸だな…」

え?慧音さん…角が…てかなんで襟首を…

「教育的指導だ!!!」

いやあああああああああああ!!!!!!!

第7話　ミーティング（前書き）

後書きで投票があるのでよろしくです。
あ、あと妹紅の男口調とかですが、一応キャラがわかりやすいよう書くためにそうしています。原作では妹紅って女口調なんですよね～
あと、明久は東方キャラに対しては基本呼び捨てです。

第7話　ミーティング

「……（サスサス）」
「ムッツリーニ。覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるよ？」
「……！！（ブンブン）」
「いや、今さら否定されてもムッツリーニがＨなのは皆知ってるから」
「……！！（ブンブン）」
「ここまでバレてるのに否定し続けるなんてある意味凄いと思う」
「……！！（ブンブン）」
「――何色だった？」
「姫路が水色、風見が…見えなかった（クッ」
「いやそこまですらすら言えてる時点で…」
「？私のがどうしたの？（ニコッ」
「……次こそは…」
「明久じゃないと無理よ」
「え？」
ナニヲイイダスンダコノヒトハ…
「だって明久、お風呂一緒に入ったことあるじゃない（ニヤニヤ」
…うん…ＵＳＣですねわかりますｏｒｚ
「何…だと…？」
「いやｔ「吉井、どうい「はいはい話は最後まで聞こうね」ちょっはな…」…」
「まぁ小さい頃の話だし、それ言ったら私だってあるしね。露天街あるし」
妹紅…それ庇えてない…
「皆の衆ここはどこだ？」
「「「審判の法廷」」」
「男とは！！」

「「「「！『愛』を捨て『哀』に生きる者成りッ！」」」」
「これより審判を行う」
「ハイ、被告人吉井明久は風見幽香とお風呂に…」
「簡潔にのべたまえ」
「実にうらやましいであります！！」
『『『『我等異端審問会の血の盟約の下、異端者に死をッ！！死をッ！！』』』』
うわ…変な黒い集団が…ゴキ○○を思い浮かべてしまった…
「とりあえず、しになさい」
「とりあえず消えろ」
「「「「「ぎゃあああああああ！！！！」」」」」

屋上に出ると、雲一つ無い空から眩しい光が差し込んでくる…
ムッツリーニ…努力はいいけど…スカートの中を覗こうと頑張るのはどうかと…

「さてと。明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろし、僕達も各々その辺に座る。
「うん、一応今日の午後に開戦予定と告げてきた」
「それじゃ、先にお昼ご飯って事ね？」
「そうなるな。だからしっかりと腹ごしらえしとけよ」
「明久、はいこれ」
幽香が僕の弁当を渡してきた。あれ？なんで…
「台の上に忘れてたわよ？」
「あ、そうかありがとう。危うく飯抜きになるとこだったよ」

「あの…」
「どうかしたか？」
「いや、風見さんと藤原さんのお弁当の中身が似てるんですけど…」
「「そりゃ、明久が作ったからね（からよ）」」
「まぁ、たまに作ってもらったりしてるしね」
「そうですか…」
あれ…何だろう、気のせいかな？今一瞬、姫路さんの方からドス黒いオーラを感じたんだけど…。

「で、どーゆー事なのよ吉井？」
「あの、島田さん。何故質問しながら僕の腕を極めようとするのかな？」
「いいからさっさと質問に――待って藤原さん、ウチの首は１８０度曲がったりしないから勘弁して欲しいんですけど…」
「だったら、とっととその殺気を引っ込めて腕を放してもらおうか？」
「つーか明久お前料理なんてできたのか？」
「それってどういう意味さ」
「お前去年、飯食ってなかったじゃねえか」
「一時期、昼飯を水と塩で乗りきってた事もあったしのう」
「……舌が肥えてるとは思えない」
「そうね。絶対にあり得ないわね」
うわ…ひどい言われようだ…まぁ事実そんな時期もあったけど…とりあえずその時の慧音と永林の説教はきつかったと記そう・・・（ガクガク
「すごくおいしいわよ？」
「そうだな、私達もよく味見たのんでるし」
なんか褒められると、少し恥ずかしいな…
「あの、吉井君」
「ん？」

そんな中、さっきまで考え事をしてた姫路さんが口を開く
「宜しければ私のお弁当も食べてくれませんか？」
「え、どうして？」
「是非吉井君に味見をしてもらいたいんです」
「いつ？」
「明日のお昼で良ければ」
「う～ん、まあいいけど」
問題はないかな？
「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井『だけ』に作ってくるなんて」
「あ、いえ！その、皆さんにも…」
「俺達にも？いいのか？」
「はい。嫌じゃなかったら」
「おお、それは楽しみじゃのう」
「……（コクコク）」
「……お手並み拝見ね」
僕は小物系作ってくるかな…

「さて、明日の楽しみが出来た所で、話を戻そうか」
あ、そーいえば試召戦争のミーティングやってたんだった。すっかり忘れてた。
「雄二よ。一つ気になっていたんじゃが、何故Ｄクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならＥクラスじゃろうし、勝負に出るならＡクラスじゃろう？」
「そういえば、確かにそうですね」
「坂本君の事だから、何か考えがあっての事だと思うけど」
「まぁな。理由は色々あるんだが、とりあえずＥクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」
「え？でも僕達よりはクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かったかもしれないな。けど実際の所は違う。周りにいる面子をよく見てみろ」
えーっと……
「うん。幼馴染みが二人と美少女が一人、親友が一人にバカが二人にムッツリが一人いるね」
どれが誰かは言わなくてもわかるだろう…
「誰が美ｓゲフッ」『ドゴッ』
「で、それがどうしたのかしら（ニコッ」
何か言おうとした雄二を妹紅が殴り、幽香が話をそくした。

「ま、要するにだ。姫路に問題の無い今、正面からやり合ってもＥクラスには勝てる。Ａクラスが目的である以上はＥクラスなんかと戦っても意味が無いって事だ」
「？、それじゃあＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」
「ああ。確実に勝てるとは言えないな」
一応ちゃんと考えてたのか…
「まぁこれも打倒Ａクラスへの必要なプロセスだからな問題ない」
内容が気になる所だけど、今は戦争に集中しなきゃいけないからね。
ま、その時が来たら解るか。
「あ、あの！」
？どうしたのかな？
「ん？どうした姫路」
「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」
「ああ、それか。それはついさっき明久に相談されて「それはそうと！」」
雄二は何言うかわからんから発言させるか！！
「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」
「心配いらん。負ける訳ないさ。お前達が俺に協力してくれるなら、どこが相手だろうと必ず勝てる」

「いいか、お前達。ウチのクラスは――――最強だ」

聞いた限りかっこいいんだけど、心配ごとしかないのはなんでだろう…

第7話　ミーティング（後書き）

闇魔さまこと映姫に関してですが外見案で
1幼女
2明久と同じくらいの少女
3お姉さま
結果は決まり次第お伝えします

第8話　Dクラス戦1（前書き）

PV1万突破…突破記念短編考えなきゃ

第8話　Dクラス戦1

ｓｉｄｅ幽香

ついに始まったわねDクラス戦…
私は今Fクラスにいる。戦線に出ないのかって?明久から謹慎処分喰らってるのよ、仕方ないじゃない…
「・・・・・・今前線部隊と敵が衝突中」
「状況は?」
「・・・・・・今のところ互角」
Fクラスの一応リーダーである坂本は土屋から状況報告を受けている…しかし彼どうやって状況を調べてるのかしら…監視カメラや盗聴器は破壊したはずなんだけど…
「そういや風見」
「何かしら?」
「お前、補給テストは…」
「ある程度だけど受けてるわ」
「…いつの間にだ?」
「途中退席をした次の日よ。あぁ、明久と妹紅も受けてるから問題ないわ」
まさか次の日に慧音と永林がテストを受けさせてくれるとは思わなかったわ…
どうも永林はそれについて慧音に連絡したみたいだけどね（プロローグ2参照
しかし暇ね…戦線に出たいけど謹慎喰らってるし…明久から喰らってるから破れないし…よし、日曜日の弾幕勝負で勝ったら明久に何頼むか考えよう…ふふ、そう考えると時間が足りないように思えるわ…

ｓｉｄｅ明久

どうもこの小説の主人公こと明久です。え？出だしいがおかしいって？ＨＡＨＡＨＡ何を言ってるのさ

「明久、お願いだから現実に戻ってきて」

「ハイ」

ただ今の現状

『さぁ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だぁっ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『それは教育じゃなくて洗脳…だ、誰か、助…イヤァァァ（バタン、ガチャ）』

やばいすごく逃げ出したい…

「ところでテストやっぱり適当に受けたの？」

「妹紅口調昔みたいになってる。周りにとって僕は『勉強のできない観察処分者』だからね。」

「誰も聞いてないから問題ないわよ…でもどうするの？」

「やるしかないでしょ、ちょうど古文だしいくよ！妹紅」

「…はぁ、わかったわよ…いくぜ、明久！！」

「Ｆクラス吉井明久と」

「藤原妹紅！」
「「ここにいるＤクラス全員に対して、勝負を申し込む！！試験召喚獣召喚！！！！」」
僕達が手を合わせるようにあげると足元から、魔法陣というべきだろうか…幾何学模様の図形が現れ、その後召喚獣が姿を現した。
僕の召喚獣は改造学ランに木刀を持った犬耳に尻尾がついたデザイン、妹紅が、ワイシャツにもんぺを穿き（早い話元の妹紅の格好）、白猫の耳としっぽがついたようなデザインだ。
「いくよ！」
「いくぞ！」
「たかだかＦクラス二人だ。一瞬でつぶすぞ！！」
「ましてや一人は観察処分者！！」

古文
Ｆクラス　吉井明久　６２点
Ｆクラス　藤原妹紅　３１７点
ＶＳ
Ｄクラス　モブｘ１０人　平均１０１点

「「「「な、何だあの点数！！？？」」」」
「ちぇ、やっぱちゃんとできなかったから４００点行かなかったや」
「でも高得点には変わりないよ」
「ひ、ひるむな！！数でつぶすぞ！！」
「「「「お、おう！！！」」」」
「そんなに甘くないっての」
妹紅はてのひらから火を出し、それをばらまいた…
「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」
Ｄクラス４名　０点　戦死
やっぱすごいな…おっと
「妹紅危ないよっと」

僕は妹紅の後ろから襲おうとした二人に対して足を引っ掛け、一人は首、一人は心臓付近を切りつけた
Dクラス2名　0点　戦死
「「え・・・なんで？」」
どうも召喚獣も人と同じようで人体急所を攻撃すると差がひどくない限りは一撃で倒せるみたいだ…
同じ要領であと4人を倒し「「「「戦闘描写すらなしかよ！！」」」」…ハイハイ鉄人お願いしますね～「「「「いやあああああああ！！！！」」」」前線部隊はまだ先みたいだしな…よし、
「妹紅…」
「なんだ？」
「前線部隊のところまで行く間にどっちが多く倒せるか勝負しない？」
「お、それ楽しそうだな。じゃあ私が勝ったら今日の晩飯慧音と一緒に食おうぜ」
「？いつものことじゃ…「いいんだよ」そう、じゃあ…」
「くそ、こいつらなめてんのか？」
「妹紅…」
「おう」
「ゲームスタートだ！！」

なんか、弾幕勝負を思い出すな…
あ、日曜幽香に弾幕勝負挑まれたの思い出しちゃった…ｏｒｚ

第8話　Dクラス戦1（後書き）

フラグ（いろんな意味で）回収っとちょっとですが、明久のことが出ましたね～
明「まだ内緒ごとはあるんだけど後に書くんでしょ？」
書けるかな・・・（遠い目
明「ちょっと！？」

ＰＶ１万記念短編　向日葵の記憶（前書き）

３日目で１４０００越えって…
題名から誰のことかわかるかもしれませんがどうぞ

ＰＶ１万記念短編　向日葵の記憶

それはホントに偶然だったのかもしれない……でも私は後悔していない…

それはホントにただの気まぐれだった…

「さて水をあげに行こうかしらね」
私はいつものように向日葵畑に出た。
「あら？」
するとそこには5、６歳くらいだろうか、茶髪の少年が空いた場所に座り込んでいた…
いつもなら追い返すけど、今日はなんだか気分がいいし…話しかけてみようかしら…
「あら？人間の子供がなんのようかしら？」
「え…」
いきなり声をかけられたことに驚いたのだろう…その子はびっくりしたように振り返った…
「…」
見ようによってはかわいらしい顔立ちだろうか…しかしそれよりも私が見入ったのは…その瞳だった。
濃いめの茶色…どこにでもいそうな色だったが、
深かった…まるで吸い込まれるような…すべてを見透かされるような…そんな瞳をしていた…
私はそれに見惚れ、そして恐怖した…
こんな子供が…ここまで深い思いを瞳にうつせるものなのだろうか…

「お姉さん誰？」
…いけない…思考にふけるとこだったわ…
「名前を聞く場合、自分から言うのが礼儀ってものよ？」
「あ、それもそうか…ぼくは吉井明久っていうんだ」
「明久ね…私は風見幽香よ」
「へ～」
どうも名前を知らないみたいだし…外来人かしら…
「明久、気をつけたほうがいいわよ？」
「何を？」
とりあえず…
「ここにはね…とっても怖い妖怪が現れるのよ」
「じゃあ、ここを出なきゃかな…」
「そうね…だから早く…「こんなところで妖怪現れたらはお花がかわいそうだもんね」え？」
この子なんて…
「前ね、蜘蛛の妖怪に襲われたんだけどすごくでかくてね、あんなのが現れたらお花さん倒れちゃうよ」
聞き間違いじゃないか…しかしこの子はバカなのだろうか…自分のことより花を心配するなんて…
でも…
「じゃあ、またねおｎ「まちなさい」？」
「私の家すぐ近くだし、お菓子食べに来る？」
「え…でも」
「大丈夫よ、妖怪が来ても私が追い払うし（まぁ、自分のことなんだけどね）」
「う～ん、じゃあ行こうかな」
笑顔で喜ぶ明久…ふふ、まぁ、いい暇つぶしにはなるでしょうね…
それからも明久はちょくちょくとここの遊びに来るようになった…
そして、いつの間にか私も明久が来ないかと楽しみになっていた…

でも、ある意味予想できて、起こってほしくなかったことが起きた…

「新しい妖怪が幻想入りした？」

そうそれは明久と会って数カ月たった時、八雲紫の一言が始まりだった…

「そうなんだけど、どうもこの妖怪ね、人の話を全く聞かないのよ…」

「なんでそんなのを…」

「まぁ、そんなんだから気をつけてね～」

あ、逃げた…

昼頃・・・

早く行かないと…今日は明久が向日葵畑で待ってるんだった…

その時、私は気づいてしまった…向日葵畑に感じたことがない妖力を感じることに・・・

（まさか!!朝紫が言っていた妖怪!?急がなきゃ!!）

そこに着くと、明久とあれは…鬼?でもなんか違うような…

「コドモ、ウマソウナコドモ。」

その鬼?はまるで踊るかのようにはしゃいでいた…あ…

「な、やめろ!!花が傷つくじゃないか!!」

「ハナ?コレ?ジャマクサイナ…」

その妖怪は向日葵をまるでごみをのけるかのごとく、棒でなぎ払った…

あの妖怪…コロス…

私は、あのごみを消すために傘を構えようとした…

「…やめろ…」

『ゾワッ』

「「！？」」
な、まさか私が一瞬死を覚悟するなんて…何！？
「この花達は幽香が毎日頑張って育てたものなんだ。それに気安く触れるな！！」
「・・・・・・」
明久の茶色だった瞳は、青く、蒼く…あわく虹色に輝いていた…周りを包むような殺気。でも矛盾して周りを守るように包み込む優しい雰囲気…
あぁ、そうか…
「フ、フザケルナアアアア！！」
妖怪は明久に恐怖したことが許せなかったのか、明久に飛びかかった…
『ガツンッ』
「なっ！？」
しかし…棒を振り下ろすもそれは…私の傘によって止められていた…
「ナ、ナンデオマエモヨウカイナノニ…」
「えぇ、確かにそうね…でもあなたは私の育てた花を傷つけた…」
私は…相手に向けて傘をつきつける…
「ましてや…私のモノに手を出したんだから…」
「覚悟はできてるわよね？」
「ヤ、ヤメ・・・」
「…消えなさい…」
「マスタースパーク…」
「あれ？」

「あら？起きたの？明久」
「えっと・・・なぜ僕は膝枕されてるのでございましょうか？」
時折この子の思考がわからないわね…
「貴方、私が来なかったらどうする気だったのかしら？」
「あ、そうか僕妖怪に襲われて…」
「ねぇ、明久…」
「なに？」
「これからも貴方は多分妖怪から襲われかけたりすると思うの」
「うん…」
「だから…逃げる手段として私が特訓してあげるわ…」
「えっ・・・」
ふふふ、なんか不思議な気分ね・・・
「ちなみに拒否権はないわ・・・明日の朝から始めるからちゃんと来なさいね？」
「・・・はいｏｒｚ」
ほんと明日から楽しみだわ。
思えば、この時…いや、明久を見つけた時から、私は明久だけを見ていたのかもしれない…

「…夢…みたいね」
はぁ、まさか明久と会ったころの夢を見るなんて…／／／／
でも、もうあの頃から明久は力に目覚める兆しがあったのよね…
今日は始業式だし、明久を起こしに行こうかな…

「おじゃまします。明久、起きなさ～い」
……
まだ寝てるみたいね…

私は明久の部屋の行こうとしたとき、リビングにある花に気づいた…
「…ふふ」
それは昔、明久にあげた花…あげた時から今まで植えかえしながら、
ちゃんと育てているらしい。
胡蝶蘭…清純、純粋という花言葉を持つ花…
でも、明久のことだからもう一つの意味には気づいていないだろう
…この花をあげた本当の意味に・・・
もう一つの花ことば、それは…

あなたを愛してます

ＰＶ１万記念短編　向日葵の記憶（後書き）

どうでしたでしょうか…
時期的には第１話の直前です。
ちなみに向日葵の花ことばには「私の目はあなただけを見つめる」
というのもあるそうです

第9話　Dクラス戦2（前書き）

とうとう彼女が…うまく書けるかな…

第9話　Dクラス戦2

明久と妹紅が勝負をしている頃前線部隊では、

「さすがに押されてきたわね…」

「そうじゃのう…仕方ない…みな、助けが来るまでなんとか耐え凌ぐのじゃ！！」

「「「「イエッサ！！」」」」

美波と秀吉が指揮をとり何とか耐え凌いでいた…

「あ、そこにいるのはもしや美波お姉さま！五十嵐先先生、こっちに来てください！」

戦場に響き渡る声に、美波は顔色を青くする。

「くっ！ぬかったわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「お姉さま…私はお姉さまから捨てられた日から何が悪いのか考えたんです。そしてわかりました、お姉さま私はお姉さまだけを愛しているということを！！」

「美春…だから言ってるでしょ！！ウチは普通に男が好きなんだって！！」

「いえ、お姉さまも美春のことを愛してるはずです。ただ美春がお姉さまだけを愛さなかったから美春を捨てたのでしょう。だからここで言います、美春はお姉さまだけを愛してます」

「人の話を聞いてないでしょ！？あんた」

「…なんじゃろうか…帰ってもよいか？」

「き、木下！！手伝いなさい！！」

「はあ・・・しかたな「殺します…邪魔するものは殺します…」本気で帰ってはだめか？」

「き、木下～！？」

「では、お姉さま行きます！！試験召喚獣召喚」

「あ～もう、試験召喚獣召喚」

科学

Ｆクラス　島田美波　５２点

ＶＳ

Ｄクラス　清水美春　７８点

このままではやられてしまう。そしたら補習室に・・・・・・

「い、いや！　補習室は嫌っ！」

このまま戦えば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻撃が単調になる。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を与えた。

戦死した、と思った美波であったが

「え？」

島田美波　６点

点数が僅かに残った。どうしたのか困惑していると

「フッフッフ・・・・・・」

『ガシッ』

突然美春が美波の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行こうとしていた。

「ちょっと！　どこに連れて行こうとしているの！」

「どこに？　愚問ですわ、お姉様・・・・・・」

ゆっくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません！　さぁお姉様！　美春と共に大人の階段を上りましょう！」

目を爛々に輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよ！　前から言っているけど、ウチは普通に“男”が好きなの！」

「大丈夫です、お姉様！　初体験は怖いかもしれませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ！」

「い、いや！」

「無駄ですわ、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません！」

美春の言うとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。秀吉もいつの間にか現れたDクラスの生徒に苦戦している。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいの

か。八方手詰まりだった。それでも誰か助けてくれると信じて美波は助けを求めた。

「た、助け…」

「さあ、美春と一緒に…「「邪魔だ!!!どけ～」」」え?」

いきなり現れた召喚獣に切り裂かれ、ついでのごとく燃やされ美春の召喚獣は…

清水美春　0点　戦死

「な、何が起こったのですの?」

その先の戦場では、

「ははは、燃えろ!!」

「「「「ぎゃあああああ!!!!!」」」」

「…斬る…」

「「「「うわあああああああ!!!!」」」」

「戦死者はほしゅうううう!!」

「「「「いやあああああああ!!!!」」」」

明久と妹紅の召喚獣によってどんどん倒され、鉄人に補修室に運ばれるDクラスの面々だった…

ｓｉｄｅ明久

とりあえずここにいた相手は全員倒したかな…

「よし、明久!!討伐数を確認するぞ!!」

もこた…妹紅…討伐数って…

「えっと僕は17人かな…」
「…やったあああ!!勝った、18人!!!」
「うん、おめでとう」
「明久、約束だからな!!」
「ふふ、わかってるよ」

妹紅たら子供のようにはしゃいでるや・・・

「明久、たすかったぞい」
「あ、秀吉。気にしないで」

気づいてなかったなんて言えない…

「よ、吉井…」
「し、島田さん?」
「とりあえず助かったわ」

そこには燃えつきかけた島田さんがいた…

第9話　Dクラス戦2（後書き）

なんていうか…突破短編で燃え尽きた…
ちなみにですが、短編のほうには明久の能力の一つが少しだけ出てます

第１０話　Ｄクラス戦ラスト　あとはよろしく（前書き）

私的ことですが・・・
空の境界は神作品だと思う！！！

第１０話　Ｄクラス戦ラスト　あとはよろしく

Ｄクラス付近

さすがに点もやばくなってきたな…

「明久、どうする？」
「僕たちはまだ問題ないけど、さすがにみんながやばいね…」
「おい、やばいぞ！！Ｄクラスの野郎船越先生を呼んできてやがる」
船越先生といえば数学・・・くっ、点数的にもうみんなやばくなってるはず

「須川君何とかして船越先生の進行を止めるんだ！！」
「了解」

これが成功するかしないかで現状も変わるはずだ！！

ｓｉｄｅ雄二

風見が手洗いに行っている間に暇だな～と思っていると須川が教室に入ってきた。

「坂本」
「？須川どうした？逃げてきたのか？」
「いや、吉井から船越先生のＤクラス行きを止めろ、と言われたんだがどうしたらいい？」

「そりゃ、放送で…」
そう言えんば…ククク、ちょうど風見もいないことだし、
「須川、・・・・・・・・・・と放送で流せ（ニヤ」
「・・・了解だ（ニヤリ」
ククク明久がどんな目にあうか楽しみだ

雄二が死亡フラグを立てているころ

ｓｉｄｅ明久

『ピンポンパンポーン♪』
《連絡致します》

あ、なんか声変えてるけど須川君か？放送とは考えたね。

《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

よしこれでみんなの補給テストの時間が作れ・・・

《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「・・・え・・・？」

船越先生
数学担任の４５歳独身

仕事にのめり込み過ぎて婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に単位を盾に交際を迫る様になったと噂の人・・・

「な、なんてこった・・・Fクラスの野郎ども勝ちにきてやがる・・・」

「くそ、自分の身を捨てるなんて、こんな奴らに俺たちは勝てるのか？」

なんかDクラスが言ってるけど無視だ！！ヤバイヤバイヤバイ！！！

《繰り返・・・『ドゴーンッ』なっ！！え、ちょ、やめ・・・・》

『ぎゃあああああああああああ！！！』

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

《・・・コホン、さっきの放送に訂正を入れるわ。船越先生、体育館裏に須川を置いておくから好きにしていいわよ》

（（（（須川お前のことは忘れない・・・））））

《あと・・・坂本雄二・・・クビヲアラッテマッテオキナサイ！！！》

あ、雄二終わったな…

「明久、私も行っていいかしら？（ニコッ」

「妹紅・・・ダメだよ・・・」

今は戦争に集中しよう・・・

「吉井！！」
「横田君？どうしたの？」
「（な、名前が出た～）Ｄクラスの代表の隊が、隙を見てＦクラスに向かっているらしいぞ！！」

な、さっきに放送で見逃してしまったか！？

「みんな！！急いでＦクラスに戻るよ！！」
「「「「了解！！」」」」

Ｆクラスに戻ると・・・・

「・・・・・・・・・・」
「チョット、マッテテモラエルカシラ？」
「「「「は、はい」」」」

すごい笑顔の幽香と、

ぼろぼろで虫の息の雄二と、

幽香の殺気おびえているDクラス代表の隊がいた…

「え、え～っと」

「あ、え、Fクラスの先行隊も戻ってきたみたいだが、さすがにこの人数に相手は無理だろう?」

あ、代表として何とか立て直したね。

「確かに僕たちじゃ無理だね」

「なら「だから、」ん?」

「「姫路さん、あとはよろしく」」

僕と妹紅がそう言うと

「あ、あの・・・」

平賀君（Dクラス代表）の後ろから、申し訳無さそうに姫路さんが肩を叩いた。

「え?あ、姫路さん。どうしたんですか?Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど…」

「い、いえ、そうじゃなくて…」

「?」

「え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代文で勝負を申し込みます」

「はぁ…、どうも」

「あの、えっと……さ、試験召喚獣召喚（サモン）です」

「え?あ、あれ?」

平賀君、驚いてて頭が追いついてないな・・・

現代文
Ｆクラス　姫路瑞希　３４５点
ＶＳ
Ｄクラス　平賀源二　１２８点

「ご、ごめんなさい！！」

姫路さんの召喚獣は平賀君の召喚獣を大剣であっさりと、斬ってしまった。

こうして、Ｆクラスの勝利は決定した。

第１０話　Ｄクラス戦ラスト　あとはよろしく（後書き）

ふう、なんとかここまで書けた・・・
あとは戦後対談だ
戦後対談には少し日常編を入れる予定です。

第１１話　Ｄクラス戦　戦後対談（前書き）

今のとこの優勢ですが

台詞の前には名前をつけない

映姫の外見は明久くらい

です。まだまだ投票は受け付けてるのでどうぞ。

第１１話　Ｄクラス戦　戦後対談

戦後対談したいんだけど…

「・・・・・・・・」（ボロボロの雄二）

「フフフフフフフ・・・・・・」（目が狂気に染まってる幽香）

・・・これ、どうしよう・・・

「えっと・・・」

「あ、平賀君ちょっと待っててね」

「あ、あぁ」

さて、まずは・・・

「妹紅、幽香を止めるから雄二を起こして」

「・・・とどめさしちゃだめ？」

「今はいる人間だから普通に起こして」

「・・・わかった」

さてと・・・

少年少女作業中

Ｄクラス

「／／／／／／／／／／／／／／／／」（只今、明久に後ろから抱きかか

えるように抑えられている）
「（いいな・・・）」（その状況をうらやましそうに見ている）
「（はぁ、明久に奴は…）」（ＦＦＦ団を押さえながらもちょっとうらやましそうに見ている）
「ちょっ、ふ、藤原さん。あ、足ほどいて・・」（明久に尋問しようとしたとこを妹紅に四の字固めされている）
「「「「「・・・（呪呪呪呪呪）」」」」」（明久に襲いかかりたいが慧音がいるため出来ない）
「・・・」

うん、カオスだな～（お前が言うか！？ｂｙ作者）

「え、えっと・・・」
「あれは無視しろ・・・」（気絶していたところを、妹紅に思いっきり腹を蹴られて悶絶しながらも復活）
「あ、あぁ」
「じゃあ、対談と行こうか・・・」

でもよく雄二、幽香の攻撃に生き残れたな…やっぱり前より幽香、手加減うまくなったのかな？

「まさか姫路さんがＦクラスだったなんて・・・・・信じられん。」
気を取り直したように平賀君がつぶやいた。

「あ、その、さっきはすいません・・・・」

別の方向から瑞希が駆け寄っていって源二に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラス負けた、ということでクラスメイトに恨まれながら過ごす羽目になるが、

「いや、その必要はない。」

雄二はそう言い放った。

「何？」

「Dクラスの設備を奪うつもりは無いからだ。」

雄二の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが・・・・いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

そう言って雄二が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろうが悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そうだろう。うまくやれば厳重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を呑もう。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰っていいぞ。」

交渉は成立した。

「ああ。お前らがＡクラスに勝てるよう願っているよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思ってるんだろ？」

「はは、そうだ。Ｆクラスがクラスに勝てるわけがない。ま、社交辞令だ。」

そう言うと源二は去って行った。

「さて、みんな！今日はご苦労だった！明日は今日消費した点数の補充を行うから今日は帰ってゆっくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻っていく。

「さ、帰ろうぜ明久」

「あ、うん。帰ろうか」

「そ／／／そうね／／／／／」

僕たちは帰路につくのだった・・・

慧音&妹紅宅（正確には部屋かな？）

「ただいま」

「あ、慧音おかえり」
「ただいま、妹紅。うん？明久がいるのか？」
「あぁ、今ご飯作ってる」
「そうか、じゃあ着替えてくるかな」
「おう。私は手伝いしてくるよ」

リビング

「「「いただきます」」」

「今日は明久悲惨だったな・・・」

慧音の一言で今日の放送を思い出してしまった・・・

「慧音・・・それは言わないで。ホントにヤバいって思ったから・・・」
「あぁ・・・もうちょっと力こめとければよかった…」
いや・・・ダメでしょ・・・
「さすがに限度ってもんがあると思うぜ？あのゴリラのはふざけてるにしても度が過ぎる」
「（ふむ、原因は坂本か・・・）まぁ、船越先生には隣の草部さん（４９歳独身）を紹介しといたから大丈夫だろう・・・」
「・・・」
「ん？どうした？明久」
「あ、ありがとうけいね～～！！！」

『抱きッ』

「なっ、あ、明久／／／／／／」
「（いいな・・・）」
「うぅ・・・」
「・・・・・・もう・・・」（なでなで）
キングクリムゾン！！
「・・・ごめん取り乱しちゃって・・・」
や、やばい。つい安心から慧音に抱きついてしまった・・・
「まぁ、気にするな／／／／」
「そうそう。あれは仕方ないよ」
「うん・・・」
「明日は・・・・・補充試験をやって終わりかな？」
ご飯も食べて二人でゲームしていると、妹紅がそんなことをつぶやいた
「うん、たしかそれだけじゃなかったかな？」
「だったよね」
「あ、そうだ。明久、妹紅、幽香にはもう伝えているが、明日の弁当は私が作るから楽しみにしていろ」
「やった」
「うん、楽しみに待ってるよ」

さて時間はっと・・・

「時間も時間だしそろそろ帰ろうな・・・」
「え、泊ってて構わないわよ」

やっぱ家だと口調も崩れるみたいだね・・・

「え、でも」
「ん？私もかまわないぞ」

慧音・・・先生としてそれはどうかと・・・
でもま・・・

「じゃあ泊っていこうかな？」

そのあと、妹紅と慧音とでゲームをしてリビングに布団を敷いて寝た・・・

ホント、なにか忘れているような・・・

第11話　Dクラス戦　戦後対談（後書き）

おまけ
朝・・・

「・・・」（チラッ）
「・・・・（スゥ・・・」（右　慧音
「・・・・う・ん・・（スゥ・・・」（左　妹紅
「・・・・どうしてこうなった・・・」

第１２話　恐怖！大量殺戮科学兵器（前書き）

つ、ついにあれが…

第１２話　恐怖！大量殺戮科学兵器

慧音＆amp;妹紅宅　　朝

何とか二人の拘束から抜け出した僕は、

「昨日は出来なかったからね…」

ベランダで座禅をしていた。

本当は身体を動かしたいけど…さすがに無理だからね、イメージトレーニングだけでも…

数時間後

「明久、ご飯食べよ」
「あれ、もうそんな時間？」

妹紅の声によって空想世界から現実に引き戻される。

「慧音は？」
「明久の邪魔しちゃ悪いからって声かけずに行ったよ」
「そう…まぁ、ご飯食べようか」
「うん」

その後、幽香を呼んで僕達は学校に向かった。

キングクリムゾン！！

お昼

なんか作者の陰謀を感じた…

「明久、行くぞ」

いけない、話を全く聞いてなかった…

「行くって、何処に？」

「吉井…あんた今日姫路さんから試食頼まれてるの忘れたの？」

「「あ、あぁ」」

「って、お前らもかよ」

「でもどうしようか、明久」

「そうよね…」

「ん？お前らどうかしたのか？」

『ガラッ』

「あ、藤原さん達、ちょうどよかった」

タイミングよく慧音がやって来た。

「はい、藤原さん、風見さん」

「「ありがとう」」

「なんだ、お前ら上白沢先生から作ってもらったのか？」

「一緒に住んでるしね」

妹紅達に弁当を渡した後慧音は僕に近づいてきて、

「はい、吉井君の分です」

「ありがとうございます。上白沢先生」

「「「「なっ、何だと!!??」」」」」

みんな何驚いてるんだろう?

「吉井…」

「…何かな?島田さん」

「どういうことかしら?」

「い、いや足を掴みながら聞く事じゃ…」

「大丈夫よ、いｔ「大丈夫じゃないからはなせ…」わ、わかったからはなし…」

た、助かっ…

「「「「「手作り弁当…」」」」」

「……妬ましい」

「「「「「異端者には死を!!」」」」」

「ハイハイ、ジャマヨ」

「「「「「ぎゃあああああああ!!!!!」」」」」

このクラスは本当に大丈夫なんだろうか…

「…あ、てがすべった」

『バッ』（雄二が弁当を叩き落とそうとする）

『パシッ』（慧音がその手をキャッチ）

「えっ」

『ドガッ！！』（一本背負い）

「げふ…」

「いけませんよ？坂本君」

「アハハハ…」

時間は消し飛ぶ！！

屋上

「では皆さん、どうぞ」

試食するって言った以上食べないとね。

「……いただき（スッ」

「あ、ムッツリーニ意地汚いぞい」

『パクッ、ドサッ！』

…えっ…

「どうかしましたか？」

「（スクッ）…『グッ』」

「あ、そうですか」

…

（あれどう思う？）

（わざと…じゃないな…）

（ていうより…）

やっぱり気のせいじゃないか

（（（この弁当…薬品臭が…））））

「さ、あ、明久早く喰えよ」

「な…」

雄二の野郎わかってて…

（逝ってこい）

「さぁ、吉井君どうぞ」

「え、えっと…」

「ドウゾ…」

姫路さんの目からハイライトが…くっ…

た、助けて！えーりん！！

『ガチャ』

「なんか吉井君のＨｅｌｐがきたから登場」

頭に浮かんだ言葉を心の中で叫んだら永琳が来た。

「や、八意先生…どうしたんですか？」

さすがに永琳の登場に雄二達も驚いているようだ

「…」

状況確認中

「姫路さんだったわよね？弁当に何入れたの？」

「え、えっと酸味が足りなかったので…」

「硫酸を…」

……は？

「…試食は？」

「食べたら太るのでしてませんよ（ニコッ」

『ブチッ』

「ちょっと姫路さん、こっちへいらっしゃい…」

「え？先生？」

『ズルズル』

「「「…」」」

『きゃあああ…』

「…とりあえずご飯食べようか」

「うん」

「そうね…」

うん、姫路さんに料理させたら危険だ…

第１２話　恐怖！大量殺戮科学兵器（後書き）

まさかの永琳登場。

まだまだ続く。

第１３話　日常？（前書き）

幽香の召喚獣の腕輪の能力どうしよう・・・
妹紅のは考えたんだけど…

第１３話　日常？

まさかの永琳の登場により命の危機を脱した僕であるが・・・

「さて・・・吉井、八意先生とはどういう関係かしら？」

「あと、上白沢先生もです」

島田さんと姫路さんに（悪いほうで）迫られ、

「「「「あんな美人の先生達と知り合いとは・・・」」」」

「「「「うらやま・・・恥と知れ！！！」」」」

「多数決を取る、ここで死刑とする・・・・」

「「「「賛成！！！！」」」」

ＦＦＦ団に囲まれ…僕は十字架に縛られている・・・

幽香と妹紅は慧音からの頼まれごとでいないし、やばいな・・・

くそ、あそこでニヤついている雄二がむかつく

「「ちゃんと躾しなきゃよね（ですよね）」」

いや僕は悪いことしてないし、二人のペットでもないし

「「「「異端児には死を！！！！」」」」

君たちは黙ってろ

「明久」

「何さ・・・雄二」
「今だから言っておく」
？
「俺はお前の幸せがとっても大っきらいだ！！」
「あんた最低だな！！！」
どうする・・・
「では火ｗ「貴方達・・・何をしているのかしら？」へ・・・？」
「「「「あ・・・・」」」」
「私言ったよな・・・明久に手を出したら容赦しないって・・・」
Ｆクラスの入り口には不死鳥の雛と・・・ＵＳＣが立っていた・・・
数分後
「明久、大丈夫か？」
「あ、うん縛られただけだからね」
目の前にはＦクラスだった物の山・・・あ、雄二原形すらとどめてない。
「ロープ解くぞ～」
「うん、わかった」
はぁ、やっと解放される・・・！？

「も、妹紅ちょっとま・・・」

幽香が姫路さんと島田さんを睨んでて前に・・・ダメだ、気づいていない！！

「え？」

『シュルッ』

現実とは無情にもひもは解け・・・

僕は・・・

「幽香危な・・・」

「え？」

『ドサッ。ポフッ』

幽香を押し倒すように倒れた・・・

はて、何か柔らかいものが・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・えっと・・・・」

・・・うん・・・現実を認めよう・・・

これは・・・幽香の胸だ

「／／／／／！！？？／／／／／／／」

『ドンッ』（幽香が明久を弾き飛ばし）

『ビュン！！』（蹴りを放つ音）

僕が悪いのはわかってるけど、平手じゃなくて蹴りってどうなのよ・・・

『ゴッグシャッ！！！』

あ・・・しｒ・・・

・・・なんか後頭部に柔らかいものが・・・

あ、僕死んでなかったんだね・・・

「ここは・・・」

「あ、明久おきたのね」

「幽香？」

「その・・・さっきはごめんなさい。いきなり蹴り飛ばして・・・」

「気にしないで。僕が悪いんだし、それより・・・」

なんていうかちょうど胸（ゲフン、ゲフン）　幽香を見上げるような感じになってるけどもしかしてこれ・・・

幽香を見上げている＋後頭部に柔らかい感触＝膝枕ＯＫ？

・・・

「あ、動いちゃだめよ、永琳いわく一応安静にしなさいらしいから」
「でも・・・」

あれが・・・

「大丈夫、妹紅が牽制してるわ」

向こうを見ると、僕に飛びかかろうとしているＦＦＦ団と姫路さんと島田さんを妹紅が足止めしていた
あ、雄二（ニクノカタマリ）が動いた

「じゃあもうちょっと休むよ」
「えぇ、おやすみなさい」

・・・

時間はけし飛ぶ！！

学校終了後

三人で帰宅中

「あ、いけね・・・筆箱教室に忘れてきちゃった」

「まっとこうか？」
「いや、先に帰ってて大丈夫だよ」
「わかったわ、とりあえず急いでね」

さてと、学校に戻らなきゃ・・・

少年移動中

Fクラス

『ガラッ』

「筆箱はっと」
「よ、吉井君！？」
「あれ？姫路さん？」

どうしたんだろう・・・

「どどどどどどどどどーしたんですか？」
「いや、筆箱を忘れたから取りに・・・・・何でそんなに慌ててんの？」
「べべべべ別に慌ててなんかいましぇんにょお！？」

い、いや噛みすぎだから・・・

ふと姫路さんが座ってる席（ちゃぶ台）を見ると、卓袱台の上に何やら可愛らしい便箋と封筒が。

「あ、あのっ、これはっ、その――ふあっ!?」

あ、こけた。

?これは手紙?

《貴方のことが好きです》

えーっと……、これは俗に言うラブレターという奴……だよね?実在したんだ…。

「えっと・・・」

「／／／／／／」

まあ誰かに送るってことだよね、秀吉かな?まさか・・・雄二?

見たものは仕方ない、素直に聞こう

「その人のどこがいいの?やっぱり外見?」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あっ、勿論外見も好きですけど!」

「へぇ～、そりゃ羨ましい限りだね。外見に自信の無い僕にとっては」

「えっ?どーしてですか!?とっても格好良いですよ!私の友達も結構騒いでいましたし!」

「え?ホントに?随分酔狂な友達なんだね」

自分で言うのもなんだけど

「良く分からないんですけど、吉井君が坂本君と二人でいる姿を見

ては『逞しい坂本君と美少年の吉井君が一緒に歩いてるのって絵になるよね』ってよく言っていました」
「び、びしょ？はは…、何か照れるな。お世辞でもうれしいよ」
「『やっぱり吉井君が『受け』なのかな？』とも」
「前言撤回。その友達とは距離を置こう。姫路さんにはまだ早い」
婦女子なのか！？

「それに…」
「……まだ何か？」
「『吉井君って女装が似合いそうだよね』とも」
「姫路さん、その友達とは今すぐ縁を切ろう。間違いなく君を駄目にする」
「私も最近、何となくそう思えて来ました」
「しっかりするんだ姫路さん！君はそっち側に行っちゃいけない！」
やめてくれ！！仕事だから我慢して女装したことはあったけど、精神的にあれはきついんだ！！
いかん！！話を変えねば

「そ、それにしても姫路さん、外見『も』って事は、中身が良いの？」
「あ、えーっと……はい……」
なんとかそらせた…

「その人のどんな所が良いの？」
「や…、優しい所とか……」
「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……、私の憧れなんです」

強い思いを瞳に感じる・・・ほんとに好きなんだな・・・

さてと筆箱ももう回収してるし、あとは帰るだけなんだけど・・・

「姫路さん」
「は、はい」
「その手紙、良い返事が貰えると良いね」
「……はいっ！」

命短し、恋せよ乙女ってね。

おまけ　自宅にての会話

「そう言えば明久」
「？何、幽香」
「蹴ったとこ大丈夫かしら？」
「うんあの程度なら大丈夫だよ」
「そう・・・」

あ、そういえば・・・

「そういえば・・・」
「？どうしたの？」
「いや・・・なんかおぼろげなんだけど・・・蹴られるときに白いものが見えた気が・・・」
「・・・忘れなさい」
「え？」

「忘れなさいって言ってるの！！！／／／／／／／」
「わ、わかったけどなんで・・・」
「だ、黙りなさい！！！」
なんか今日は怒られてばっかだな・・・・

第１３話　日常？（後書き）

ちょっとラブレターの日をずらしました、理由？何となくです。
わ、忘れてたわけじゃないんですよ！？

第１４話　Ｂクラス戦１（前書き）

やっぱ平日は忙しいから書く時間が少ないな・・・
まあ休日も忙しい時もあるけど。
前話の色ですが、友人の完璧な趣味です
オリジナル技ですが、技名とどんな感じの技か、については友人と
頑張って考えました。

第１４話　Ｂクラス戦１

Ｆクラス

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

翌日、昨日から跨いでやっていたテストがようやく全科目終了。

大体平均６５位かな？

「午後からＢクラスとの試召戦争に突入する訳だが、殺る気は充分か？」

『『『『おおぉぉぉぉーーーーっ！！！！』』』』

殺る気って・・・あ、ちなみにＢクラスの宣戦布告は須川君が（幽香に脅されて）行きました。

予想どうり雄二は僕を行かせようとしたみたいだけどね

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負ける訳にはいかない」

『『『『おおーっ！！！』』』』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取って貰う。野郎共、キッチリ死んでこい！」

「が、頑張ります」

『『『『うおぉぉぉぉーーーーっ！！！！』』』』

姫路さんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮。

その姫路さんは、そんな皆のノリに追いていけないらしく若干引き

気味だ。まぁ、それが普通だよね。

「先陣は・・・」
「僕と幽香と妹紅とで行くよ」
「じゃあそれで頼む」
「了解」
「前回は出来なかったけど楽しみね」

幽香・・・なんていうかごめんね・・・

『キーンコーンカーンコーン――』

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」
『『『『サー、イエッサー！！！！』』』』

昼休み終了のベルと同時に、ダッシュで教室を飛び出してBクラスへ向かって全力疾走。敵を教室に押し込む事が目的なので、とにかく勢いが重要となる

「ま……待って…、下さ～～い…」

だからいきなり指揮官が出遅れてるけどもいちいち構っていられない。
さっき雄二も言ってたけど、渡り廊下の戦闘は絶対に落とせないから、戦力も五十人中四十人を注ぎ込んで勝ちに行く。その代わり教室がほぼスッカラカンになっちゃうけど。

今回のこちらの主武器は数学。Ｂクラスは比較的文系が多いのと、担当教師の長谷川先生は広範囲の召喚フィールドを展開出来るという理由だ。他にも、英語Ｗの山田先生と物理の木村先生もいる。

「いたぞ、Ｂクラスだ！」
「高橋先生を連れているぞ！」

数は大体十人程度。あくまで様子見って所かな？

「いくよ！！」
「「「「「おぁ！！！！」」」」」

Ｂクラス戦が開始された。

総合
Ｂクラス　モブＡ　１９４７点
ＶＳ
Ｆクラス　モブＡ　７２３点

数学
Ｂクラス　モブＢ　１３７点
ＶＳ
Ｆクラス　モブＢ　６８点

物理

Bクラス　モブC　１４０点
ＶＳ
Fクラス　モブC　７１点

圧倒的だ・・・「「「「「「「ていうか、あつかいひどくないか！！！？？？」」」」」」」

なんか叫んでるけど無視して早くフォローしなきゃやばい！！

「幽香！！妹紅！！・・・いくよ！！」
「えぇ、わかったわ」
「わかった！！」

「「「サモン！！」」」

前回僕と妹紅の召喚獣は説明下から省くとして、幽香の召喚獣は・・・うん私服（原作以下略）に傘を持ってる。あとなんていうか、トラ耳と尻尾って・・・・

気にしないでおこう・・・相手は、っと

英語W
Fクラス　風見幽香　３４５点
ＶＳ
Bクラス　モブD　１２１点

数学

Ｆクラス　藤原妹紅　１９８点
ＶＳ
Ｂクラス　モブＢ　１１９点

妹紅は得意科目じゃないけど点数が勝ってるから問題はないかな・・
・えっと僕は、っと

物理
Ｆクラス　吉井明久　７１点
ＶＳ
Ｂクラス　モブＮ　１８８点

ローマ字が飛んだだと・・・

まあ冗談はほどほどにして、

「「「おい待て!?なんだよあの点数!!??」」」
「なんかホント驚いてばっかだな」
「まぁ、いいじゃない」
「お～い二人とも僕の心配はしないんだね・・・」
「「当り前でしょ（だろ）」」

ですよね～まぁ・・・

「勝てないこともないけどね」
「な、雑魚のくせに!!」

あれは・・・ハルバートかな?それで相手が斬りかかってくるけど

「ほいっと」

『ガッ、ドカッ』

「な・・・・」

先端付近を地面に抑え込めばなれない操作じゃ動かせないからね。

「ほら、隙だらけだよ」

『ズバッ！！！』

モブＮ　１０９点

やっぱ一撃じゃ無理か・・・なら召喚獣でもできるか練習として

「・・・散れ」

ｌ閃鞘・散華時雨ｌ

まるで雨のごとく高速で刺突を行う・・・この技の利点は密度を調整して、小範囲か広範囲かわけれるとこである

モブＮ　０点　戦死

「な・・・負けた？」

「嘘だろ！？あんな明らかに雑魚っぽい吉井の召喚獣にやられるなんて！？」

「気を引き締めろ！奴らをただの雑魚だと侮るな！Ｄクラスに勝ったのはマグレじゃないかもしれない！」

うん・・・あんまり上手く出来なかったな・・・要練習だ

「お、やっぱり勝ってるな」
「うん、妹紅も勝ったみたいだね」
「当り前だ」
「明久・・・さっきの技・・・」
「ん？あぁ、やれるかやってみたんだけど要練習だね」
「あれでか・・・」

だって違和感があるんだもん

「す、すいません・・・遅くなりました・・・」

あ、やっと追い付いたみたいだね。って
「姫路さん、大丈夫？」
「何なら少し休んどく？」
「だ、大丈、夫、です。行って、来ます」

まぁ、見た感じ大丈夫かな？

「き、来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かの叫びに、他のメンバーの目付きが変わった。明らかに姫路さんを警戒しているね

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です（な、名前出してもらえた・・・）。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」
「律子、私も手伝う！」

「「「試獣召喚！」」」

Ｂクラスも必死みたいだね・・・でも・・・

数学
Ｆクラス　姫路瑞希　４１２点
ＶＳ
Ｂクラス　岩下律子　１８７点
Ｂクラス　菊入真由美　１５２点

うわ・・・姫路さん４００オーバーだ。ってことは・・・

「あ、腕輪だ」
「あ、はい。数学は結構解けたので…」

一科目４００点以上点数を取ると、特殊能力を持った腕輪が使える様になる。その腕輪が姫路さんの召喚獣の左手首に装備されている

「そ、それって！？」
「私達で勝てる訳無いじゃない！」

向こうの二人が姫路さんの腕輪を見て顔色を変える。
別に腕輪を持ってるからと言って絶対に勝てないとは限らないと思うんだけどな・・・
戦い方次第じゃ圧倒的実力差も覆す事だって難しくない。『戦闘』において一番大事なのは『戦術』じゃなくて『戦略』、要するにどう戦うかだし

「じゃ、行きますね」

姫路さんが手を握り込むと、その動きに合わせて姫路さんの召喚獣が標的の方へ左腕を向けてる。

これって・・・

「ちょっ、ちょっと待ってよ！？」

「律子！とにかく避けないと――！」

大袈裟な位に慌てて横っ飛びする二体の敵召喚獣。しかし

『キュボッ』

「「きゃあああ」」

岩下律子　０点　戦死

菊入真由美　０点　戦死

うわ・・・レーザーって・・・しかも2体とも黒墨だし、しかも一撃だよ・・・

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ、そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Ｂクラスに動揺が走る。

でもあれは仕方ない・・・てか姫路さんの召喚獣の能力怖すぎ・・・

避けきれるかな？

「み、皆さん、頑張って下さいー」

「や、姫路さん？その指示は指揮官としてはどーかと…」
「うおっしゃあぁーっ！」
「やったるでぇーっ！」
「姫路さん愛してるうううう」

馬鹿ばっかだ

「さて、僕達も行こうか」
「そうね」
「あ、姫路さんは休んでていいよ。疲れてるだろうし、腕輪で結構点消費してるでしょ？」
「あ、はい」

戦場の流れもこっちに傾いたし大丈夫だろう

「あれ？妹紅は？」
「妹紅なら教室に戻ったわよ」

え？

「なんで？」
「・・・Bクラスの代表根本らしいわよ」
「・・・・あぁ、あいつか・・・」

根本恭二、一言で言えば『卑怯者』。
噂では『カンニングの常連』だとか、『球技大会で相手に一服盛った』とか、『喧嘩に刃物は当然装備（デフォルト）』そして幽香たちにもかなり迷惑をかけた男子だ。

「なるほど。たしかにあいつなら何かしそうだね」

「私達も一応戻ってみる？」

「うん」

ホント、なにもなければいいんだけど・・・

第１４話　Ｂクラス戦１（後書き）

今すごく悩んでいる・・・
根本のとどめ誰で刺そう・・・

番外　キャラ紹介　東方編（前書き）

今のとこ出たキャラについて書きます。書き足し予定ありです。
友人と一緒に考えながら書いてたらカオスに（笑）
おもにキャラでの変更点とかを書くのであしからず

番外　キャラ紹介　東方編

藤原　妹紅
読み　ふじわら　もこう
能力：死なない程度の能力
スタイル：身長は１５７　男子制服でわかりにくい、貧ｎ「Ｃくらいあるわ！！／／／／」（作者はログアウトしました
外見：白い長髪に赤い目、基本シャツにもっぺを穿いている。
学生服はスカートが慣れないとのことで男子の制服（生徒手帳には一応女子の制服で写っている）
召喚獣の能力：『リザレクション』
１００点消費することで戦死した時、元の点数から２００点引いた状態で復活できる。（ただし腕輪は召喚してすぐにしか発動できない点数：古典、歴史に関しては４００点を超えることも。
しかし地理は苦手で５０台常連。ほかの教科は１００~２００台である
口調：基本男口調だが時折女口調になる
設定：幻想郷で明久が初めて会った住人。どうも明久を放置できなくて関わっていくうちに「明久がいる＝妹紅もいる」と言われるほど身近な人間になった。
料理の腕前は普通で、ちょくちょく明久の家に泊まりにいっている。
自分が不老不死であることを明久にばれた時、明久とある約束をしている。
明久のことは大切な友人であり大好きな人であり、とりあえず彼を傷つけるものに対しては容赦がない。
恥ずかしい思い出は、お風呂に明久が入ってることに気づかず入ってしまったこと（その後二人で入ってたそうだ
バカとテストと召喚獣　《パラドックス》　等の作者ゴートンさんからの絵です

＞ｉ３７４６２―４２５１＜

風見　幽香

読み　かざみ　ゆうか

能力：花を操る程度の能力

スタイル：身長は１６３　トップ８９のＤ「・・・ちょっと話があるんだけどいいかしら・・・」

外見：緑色の髪を肩にかからない程度に伸ばし、紅い目。よく傘を持ち歩いている

召喚獣の能力：投影

５０点の消費でもう一体召喚獣を作ることができる。しかしその召喚獣は１つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える

点数：全科目３００点越えというオールマイティ。強いて言うなら歴史と古典がたまに４００点を行く。

しかし、社会の倫理のが大の苦手でほとんど点を取ることができない。

口調：基本丁寧語時折命令系

設定：実は幻想郷で最初の明久の被害者（向日葵の記憶参照）。

花の妖怪だけあって花が大好きで傷つけるものには容赦がない。

明久のことはよくからかったりするが、攻められると弱いみたいで、時折暴力をしてしまい落ち込んでしまったりしている。

明久のことは自分のものと言ったりしているが「明久の相手は明久本人が決めること」と思っている。

恥ずかしい思い出は、多すぎてわからないそうだ（ある意味明久のナイスエッチの一番の被害者

上白沢　慧音

読み　かみしらさわ　けいね

能力：歴史を食べる（隠す）程度の能力：人間時　歴史を創る程度の能力：ハクタク時
スタイル：身長は１６７（帽子を入れて１７５行かないくらい）・・・大きいです「だまれ！！／／／／」
外見：少し水色を帯びた銀髪の長髪に黒っぽい瞳（人間時）と薄い緑の長髪に赤い瞳と・・・角（ハクタク時）。尻尾もある
教科担当：歴史
口調：学校では敬語、基本は中性的な話し方
設定：幻想郷の寺子屋の教師だが監視を理由に文月学園の教師をしている。
ワーハクタクだけに運動能力は高い。
お仕置きは基本拳骨、明久達には拳骨では効きにくいので頭突き。
明久のことは出会ったころは姉として面倒を見ていた。
自分が半妖であること知られることを恐れていたがバレてしまう。
しかし態度を変えずいつもどうり接する彼に思いをぶつけるも明久に「そんなことは関係ない、僕は好きで慧音といるだけだよ」と言われて以来、自分が半妖であることを引け目にとらなくなった。
恥ずかしい思い出は、宴会の時酔った勢いでハクタク化し、明久のファーストキスを奪ってしまったこと。（本人は記憶がなく妹紅経由で聞き１週間ほど目があわせられなかった
この頃の不安は何かしらと暴走するＦクラスである。

八意　永琳
読み　やごころ　えいりん
能力：あらゆる薬を作る程度の能力
スタイル：身長１６６　すごく・・・大きいです「あらあら」
外見：銀髪の長髪を三つあみにしており鈍い銀色の瞳。赤と青の半々の不思議な服を着ている（学校ではその上に白衣）
教科担当：保健医　保健体育（実際は全科目担当可）

口調：学校では敬語　基本は丁寧語
設定：温和で優しい性格をしているが、怒ると怖い・・・。
幻想郷で医者をしながらも明久のために（本人は問題ないと言うがよく怪我をするため）文月学園の保健医をしている。
天才であり点数はほぼつけようがなく、制限をしている（それでも勝てる人はほぼいない）。
明久については自分達を完全に殺すことができる存在という意味で興味を持っていたが自分の過去、罪について聞いても態度を変えない人間性に女性として興味を示した（本人いわく）。
その外見、スタイルからファンクラブ等も多いが「明久君以外にはあんまり興味はないの」と断っているそうだ。
明久が「助けて！！えーりん！！」と心の中で叫ぶとどこであろうとどこからともなく現れる。
恥ずかしい思い出は、酔った勢いで明久を誘惑しようとしてしまったこと。（しかしある意味これで吹っ切れたとも彼女は言う

十六夜　咲夜
読み　いざよい　さくや
能力：時間を操る程度の能力
スタイル：１６４　スタイルは、少しいおっきい？ＰＡＤではない！！「死になさい・・・」
外見：肩にかからないくらい銀髪にもみあげあたりに三つ網にしてリボンで縛っている。目は基本青みがかった黒で、能力発動時赤になる
召喚獣の能力：ナイフの設置と操作
指定した場所にナイフを設置したり、飛び方や動きを制御できる。
しかし途中変更はできない。
（ナイフは能力関係なく点数消費なしで無尽蔵に出せる模様）
点数：全体的によく高得点だと６００に行くこともある
口調：年相応だが丁寧語もつかう

設定：明久とは紅魔館編で出会い、年も近く主であるレミリアを救ってくれた恩人であり、彼女いわく一目ぼれらしい。明久の投擲技術を教えた先生であり今ではともに切磋琢磨している。紅魔館の皆のことを家族みたいに思っているが、明久のことに関しては譲る気はないらしい。

恥ずかしい思い出は、明久と弾幕勝負をしているとき、胸元の服が破けてしまい、あまつさえ吹き飛んだ反動でそこに明久をダイブさせてしまったこと（この後明久は頬に大きな紅葉をつくった）

番外　キャラ紹介　東方編（後書き）

・・・これはひどい・・・

幽香に関してですが・・・歌のネタです！！

第１５話　Ｂクラス戦２　『アキ』（前書き）

友人と明久の能力やお話について話してたら・・・結果

影月・友人「「うわ・・・中二病くせぇ・・・」」

気を取り直してどうぞ

第１５話　Ｂクラス戦２　『アキ』

教室にたどり着くと

「お前達、覚悟はできているな」

「「「「補修はいやだあああああ」」」」

Ｂクラスの生徒だろうか・・・鉄人に連れて行かれた

「お、明久」

「妹紅、これは・・・」

そこには壊されたちゃぶ台、ペン漁られたカバンが散らばっていた・・・あ、僕達のとこはまだ何もされてなかったみたいだね

「ごめん・・・私が来た頃にはあいつらがいて・・・それに一人逃げられちゃった」

「大丈夫よ、被害をここまで抑えられただけよかったと思いましょ」

「うん、一応何か取られたりしていないか確認しよう？」

「「うん（そうね）」」

うん何も取られてないな。あれはずっと身に着けてるしね。

僕は首にかかってるひし形の結晶思い浮かべた

「どうした？何かあったのか？」

「って雄二どこ行ってたの、危うくもの全部壊されるとこだったじ

ゃないか・・・」
「これは・・・」
「Bクラスだよ」

どこに行ってたのか知らないけど雄二達と秀吉が帰ってきたので簡単に状況を説明した

「被害は少ないが確実に補給テストに響くのう」
「まぁそれはそうと、何でゴリラは教室から離れたりした訳？」
「その呼び方はやめろ。いや、向こうから協定を結びたいという申し出があってな。その調停の為に教室を出ていた」
「協定？」
「ああ。『四時迄に決着が着かなかったら戦況はそのままにして、続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』ってな」
「それ、承諾したの？」
「そうだ」
「何で？体力勝負に持ち込んだ方がこっちとしては有利なんじゃ――」
「姫路以外は、な」
「「「あっ」」」
「奴等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日という事になる。その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」
「なるほど、だから受けたのかしら？姫路さんが万全の態勢で勝負出来る様に」
「そういう事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」
「うーん…」

なんか引っかかるな・・・

「どうした明久？バカのくせに悩んだりなんかして」
「雄二バカは余計だよ。いや、なんかこう引っかかるものがあってさ・・・」
すると
「確かにそうね・・・こんなことをするようなあの小物がこんな対等な条件の協定をただで出すとは思えないわね」
「とするとなんで・・・」
「吉井、ここにいたか！！」
いきなりの来訪者の声が教室に響いた
「どうしたの？横田君」
「実は島田が人質に捕られた」
「「「「「はぁ！！？？」」」」」
器物破壊の次は人質！？てか島田さんなんで指揮官頼んできたのに人質になってるのさ！！
「お陰で相手は残り二人なのに攻めあぐねている。どうする？」
「わかった、とりあえず状況確認に行こう」
なんにしても急がなきゃ・・・
Bクラス前付近の廊下

そこには島田さんの召喚獣を人質に取る2人のBクラスの生徒がいた。

「そ、そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

敵さんの一人が僕達を牽制してくる。成る程、ただ戦死させるんじゃなくて、人質を取って補習室送りをチラつかせてこっちの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。

科目は・・・歴史か・・・なら

（幽香・・・）

（・・・わかったわ）

「ど、どうする？これじゃ手が・・・」

「総員突撃用意！」

「「「「「え！！！？？？？」」」」」

「ちょ、それでいいのかよ？あっちには島田さんがいるんだぞ！？」

「戦場では犠牲はつきものだよ。1人のためにみんなを危険に合わせるわけにはいかないからね」

「確かに明久の言うとおりだな」

「ええっ！！ちょっと！？」

あともうちょっとかな？

「ちょ、ちょっと待てお前達！！」

「ほらぁ、あっちからもちょっと待ったコールが掛かってるじゃな

いか。もう少し考えてからでも遅くは…」
「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」
「バカだから？」
「バカだからでしょ？」
「バカだからじゃないの？」
「殺すわよ」
「明久に何かしようものなら逆にやるわよ？（ニコッ」
「幽香押さえて！！じゃあ、なんで捕まったの？」

まあ聞いてみるか

「コイツ、『吉井が怪我した』って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」
「えっ！？島田さん……」
「な、なによ／／／」
「怪我した僕に止めを刺しに行こうとするなんて、あんたは鬼かぁ！！」
「違うわよ！！ウチがあんたの様子を見に行っちゃ悪いっての！？これでも心配したんだからね！！」
「……島田さん、それマジ？」
「そ、そうよ。悪い？」
「へっ、やっと解ったか。それじゃ、大人しく・・・」
「『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから」
「「・・・総員突撃！！」」

ちょ妹紅、幽香！？

「何で！？」
「そんなあからさまな嘘に騙されて部隊に迷惑掛ける様な奴は要ら

ん！！居ても足手纏いだ！！」
「お、おい待てって！見捨てるのか！？そんなあっさり味方を見捨てるのか！？」
「黙りなさい！！さぁ、そいつにはもう人質としての価値は無いわ！大人しく往生しなさい！！」
「くっ、畜生っ！だったら望み通り、コイツを道連れにしてやるよぉ！！」

！今だ！！

「幽香！！」
「・・・了解したわ」

いや・・・しぶしぶと言わないでね・・・

Bクラスの二人と島田さんの間に2人の幽香の召喚獣が現れる

「「え？」」

歴史
Bクラス　鈴木二郎　３３点
Bクラス　吉田卓夫　１９点
ＶＳ
Fクラス　風見幽香　４１２－５０点ｘ２

「ダブルスパーク」

２本の砲撃が一瞬にして相手の召喚獣を消し飛ばした

幽香の召喚獣の能力・・・それは『投影』

５０点の消費でもう一体召喚獣を作れる。しかしその召喚獣は１つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える。

「戦死者は補習ぅぅぅ！！！」
「ぎゃぁぁぁ！！！」
「助けてぇー！！！」

打ち取った瞬間、鉄先生に担ぎ上げられて連行されるＢクラスの２人。
ふと思ったんだけど、鉄先生はどーやって戦死者の存在を察知してるんだろ？身体のどっかに『戦死者察知センサー』でも着けてるんだろーか？

それより・・・

「島田さん・・・」
「吉井！！よくも見捨てようと・・・」
「・・・ちょっと歯を食いしばりなさい」
「え？」

『パァン！！』

「！？」

いきなり幽香にひっぱたかれたことによって島田さんは目を白黒させる

「貴方ね、敵の偽情報に踊らされたばかりか、指揮官が持ち場を離れるとはどういうことかしら？明久はあなたを信じて指揮を任せて行ったのに、危うく部隊が全滅するとこだったのよ？」

「だ、だって吉井が・・・」
「そんな物理由にならないわ。貴方のその身勝手な行動が、部隊全体を危険に巻き込んだのよ?分かっているの!?」
「ぁ・・・・・ぅ・・・」
「さっき言った台詞、アレは芝居でも何でもないわ。自分本位な事しか考えない様な奴は、居たって邪魔になるだけだわ・・・足手纏いなのよ!!」
「幽香!!」
「・・・ちょっと頭に血が上ってたわね・・・ごめんなさい」

そう言って幽香はみんなを連れて教室に戻っていく・・・ハァ・・・

「島田さん・・・」
「・・・・・・」
「あ~、ごめんね島田さん。幽香って興奮し過ぎると口調が乱暴になっちゃうから…」
「・・・・・・」
「でもさ・・・、幽香の事、あんまり悪く思わないであげて。あれでも島田さんの事、かなり心配してたみたいだからさ・・・。だから」
「分かってる」
「え?」
「風見さんが言ってた事、間違ってない。ウチは取り返しのつかない事を仕出かす所だったんだ。叩かれて当たり前よ」
「島田さん・・・」
「・・・」

うぅ・・・空気が・・・よし

「だ、大丈夫だよ!失敗は誰にだってあるんだからさ!また次の機

会にこの汚名を挽回すれば良いじゃないか！」
「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だったと思うけど？」
「あれ？そーだっけ？」
「全く…、何でウチでも知ってる様な熟語を日本育ちのあんたが知らない訳？」
「ぐっ・・・」
「・・・・・ふふっ」
「ほ、ほら島田さん掴まって！僕達も早く教室に戻ろうよ！」
「あ、誤魔化した」
「気のせいです」

ふう、なんとかなった・・・

「吉井・・・・・」
「ん？何？」
「ごめん」
「良いよ、別に。島田さんが無事で良かった」
「あと・・・・ありがと・・・」
「うん・・・」

やっぱりお礼いわれるってちょっと恥ずかしいな

「ねぇ、吉井」
「な、何？」
「今度からさ『アキ』って呼んでも良い？」
「え？」
「ダメ？」
「いや、ダメでは無いけど…」
「その代わりにさ、ウチの事も『美波様』って呼んでも良いから」
「僕だけ様付け！？」

「ふふっ、冗談よ、冗談。」
「島田さんの場合、冗談には聞こえないんだけど・・・」
「じゃなくて？」
「・・・美波」
「うむ、よろしい」

なんか嬉しそうな雰囲気だな・・・

「ほら、皆きっと待ってるよ？早く行こ、アキ♪」
「おわっ！？ちょっ、島・・・美波、そんな引っ張んないで！」

ま、元気になってくれたし、良っか。

第１５話　Ｂクラス戦２　『アキ』（後書き）

いつもこれなら・・・
いや言うまい

第１６話Ｂクラス戦３　小物の罠（前書き）

よし、ある程度どうするかは決まった！！後はそれを書けるかだ！！
無理だ・・・
明「あきらめるのはや！！？？」

第１６話Ｂクラス戦３　小物の罠

さて協定どうりＢクラス戦は明日まで持ち越しになったけど・・・

「Ｃクラスが試召戦争の用意を始めているだと？相手はＡクラスか・・・いやそれはないだろうから。
漁夫の利を狙うつもりか・・・いやらしい連中め」

ムッツリーニの情報いわくＣクラスが怪しい動きをしているらしい
Ｃクラス・・・あれ？なんか大切なことを見落としてる気が・・・

「で、どうするんだ？」
「協定を結ぶか。ま、Ｄクラスを攻め込ませるぞって脅しをかければいいだろう」
「わかったわ」

Ｃクラスと協定を結ぶということになり、雄二、僕、幽香、妹紅、ムッツリーニで行くことになった。
姫路さんと秀吉は教室で待機してもらっている

少年少女移動中

Ｃクラス

「失礼するぞ。すまないがＣクラス代表はいるか？」
「私だけど、何かようかしら？」

僕たちの前に出てきたのはＣクラスの代表の小山さんだった

あれ？人の気配が・・・！！！

「Ｆクラス代表としてＣクラス「ちょっと待って雄二」ん？どうした」

「えっと小山さん」

「何かしら？」

「あそこに誰を隠してるんですか？」

「！？な、何を言ってるのかしら？」

そうだ・・・Ｃクラスといえば・・・

「言い方が悪かったかな？根本君そんなとこに隠れてないで出てきたらどう？」

「なっ！！」

根本君と小山さんは・・・付き合ってるんだ

ｓｉｄｅ雄二

な・・・何言ってんだこのバカ？根本がここに・・・

「っちばれたか、おい坂本を逃がすな！！やれ！！」

なっ！？マジでいただと！？

「っち！妹紅、ムッツリーニ！雄二を連れて逃げて！！！」

「・・・・・了解」

「わかった。明久気をつけろよ」

「大丈夫だよ。幽香足止めするけど手伝ってくれる？」

「聞かなくてもわかるでしょ？」

藤原と風見も入った時から戦闘態勢だったが・・・

「ほら、代表行くぞ。お前が戦死したら困るんだ」

「あ、あぁ・・・」

明久お前・・・なんなんだ？

ｓｉｄｅ明久

さてと、雄二も逃げたことだし

「根本君、約束を破るなんてひどいじゃないか」

「うるせぇ！！お前ら！！こんな雑魚早くつぶせ！！！」

「・・・・・・」

「ゆ、幽香？」

「・・・大丈夫よ。さ、行きましょう明久」

「だね」

「「サモン！！」」

数学

Ｆクラス　吉井明久　６８点

Ｆクラス　風見幽香　３１２点

ＶＳ

Ｂクラス　モブｘ１０　平均１７２点

「「「「な、なんだよあの点数」」」」

「こいつら驚くしか脳ないのかしら・・・」

「あはははは・・・・」
「怯むな!!数でつぶせ!!」
「「「「「「おぉ!!!!!!」」」」」」

あら?根本君がいない・・・うわ・・・逃げてるよ・・・

「明久、少し時間作ってくれないかしら?一気に吹き飛ばすから」
「了解、じゃあ行くよ!!」
「な、吉井が一人で突っ込んできたぞ?」
「は、あんな雑魚すぐつぶしてもう一人を一気につぶすぞ!!」

はぁ、ひどい言われようだな、ホント

「・・・散華時雨」

【閃鞘・散華時雨】、刺突の密度を調整することで範囲を調整することができる。
だから・・・

「な、近づけねぇ」
「近づこうにも攻撃で押される!?」

広範囲は威力が減るものの、足止めにはちょうどいい!!

「明久!!準備OKよ!!」
「わかった」
「あ、攻撃がやんだ?」
「・・・消し飛びなさい・・・」
「「「「「え?」」」」」

マススパーク

Bクラス　モブｘ１０　０点　戦死

「「「「「え？」」」」」

幽香の召喚獣は基本傘とかによる攻撃だが、力をためることによって砲撃とかを撃つことができる。
これは召喚獣自身の能力で腕輪とかを取る必要はないようだ。

「さ、逃げるよ」
「そうね」

少年少女逃避中

Fクラス

「ただいま～」
「ただいま」
「お、大丈夫だったみたいだなお疲れさん」

妹紅が労いをくれる

「しかし、どうするのじゃ？」
「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

ま、それが狙いだろうね

「まぁ、向こうがその気ならこっちにも考えがある」
「考え？」
「あぁ、明日実行する。とりあえず今日はこれで解散だ」

・・・

保健室

「失礼します、八意先生いますか？」
「あら、明久君どうしたの？あと誰もいないしいつもの呼び方でいいわよ？」
「じゃあ、永琳。じつは・・・」

キングクリムゾン！！

次の日の朝

「考えがあるって言ってたけどどうするの？」

幽香がそう質問すると雄二は

「あぁ、コイツを秀吉に着てもらう」
「んむ？それは別に構わんが、ワシが女装してどーするんじゃ？」

いや、構おうよ、男としてみてほしいなら構おうよ秀吉！！

「なに、秀吉には木下優子としてＡクラスの使者を装ってもらう」

木下優子。秀吉君の双子のお姉さんであり、Ａクラス所属。違いといったらテストの点数と喋り方位しか見当たらない程秀吉君にそっくり。しゃべり方なら秀吉はすぐにまねれるからほぼ見分けようがない。
成る程ね、そのお姉さんに化けてＡクラスとして圧力を掛けようって事か。

「という訳で秀吉、早速用意してくれ」
「う、うむ…」

坂本君から制服を受け取って、その場で生着替えを始める秀吉

「「「「／／／／／／／」」」」

おい、君達秀吉は男だ、あとムッツリーニ写真を取らない。
姫路さんに美波、まるで女の子を見るようにショックを受けないって、眼つぶしは危ないって!!

「よし、着替え終わったぞい」
「じゃあＣクラスに行くぞ」
「一応付いて行くよ」

またあんなことがあったら困るしね

少年少女移動中

Ｃクラス前

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」
「気が進まんのぅ…」

「そこを何とか頼む」
「むぅ……。仕方無いのぅ…」
「悪いな。とにかくあいつ達を挑発してAクラスに敵意を抱く様仕向けてくれ。お前なら出来るハズだ」
「はぁ……。あまり期待はせんでおくれよ…」
そう言って秀吉はCクラスへ向かった・・・大丈夫かな?

『ガラッ』

『静かにしなさい、この薄汚い豚共ッ!』

……マジか?

「……流石だな、秀吉」
「うん。これ以上無い挑発だね…」
「もう既にAクラスに敵意が向いてるんじゃない?」

てゆーか、秀吉のお姉さんってあんな感じなの?

『なっ!?何よアンタ!』
『話し掛けないで!豚臭いわ!』

うわ、理不尽だ・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね?ちょっと点数が良いからっていい気

になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なっ！？言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですってぇっ！！』

いや、誰もＦクラスなんて言ってないから

『手が汚れてしまうから本当は嫌なんだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。丁度試召戦争の準備もしているみたいだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴女達豚共を始末してあげるから！アハハハハハ――！』

「ねぇ、明久演劇部って・・・」

「妹紅言わないで・・・僕もすごい悩んでるから・・・」

「これで良かったかのぅ？」

ぅわー、凄いスッキリした顔してるー。何かお姉さんに対して不満でも溜まってたのかなぁ・・・。

「ああ。とても素晴らしい仕事だったぜ。ホレ」

『キィィィ！！ムカつく！！！何よ調子に乗ってぇ！！！Ｆクラスなんか相手にしてられないわ！！Ａクラス戦の準備を始めるわよ！！』

「「「うわっ・・・・」」」

・・・気を取り直してＢクラス戦に向けて用意するかな

時間はけし飛ぶ!!

「ドアと壁を上手く使え!戦線を拡大させんじゃねーぞ!」

坂本君の怒号にも似た指示が飛ぶ。

「勝負は極力単教科で挑め!補給も念入りにしろよ!」

雄二の指揮の下、ここ数時間はほぼ順調かの様に見えた・・・

しかし

「姫路頼んだ!!」

「はい、さも・・・・!?」

さっきから姫路さんがおかしい・・・なにが・・・

あれは・・・根本君・・・!!!

その手に持っていたのは・・・手紙・・・

そう姫路さんの・・・

「・・・姫路さんきついなら下がっててていいよ?」

「え?でも・・・」

「大丈夫だから、じゃあちょっと雄二のところに行ってくるね」

はぁ・・・ふっ・・・面白いことしてれるじゃないか

根本・・・

第１６話Ｂクラス戦３　小物の罠（後書き）

さあ、次回
お前の敗因は俺を怒らせたことだ

ジョジョネタですねわかります

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・（前書き）

さて友人から頼まれたが・・・うまく書けるかな?

先生の名前変更

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・

「・・・雄二・・・」
「明久？なんだ逃げてきたのか？」
「ちょっと話がある」
「・・・なんだ？」

真剣な話と読み取ったのだろう・・・雄二がまじめな雰囲気になる

「姫路さんを戦線から外してほしい」
「なんでだ？」
「それは言えない」
「なにか、策でもあんのか？」
「Dクラスの手を借りる位かな？あと根本君の服がほしい」
「明久お前…」

？あっ・・・・

「いや、前回教室荒らされたでしょ？その仕返しにだよ」
「・・・人数はさけないぞ？」
「幽香と妹紅、あとムッツリーニがいれば」
「わかった。だが絶対成功させろよ」
「当り前でしょ」

さてじゃあ用意するかな・・・

Dクラス

「ごめん待たせた?」
「いえ?待ってないわよ」
「大丈夫だよ」
「そっか」

さてあとは・・・

『ピピピッ』

「はい」
『・・・準備ＯＫ』

「ごめんなさい吉井君、お待たせしました」
「大丈夫ですよ」

さて永琳もきたしやるか!!

「じゃあ先生お願いします!!」
「はい、試験召喚獣召喚を承認します」
「!!サモン!!」

僕は召喚獣を召喚し・・・

『ドカッ!!』

壁を殴りつけた・・・

ｓｉｄｅ雄二

「お前らいい加減あきらめろよな。教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないっての」
「どうした？軟弱なＢクラス代表はそろそろギブアップか？」
「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」
「無用な心配だな」

『ドンドン！！』

始まったみたいだな・・・

「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」
「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」
「けっ！口だけは達者だな負け組み代表様よぉ」
「負け組？それがＦクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな」

『ドンドン！！』

「・・・さっきからドンドンとうるせぇな。それにこの暑さはなんだ。エアコンきいてんのか？おいッ窓全部開けとけよ！」
「・・・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」
「なんだよ！散々ふかしておきながら逃げるのか！全員で一気に畳み掛けろ！！誰一人生きて帰すな！！」

頼むぞ、明久！！

ｓｉｄｅ明久

っく・・・さっきから殴ってるけど間に合わない・・・

「明久・・・手が・・・・」

さすがにフィードバックで手がボロボロだな・・・

？てか直接やったほうが壊せるんじゃ・・・

「三人ともちょっと距離置いてね」

「「「え？」」」

ふう・・・やることは簡単だ・・・視ればいいんだ・・・

ｓｉｄｅ妹紅

なんか黙っちゃったけど・・・！？まさか

次の瞬間周りが・・・殺気に、いや、でも優しい雰囲気に包まれた・・・

これは・・・

明久を見るとその瞳（め）は青く、いや深い蒼に輝いていた・・・

ｓｉｄｅ明久

「・・・視えた」

あとは力を調整しないと壊しすぎちゃうからな・・・

「ふう・・・・蹴り砕く！！」

ー閃走・一鹿ー

真横にきれいなまでな一直線の蹴りを壁に・・・点に数発叩き込む

『やれ!!明久』

『ドガガガッ!!!』

『ガラガラガラ・・・』

僕の蹴りは点を貫き・・・壁に人が通れる大きさの大穴を開けた・・・

「な、壁を壊すなんて、どういう神経してるんだあの野郎!!」

「藤原妹紅と」

「風見幽香、Bクラス・・・」

「「「やらせるかあああ!!」」」

Bクラスの人達が二人の前に立ちふさがった。さすがにこの人数はきついかも・・

「は、結構驚いたが・・・残念だったな」

『スタッ!!』

まだだ!!

ここで少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によってテストの結果に特徴が現れるんだが・・・

例えば、数学の木内先生や物理の森田先生、日本史の五十嵐先生は採点が早い。

世界史の田中先生や生物の不知火先生は点数のつけ方が甘く、
数学の長谷川先生や英語のリアン先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生や歴史の上白沢先生は
多少の事は寛容で見逃してくれる。

あと、基本承認に関しては西村先生と高橋先生以外は担当科目の承認しかできない

話を戻すが、じゃあ保健体育の先生はというと、採点が早いわけでも甘いわけでもなく
召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である
すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った

「・・・・・Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムッリーニと保健体育の鈴村先生だ

これで・・・

「Bクラス近衛部隊が受けますッ！！」
「残念だったな、あとはそこの雑魚だけ、お前達の負けだ！！」
「っく」

雄二が悔しそうに呻いてるけど・・・

「いや、これでいいんだよ・・・」
「なに？」

そう言えば、さっきの説明だけど・・・実は言うと例外な人がいる。
それは・・・

「八意先生、Ｆクラス吉井明久、Ｂクラス根本恭二に現代文で勝負を挑みます」
「な、お前バカか？保健医がそんなこと許可できるわけ…」
「承認します」
「え？」

それは保健医八意永琳は全科目の試験召喚獣の召喚を承認することができるということ・・・

「サモン！！」

現代文
Ｆクラス　吉井明久　１１２点
ＶＳ
Ｂクラス　根本恭二　２３５点

「ふん、確かにちょっとは高いようだがその点数で勝とうなんて「・・・行くぞ・・・」なっ！！」

根本君の・・・コイツの御託なんかどうでもいい・・・

「一瞬で終わらせる・・・」
「あ・・・明久切れてるね・・・」

「えぇ、切れてるわね・・・なんか帰りたくなったわ・・・」

あっちで妹紅と幽香がなんか言ってるし、永琳が冷や汗を流しながらひきつった笑顔をしているけど無視だ！！

「ここに貴様の居場所などない・・・消え去るがいい・・・」

ー閃鞘・凶刺死獄ー

一瞬で接近した僕の召喚獣は根本の召喚獣の腕と足を切り払い、そしてとどめに心臓、喉、眉間、水月に一瞬で刺突をたたきこんだ・・・

Bクラス　根本恭二　0点　戦死

「え・・・？」

「「「「「な、う、嘘だろ・・・」」」」」

「根本・・・」

「！？ひ、ひっ！！！」

「一つだけ言ってやる。今回の君の敗因はただ一つ・・・」

「僕を・・・『俺』を怒らせた・・・ただそれだけだ・・・」

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・（後書き）

ふう・・・なんとか書けた・・・

第１８話　Ｂクラス戦　戦後対談（前書き）

やっぱ女装は外せないよね！！

第１８話　Ｂクラス戦　戦後対談

「いつつ・・・」
「ほら、もう少しで終わるから我慢しなさい」
うっ・・・永琳の口調がちょっと崩れてる・・・お、怒ってるのか？
「お主・・・思い切った行動に出たのう」
「あはは、それもそうだね」
僕は穴のあいた壁を眺める・・・あんまり大きな穴にはなってないみたいだね、よかった
「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。なぁ、負け組代表？」
「・・・・・・・」
おとなしいな・・・どうしたんだろう？
「いや、明久の気を当てられたんだろう」
「ご愁傷さまね」
「？何を話ておるんじゃ？」
「木下君は気にしなくていいのよ」
そこまで強くした覚えないんだけど（前回の最後のセリフの時に軽く気当てをやっています
「本来なら設備を明け渡してもらい、お前達には素敵な卓袱台をプ

レゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に、当然周りの皆がざわつき始める

「落ち着け、皆。前にも言ったが俺達の目標はＡクラスだ。ここはあくまでゴールじゃなく、通過点にすぎない。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

「……条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

うわ・・・誰もフォローしないや・・・

「そこで、お前達Ｂクラスに特別チャンスだ。Ａクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

「ああ、それだけで良い。ただし・・・・」

そう言って雄二は・・・

「そのままじゃあ面白くねぇから、Ｂクラス代表がコレを着てさっき言った通りに行動してくれたら見逃してやろう（笑）」

Ｃクラス対策で秀吉が着ていた女子の制服を取りだした。

どこにしまってたんだろう・・・

「さ、坂本・・・」
「ん？なんだ藤原？」
「えっと、その・・・」
「坂本、相手に女装させる趣味があったなんて・・・驚いたわ（棒読み）」
「な！？風見、趣味じゃねえよ！！」

雄二が幽香にいじられるのは無視しとこう・・・それより永琳いつまで体触ってるんですか

「壁を壊すような力を使ったんですから、他のとこに影響がなかったか調べてるのですよ」

心を読まないでください

「ばっ、バカな事を言うな！この俺がそんなふざけた事を！」
「「「Ｂクラス生徒全員で必ず実行させよう！」」」
「「「任せて！絶対にやらせるから！」」」
「「「「「それだけで教室を守れるなら、やらない手は無いな！」」」」」
「うをおぉぉぉーーーい！！？」

うん・・・すごい団結力だねＢクラス・・・

「んじゃ、決定だな」
「くっ、よ、寄るな変たぐほぅっ！？」
「取り敢えず黙らせました。閣下」
「お、おう。ありがとう」

へ～いいパンチだな・・・

「じゃ、着付けに移るとするか。明久、任せた」
「えっ、僕!!?何か嫌だな・・・」
「じゃあ藤原あたりに・・・」
「わかったやるよ・・・」

まぁ、手紙のためだしね・・・

「う、うぅ・・・」
「あ、やば・・・」
「落ちなさい」

『ガクッ』

幽香…頸動脈を絞めるって・・・
まぁ一年の頃何かしらと近づいてきてうざかった、って言ってたもんね

「これってどうつけるんだ?」

女子の制服なんて着け方わかんないな・・・

「私がやってあげようか?」
「そう?悪いね。それじゃ、せっかくだし可愛くしてあげてよ」
「あ、それは無理。土台が腐ってるから♪」

・・・やばい、否定できない・・・

さて目当てのモノは、っと

「・・・あった」
「何があったんだ?」
「うわっ!?・・・何だ妹紅か・・・脅かさないでよ」
「え?あ、ごめん。それよりその手紙何?」

僕の持っている手紙を見ても妹紅が聞いてくる。あ、そうか妹紅達知らないんだ

「姫路さんの手紙だよ」
「ふ~ん、渡しとこうか?」
「そうだね、お願い」

さてと目当てのものは見つかっ・・・

『ガラッ!!』

「失礼します」
「え?上白沢先生どうしたんですか?」

慧音が来たことにみんな驚いてる・・・
あ、やばいかも・・・・

「ちょっとね・・・あ、いた(ニコッ」
「!?」

慧音が笑顔でこっちに・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・

『ゴツン!!!』

「！！！！！？」

やパリ、こノ頭突きは痛イ！！

「いくぞ、明久・・・」

「け、慧音・・・口調・・・」

「妹紅、黙っときなさい。巻き添え食らうわよ・・・」

「幽香…」

『ズルズルズル、ガラッ！！』

あ～痛みで口調が・・・それよりこの後説教か・・・

ｓｉｄｅ妹紅

「な、なんなんだあれ・・・？」

「いや、慧音がマジギレしてただけ」

「そ、そうか・・・」

うん、坂本あんまり突っ込まなくて正解だ

さてこの服は・・・ごみ箱に入れとくか・・・手紙、姫路さんに渡しに行くかな。

少女移動中

「よっ、姫路さん」

「！？ふ、藤原さんですかどうしたんですか？」

「ハイこれ」
「!?これは・・・」
「事情は何となく察してる。あ、大丈夫だよ?明久は何も言ってないし中も見ていないから」
「その・・・吉井君は・・・?」
「慧音に説教されてる、まぁ今日のはやりすぎちゃったからね」
「そうですか・・・ほんと吉井君って優しすぎますよね」
「・・・そうだね」

私がどういう存在かしいても受け入れたり、１０救うために自分をかえりみないほどだけどな・・・

「その、藤原さん」
「?なに」
「藤原さんは吉井君のことが・・・好きなんですか?」

・・・

「好きよ。私だけじゃない幽香もね」
「そう、ですか・・・」
「でも・・・」
「?」
「幽香もそうだけど、私達は『明久の相手は明久自身が決めること』だと思ってるの」
「・・・強いですね・・・」
「強くないわよ・・・まぁ、私にできることは選んでもらえるように頑張ることくらいだけどね」

全然気づいてくれないけどね

「・・・・」
「さて・・・帰るか・・・あ、あと姫路さん」
「なんですか？」
「私のことは妹紅でいいよ」
「じゃあ、妹紅ちゃんって呼びますね」
「ちゃんって・・・まぁ慣れるしかないか・・・じゃあね」
「はい」

さて幽香と合流して明久を迎えに行くかな

第１８話　Ｂクラス戦　戦後対談（後書き）

おまけ

ただいま説教中

「壁を召喚獣といえ、素手で殴るとなんてどういうことだ！！」
「いや・・・なんていうか、ね？」
「・・・お願いだ・・・」
「え？」

『ギュッ』

ふいに抱き締められて・・・これは・・・涙？

「お願いだ・・・私達をあんまり心配させないでくれ・・・」
「・・・うん・・・ごめんね慧音」

ホント僕って女の子の涙に弱いな・・・

ＰＶ５万超え記念短編　殺人貴との会合（前書き）

題名の通り
紅魔館、紅い霧編後となっております

ＰＶ５万超え記念短編　殺人貴との会合

吉井明久こと僕はとても悩んでいた・・・

「なんか能力に目覚めたのはいいけど・・・名前もわからないし、鍛えようにもどうすればいいのか解らないしな・・・」

能力の一つである『　』ッて場所に行ったことによって目覚めたこの能力

なんていうかスイッチ？みたいなものを切り替えると視界に点と線が見え、線を切るとどんなモノだろうと切ることができ、点をつくとあらゆるものを殺すことができるという能力・・・

僕はこれに目覚めてから結構立つけどどうすればいいのか答えが出すことができず、森を歩いていた・・・？森？

「あ・・・迷ったあああああ！！！」

どうしよう・・・？あれは・・・人！？まさか同じように迷った・・・！！！

その人は妖怪に追いかけられていた・・・

「くっ！！」

何か出来るわけではないが・・・追いかけなきゃ！！

少年追跡？中

しかし・・・そこで見たのは妖怪に襲われる人ではなく、妖怪と対等に戦い、ましてや倒している人だった・・・それ以上に

「・・・すごいな・・・」

その人はたった一本のナイフで妖怪を解体していく、乱雑にではなくあまりにもきれいな動きで・・・
いつの間にかその戦闘は終わっており、その人は僕を見ていた・・・

ｓｉｄｅ???

はぁ・・・空間を飛んでみればいきなり魔物?に襲われるしついてないな・・・
?
そこにはいつからいたのだろうか、中学生くらいの少年がいた・・・
!?な・・・いやこれは・・・魔に対して感じるものじゃなくて・・・なんていうんだろうか・・・
まるで同類にあったような・・・
まぁいいか

「えっと君、ちょっといいかな?」
「え?あ、なんですか?」
「ここに永遠亭ってとこがあるって聞いたんだけど・・・」
「ありますけど・・・それよりお兄さんその目・・・」

あ、いけない聖骸外したままだった。

「僕と似たような目ですね」
「・・・え?」

今この少年は何て言った?この『直死の魔眼』を『僕と似たような』?

「あ、いや気のせ「ね、君・・・線と点が見えるのかい?」え、はい」
「そうか・・・」

なるほど・・・さっきの感覚はそういうことか・・・
でも、何だかおれとは違うような・・・

「すまないけどそれについて詳しく教えてくれないかな・・?」
「え?あ、いいですけど・・・」

・・・?あっ・・・

「あぁ、ごめん。自己紹介がまだだったね。俺は・・・・」

「遠野志貴、ちょっとした物探しの旅人だよ」

ｓｉｄｅ明久

互いに自己紹介をした後、志貴さんがここに来た理由と僕がこの能力に目覚めた経緯を話した。

「まさか、先生が前言ってたところ?でも彼はそれよりも・・・」
「えっと・・・志貴さん?」
「あぁ、ごめんそれについてだったね。

それは『直死の魔眼』と言って物の死を点や線としてみる力なんだよ」

「物の死・・・」

「怖い・・・かい？」

なんていうんだろう・・・確かに怖いかと言われれば怖いけど・・・

「僕は約束したんです。たとえどんなことがあろうと前に進み続けるって・・・」

「・・・」

「それに・・・」

「それに？」

「これは間違いなく僕自身の力である意味自分自身です・・・それを否定するなんてバカみたいじゃないですか」

「・・・」

「？どうしたんですか？」

いきなり黙り込んだけどどうしたんだろう・・・

ｓｉｄｅ志貴

驚いた・・・自分自身だから否定するのはバカみたい・・・

「ぷっ」

「？」

「あはははは！！！！」

「な、なんで笑うんですか！！」

「いやごめん、ふふそうか自分自身か・・・」

まさかこんな小さい子から教えられるなんて俺も歳かな・・・まぁもう１００はいってそうだけど・・・

「あ、その・・・志貴さん頼みがあるんだけど・・・」
「？なんだい」
「僕に戦い方を教えてくれませんか？」
「・・・なぜだい？」
「僕は、守りたい人たちがいるんです・・・」
「・・・・」
「それに僕は前に進み続けるって誓ったから・・・」
「力を手に入れるってことは他人を傷つけるかもしれないってことだよ？」
「・・・・」
「それに逆に傷つけられる覚悟もいる。もしかしたらその守りたい人を守れないかもしれない」

俺は・・・守れなかったから・・・

「それに力を手に入れるということはそれだけ過酷だということ、場合によっては死ぬかもしれないんだよ？」
「ですね・・・でも・・・」

「僕は、何も努力しないで守れなくて後悔するよりも、何かを守るために血反吐を吐くような努力をするほうがましだ」
「それで守れたなら最高ですけどね」

・・・・・人によっては夢、理想って言うかもしれないな・・

「大怪我するかもしれないよ？」

「今さらですし、覚悟の上です」
「最悪死ぬかもしれない」
「死ぬ覚悟でなんかしません、絶対生き残ってやります」
「・・・・・・」

はぁ・・・これはてこを使っても動かないだろうな・・・

「はぁ・・・負けだ」
「え？じゃあ・・・」
「いいよ、教えてやるよ。ただしあんまり期待するなよ？」
「はい！！」

でも、こんな子にあんな思いはさせたくないし、大人である俺から教えれることは教えようかね・・・

「まあ、話も決まったことだし明久」
「？なんですか？」
「永遠亭まで案内してね？」
「あっ・・・・」

本当に大丈夫かな・・・

ｓｉｄｅ明久

志貴さんに弟子入りしてから毎日訓練を行った・・・
それこそ本当に血反吐を吐くような毎日。妹紅達やお母さん達とかも心配とかしてたけど、
僕はそれを説き伏せて毎日志貴さんのとこに通いつめた。

志貴さんいわく体力面や肉体能力に関しては基礎ができているから

後はどううまく体を使えるかが問題らしい。幽香・・・・君の特訓(いじめ)のおかげだね・・・
志貴さんに技の基礎を教えられたり、組み手をしたり・・・はっきり言って折れてない骨とかないんじゃないかと思う。でも僕はあきらめなかった・・・
だってあきらめたら必死に教えてくれる志貴さんにも失礼じゃないか。
ある程度したころ・・・僕は技・・・七夜の技術の伝承が始まった・・・

ｓｉｄｅ志貴

初めに言おう異常だ・・・体力面等もそうだが（それを言った時明久は遠い目をしていた）まぁ、これは『』に到達したときに身体能力等自体も強化されているのかもしれない（ゼルレッチさんがそんなことを言ってた気がする
だが問題なのは学習能力だ。教えた動き、技、道具の使い方、体の使い方、魔眼の使い方をまるで水を吸い取るように、しかも限界なく吸収しものにしていくのだ。
何より・・・それは技を教えているときに起こった・・・

「志貴さーん」
「ん？どうしたんだ？」
「実は見てほしいものがあって・・・」

そう言うと明久は刀を構え・・・

「・・・散れ・・・」

ｌ閃鞘・散華時雨ｌ

「・・・なっ・・・」
「八点衝とかを刀とかでしようとしたら難しくて考えたんですけどどうですか？」
「・・・自分で考えたのかい？」
「はい！！あ、これのすごいとこは密度を変えると範囲を変えれるとこなんですよ」

七夜の技から新しい技を作る才能、そしてそれを完成とまで昇華させる技術・・・
本当にこいつは人間なのか？

ｓｉｄｅ明久

師弟なって１年くらいたった夜・・・僕と志貴さんは森で試合をしていた・・・

『キン！！ドカッ！！』

「ぐっ！！」
「・・・隙だらけだ」

ｌ閃鞘・八穿ｌ

志貴さんが視界から外れ・・・真上から斬りかかってきた

「蹴り穿つ！！」

ｌ閃走・六兎ｌ

僕はそれに対して瞬間的に六発蹴りを叩き込み志貴さんを吹き飛ばすも・・・志貴さんはひょいっと受け身を取り・・・

「遅い」

ー閃鞘・一風ー

僕の胸あたりに肘を叩きこみ、そのまま後ろに投げ地面に叩きつけた

「がはっ!!??」

頭から叩きつけられていたら死んでいただろう・・・

「はい、ここまで」
「あ、ありがとうございます・・・」
「ふう、でも本当に強くなったね」
「まだ志貴さんに決定打入れれませんけどね・・・」
「あはは、弟子にそんなに簡単に抜かれてたまるかよ。」

うぅ・・・でもやっぱ一撃くらいちゃんと当てたいな・・・

「・・・明久・・・」
「?なんですか?」
「俺は今日ここを出る」
「・・・やっぱりですか・・・」
「?わかってたのか?」
「だっていきなり試合するぞって言われたらわかるでしょ」

ホントは信じたくなかったけど・・・

「俺が教えれることは教えた。あとはお前がどう昇華させるかが問題だ」
「・・・はい・・・」
「でだ、お前にこれをやろうと思ってな」
そう言って志貴さんが取り出したのは・・・
「こ、これは・・・でもこれって志貴さんのじゃ・・・」
『七夜』と刻みこまれた金属棒・・・仕込みナイフだった・・・
「あ、これはなまぁ物探ししてる途中の世界で拾ったものなんだが・・・」
「これの持ち主・・・『俺』がどうなったか知らない。もしかしたらこれを使わなくていい生活をしているか、もうとい昔に死んだかもしれん。倉庫で見つけたからな」
「それって泥棒じゃ・・・」
「だがこのナイフは頑丈でな。吸血鬼の一撃をくらっても刃こぼれすら起こさない」
話をそらした・・・
「俺が2つ持ってても仕方ないし、こいつも使われるのが本望だろうし」
「・・・」
「それに師匠から弟子に送れる物として明久に受け取ってほしい」
「・・・はい」
それを受け取った時、持ち主のいろんな思いを感じた気がした

「・・・・」

『カシャ！！チャキッ』

すごい。まるで合わせたかのように手になじむ・・・

「さて渡すのは渡したし・・・自主練怠るなよ？」

「はい。志貴さんもお元気で、姫様よくなるといいですね」

「あのお姫様は気ままだからね。じゃあな」

そう言って志貴さんは懐から出した宝石剣で空間を切り裂き消えて行った・・・

「ふう、とうとう今日、Ａクラス戦か・・・」

しかし懐かしい夢を見たな・・・あれからいろんなことがあった・・・

自分の能力がわかったり、この目の本当の正体がわかったり、新しい仲間ができたり・・・

「志貴さん、僕は今を進んでいますよ」

僕は制服にいつもどうり志貴さんから受け取った『七ッ夜』ポケットに入れ、

大切な仲間達が待つロビーへと向かった

ＰＶ５万超え記念短編　殺人貴との会合（後書き）

やばい、志貴のしゃべり方が・・・・
今回は明久の過去についてでした。
明「やっと僕のことが出てきたね」
うん。文才なくてごめんね・・・
明「大丈夫だけど・・・」
・・・首吊ってくるわ・・・
明「やめろ！！」
次回からＡクラス本編です。
この話の明久の持ってる七ッ夜ですがパラレルワールドの倉庫にあったのをお姫様の吸血衝動を抑えるためにいろいろと世界を飛び回り、たまたまたどり着いた志貴がうば・・・拾ってきた物です
あと時間に関しては明久の学習速度がおかしいだけです

第１９話　Ａクラス戦前　Ｆクラス（前書き）

Ａクラス戦前の交渉前の話です

第１９話　Ａクラス戦前　Ｆクラス

Ｂクラス戦から二日経って、Ａクラス戦について雄二からの説明が始まった

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」

・・・こいつは誰だ?雄二の皮をかぶった別人か!?

「なんだよ?ゴリラらしくない」

「いい加減その呼び方やめてくれないか?」

「・・・で坂本。どうしたんだよ、らしくねぇ・・・」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。ここまで来た以上、絶対にＡクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強さえすれば良いってモンじゃねぇっていう現実を、成績だけが全てとしか見てねぇ教師共に突き付けてやるんだ!」

「「「「そうだ、そうだ!!」」」」

でも努力ぐらいしようね・・・

「皆、ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を着けたいと考えている」

「どういう事だ?」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ?」

「それで本当に勝てるのか?」

雄二の言葉に、教室中にざわめきが広がった

ｓｉｄｅ幽香

「落ち着いてくれ。それを今から説明してやる」

そうは言ってもどうするのかしら？

「まず、戦るのは当然俺と翔子だ」

代表同士の一騎討ち。まぁ、当然と言えば当然よね・・・でも

「普通にやって今に雄二が勝てるわけ・・・」

『ヒュッ』（雄二が明久にカッターナイフを投げる）

『パシッ、ヒュッ！！』（妹紅がキャッチし投げ返す）

『ヒュッ！！』（私もついでに雄二にペンを投げる）

「うわっ！？何すんだてめえら！！」

「最初にやったのはお前だろ！！」

確かにそうね、それに

「今度明久に同じことしたら・・・アテルワヨ？」

「マジですいませんでした」

「ま、まぁ、明久の言う通り確かに翔子は強い。まともに戦り合えば勝ち目は無いかも知れない」

だったら、カッター投げないでよ

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう?まともに戦り合えば俺達に勝ち目は無かったが、俺達は今こうして勝ち進んで来ている。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、Fクラスは Aクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない。俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

「「「「おぉ~!!!」」」」

(((いや、無理でしょ・・・)))

あら?なんだか明久と考えが重なったような・・・

「さて、具体的なやり方だが…、一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド?何の教科でやるつもりじゃ?」

「日本史だ。ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は100点満点の上限有り。召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

ふ~ん、何か秘策でもあるのかしら?

「でも、同点だったらきっと延長戦だよ?そうなったら問題のレベルも上げられるだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない?」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「まさか運任せとか言わないよな」

「おいおい、お前達。あまり俺を舐めるなよ?いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「じゃあ、雄二は霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」
「アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろう」
あら、まるで霧島さんのことなら知ってるような口ぶりね・・・
「雄二よ、あまり勿体振るでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」
「ああ、すまない。前置きが長くなったな」
「俺がこのやり方を採った理由は一つ。それは、『ある問題』が出ればアイツは確実に間違えると知っているからだ」
「ある問題？」
「ああ。その問題とは・・・『大化の改新』」
「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？小学生レベルでそんな問題が出てくるのかな？」
「いや、そんなに掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」
「単純というと・・・、起こったのは何時代かとか？」
「もしくは年号とかかのう？」
「お、ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」
そんなにうまくいくのかしら・・・
「簡単な問題なんだが、翔子は確実に間違える。そうしたら俺達の勝ちとなり、晴れてこの教室とオサラバって寸法だ」
すごい自信ね・・・それよりさっきから気になってたけど・・・
「あの・・・」
「なんだ？姫路」

「坂本君って、霧島さんと知り合いなんですか？」

それよ。さっきからアイツとか言ってるしね

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員狙えぇぇぇーーーっ！！！」

あ～またこいつらは・・・

「なっ！？何故須川の号令で皆一斉に武器を構える！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前にキサマを殺すッ！」

「俺が何をした！？」

「男とはッ！『愛』を捨て『哀』に生きる者成りッ！それをキサマは汚らわしき欲望を以て気高き才色兼備の霧島翔子を唆し、我等の鉄の掟を踏みにじったのだッ！」

「「「「「「「「「我等異端審問会の血の盟約の下、異端者に死をッ！！死をッ！！」」」」」」」」」

・・・ハァ・・・ここにはバカしかいないのかしら・・・

「訳分かんねぇ！何だよ血の盟約って！？つまりどういう事だよ！？」

「「「「「「「「霧島翔子と幼馴染なんて羨ましいじゃねーかこの野郎ッ！！！！」」」」」」」」

くだらないわね・・・

「それ言ったら明久はどうなる！！風見と藤原と幼馴染で、上白沢先生や八意先生とも聞いてる限り仲いいんだぞ！？」

「な!?雄二おま・・・」
「「「「吉井ィィィーーー!!!キサマも異端者だ!!!!」」」」
」
『シュカカカカッ!!!』
「お前ら・・・」
「貴方達・・・」
「「明久に手出したらどうなるか解ってるよな（わかってるわよね）？」」
はぁ、呆れてこの頃溜息が多いわ・・・
「あの、吉井君」
「ん?何?姫路さん」
「吉井君は、霧島さんみたいな娘が好みなんですか?」
「へ?そりゃ霧島さんは美人だけど…好きではないかな」
「……」
「けど好みかと言われたら・・・って、えぇっ!?何で姫路さんが僕に対して攻撃態勢取ってるの!!そして美波!?君は何故教卓なんて物騒な物を僕に投げつけようとしてるのさ!!僕が一体何をしたと!!」
「吉井君にはお仕置きが必要な様ですね」
「覚悟しなさいアキ。その性根を叩き直してあげるわ!」
「それならまずあんた達は言葉について習ってこい!!」
「あと話を聞くってこともね」
私と妹紅は二人を抑えつける
記憶が確かなら姫路って子もうちょっとまとも子だと思ってたけど

気のせいだったのかしら・・・

ｓｉｄｅ明久

なんとか命の危機を脱出すると

「まぁまぁ。落ち着くのじゃ皆の衆」
「冷静になってよく考えてみるが良い。相手は『あの』霧島翔子じゃぞ？いくら幼馴染とはいえ、男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」
「まぁそれもそうだな・・・」
「むしろ興味があるとすれば・・・」

さっきまで暴走してたＦクラス男子が一斉に姫路さんを見る

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」
「いやいや。別に何も」
「何もしてないけど、何かされる可能性が・・・・」
「え？」
「「「「いいえ、何でも！！」」」」
「？？？」

やっぱりみんな噂を鵜呑みにしてるみたいだね・・・

「とにかくっ！俺と翔子は幼馴染で、俺達が小さい頃に俺がアイツに間違えて『大化の改新は６２５年』って教えていたんだ」
「貴様ッ！！まだ幼くて何も知らない純粋無垢な霧島さんに嘘の情報教育を施していやがったのかッ！！」
「何て外道な奴なんだ！！」

「・・・・・許されざる行為・・・」
「えぇーい、もう何とでも言え!!取り敢えず今は黙れ!!話が進まん!!」

どんまい、雄二

「アイツは一度覚えた事は絶対に忘れない。だから今、学年トップの座にいる。しかし、今回はそれが仇となるんだ!」

雄二が黒板をバンッと叩いて皆の注目を集める

「俺はそれを利用してアイツに勝つ!そうしたら俺達の机は・・・」

「システムデスクだっ!」

そううまくいくかな・・・

第１９話　Ａクラス戦前　Ｆクラス（後書き）

交渉まで行きたかったが二分割。

第２０話　Ａクラス戦　交渉　メイド長との会合（前書き）

今回明久の能力がちょっとわかります

第２０話　Ａクラス戦　交渉　メイド長との会合

「一騎討ち？」
「ああ。ＦクラスはＡクラスは試召戦争としてＡクラス代表に一騎討ちを申し込む」

今回の交渉は雄二が行っている。ちなみに一応僕、幽香、ムッツリーニ、姫路さんは付き添いだ。

で、Ａクラスから交渉に出てるのは秀吉の姉の木下優子さん、ホント見た目じゃどっちか分かりにくいね・・・

「うーん、何が狙いなの？」
「もちろん、俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」
「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね。だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」
「賢明だな」

ここまでは予想通りだね。ここからが交渉の本番。
雄二君の腕の見せ所だよ？

「ところでＣクラスとの試召戦争はどうだった？」

雄二は腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけよ？何の問題もなし」
「なるほどな。ところでＢクラスとやりあう気はあるか？」
「Ｂクラスって・・・・昨日来ていたあの・・・・」
「ああ。あれが代表をやっているＢクラスだ。幸い宣戦布告はまだ

されていないようだがさてさて。どうなることやら」
「でもBクラスはFクラスと戦争したから三ヵ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」
確かにルール上そうだけど・・・
「知っているだろう？事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになっている。規約には何の問題もない。・・・BクラスだけじゃなくてDクラスもな」
例外もある
「・・・・それって脅迫？」
「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」
木下さんは考え込むように黙る・・・
仕方ない
「木下さん、じゃあこういうのはどう？」
「？なにかしら？」
「お互い7人、7VS7の一騎打ちを行って、最初に4勝したほうが勝ちっていう方法なんだけど」
「な！おい明久！何を勝手に・・・・！」
「でもこの提案が却下されたら全面戦争になるかもしれないよ？だったらちょっとでも勝ち目がある方に妥協した方がでしょ？」
木下さんは少し考えた後
「う～ん・・・いいわ。吉井君の案なら？んであげてもいいわよ」

「本当か？」
「ええ。それならこちらのリスクも結構小さく出来るしね。」
「・・・・はあ、仕方ない。けど、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう。それくらいのハンデはあってもいいはずだ。」
さすが雄二。あくどい
「え？う～ん・・・・」
「・・・・・受けてもいい。」
「・・・・・雄二の提案を受けてもいい。」
代表の登場だね・・・
「あれ？代表いいの？」
「・・・・・そのかわり、条件がある。」
「条件？」
「・・・・・うん。負けた方は何でもいう事を一つ聞く。」
そう言いながら翔子は雄二の後ろにいる瑞希を値踏みするようにじっくりと観察した。
そんでムッツリーニはカメラを準備した。
「土屋君、早くそれしまわないと・・・壊すわよ？」
「・・・・・・・（サッ」
さすがに壊されたくはないようだね、まぁ、僕自身幽香が言う前に壊そうかと考えたけど・・・
「じゃ、こうしよ？勝負内容は７つの内４つそっちに決めさせてあげる。あとの３つはこっちで決めさせて。」

「そうだな・・・わかったそれで行こう」
「開始はいつ？」
「補給テストをもう一度受けたいからな、昼からだ」
「わかった」

さて、話も終わったしかえ・・・

その時僕は銀髪の少女に気がついた・・・
そしてその手に懐中時計が・・・

『カチッ』

その瞬間みんなが時間が止まったように動かなくなった、いや実際に時が止まってるんだから当たり前か・・・

「よかった。気づいてたみたいね」
「何言ってるのさ、思いっきり目があってから時を止めたじゃないか、咲夜」

彼女は十六夜　咲夜。幻想郷の紅魔館のメイド長で、『時間を操る程度の能力』を扱う

「だって貴方、認識してないと周りと同じ状態になるじゃない」
「うっ・・・」

そう僕の能力だが意識していれば咲夜の止まった時間の中に入れるが、気づいてないと発動しないのだ・・・

「それよりいつのまにここに？」
「2年の始まりくらいに転校生ってことで来たわ」

「へ～」
「やっぱり・・・明久、貴方Aクラス見に来た時私に気づいてなかったでしょ」
「ハイ、誠に申し訳ございません」
本気で気付いてなかった・・・
「まぁいいわ。それより紫さんから伝言なんだけど」
「え？紫から？」
「今回の試験召喚獣で私達にちょっとした実験を手伝ってほしいそうよ」
八雲　紫。幻想郷を作った張本人で『境界を操る程度の能力』を扱う妖怪である。
みんなからは胡散臭いとか嘘つきと言われるけど、僕はそう感じたことがない。
彼女いわく「なぜか明久に対してだと本音とかぽろぽろ出ちゃうのよね・・・」と言っていた。
あと、彼女にとって僕は天敵みたいなものらしい。
それ以来僕の2つ名に「紫専用最終兵器」というものがついた・・・
で話は戻すが、僕がこの学園に入ったのを知ってから紫は何かしらと技術提供をしたりしてスポンサーみたいな立ち位置にいるそうだ
「そうか・・・わかったよ」
「・・・明久・・・」
「なに？」
「本気でやってね？」
・・・

「何言ってるのさ・・・」
「・・・」
「咲夜とやる以上本気を出すに決まってるでしょ」
「・・・ふふ、そうね。ありがとう」
「じゃあ、今度はクラス戦で」
「えぇ、待ってるわ」

『カチッ』

「？明久どうした？」
「何でもないよ雄二」
「明久・・・」

後で説明するよ幽香・・・

「じゃあ戻ろうか」

今回の補給テスト『本気』でやらないとな・・・

第２０話　Ａクラス戦　交渉　メイド長との会合（後書き）

さあ、今回は咲夜との会合でした。
あと補足ですが明久が紫の天敵な訳は、
紫の境界を操る能力が明久の直死の魔眼ともう一つの能力ととても相性が悪いからです。
例
境界を扱おうとする→境界を殺して扱えなくする

第２１話　Ａクラス戦１　夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

妹紅編！！

第２１話　Ａクラス戦１　夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

とうとうこの時が来た…

「準備はよろしいですか？」

立会人はＡクラス担任であり、学年主任の高橋先生が行うみたいだ…

「大丈夫だ」

「…はい」

「では今よりＡクラス対Ｆクラスの試合を開始します」

「始まったね」

「そうですね」

「ところで何で上白沢先生がここに？」

美波ナイス質問

「貴女達の担任だからですよ」

さいですか…

「では両クラス代表は前へ」

「ではわしがいくかのぅ」

「じゃあ、私が行くわ」

姉弟対決か…

「では一回戦を開始します」
「秀吉、Cクラスの小山さんってしってる？」
「え？誰じゃったかのぅ？」

小山さんって言えば代表の…

「ちょっとこっちに来なさい」

優子さんは秀吉を連れて裏に行った…

『どうしたのじゃ姉上？』
『あんた私に変装してブタどもが、とか言ったらしいわね…』
『あれはわしなりに姉上ならこう言うだろうと…って姉上…腕はそっちには曲がらな…』

…

「ごめんなさい秀吉体調が悪いみたいで休んだわ」

とりあえず、行ってみるか…

ｓｉｄｅ妹紅

明久は…行ったか…相変わらずだな

しかし秀吉の姉ってバイオレンスだな…

「はぁ、演劇なんて馬鹿なことばかりして…勉強を疎かにするなん

て恥じもいいとこだわ」

…コイツ…

「どうする？」

「仕方ない、先生この試合こちら「待って…」ふ、藤原？どうした？」

「あら、貴女が相手？」

「先生、教科は歴史で」

「では、初めてください」

「力の違いを見せてあげるわ」

なんか言ってるけどいいや

「最初に言っておきたいことがある」

「何かしら？」

「私は…」

とりあえず

「夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は大嫌いなんだ！！」

燃やす！！

歴史

Ｆクラス　藤原妹紅　４１２点

ＶＳ

Ａクラス　木下優子　３３７点

「「「「「４００オーバーだと!?」」」」」
「な、貴女…」
…
「能力発動」
藤原妹紅　３１２点
「どういうつもり?」
「どうでもいい、やるぞ」
「!?舐めるな!」
私は炎をばらまき、あっちはなんとか避けながら槍で攻撃してくる
「…これで終わりよ!!」
私の炎はあっちの召喚獣の腕を焼き、あっちは私の召喚獣の胸を槍で貫いた…
「勝った…」
喜んでるとこ悪いけど…
「リザレクション…」
「え?」
『ボッ!!』

「!?」

召喚獣が炎にかこまれ、火の羽がはえた状態で復活した…

藤原妹紅　２１２点
ＶＳ
木下優子　１０２点

「嘘…」
「燃えろ・・・」

召喚獣は巨大な炎塊を優子の召喚獣に投げつけた。

木下優子　０点　戦死

「なんで?確かに止め差したのに…」
「私の腕輪の能力はな…１００点を払うと、２００点元の点数から引かれるが一回だけ復活できるんだよ」
「…」
「木下…」
「何かしら」
「秀吉謝れよ。確かに悪乗りしたあいつも悪いけど」
「そうね、私のさっき言ったこと失礼よね…」
「では１回戦Ｆクラスのし「負けでいいよ」え?」
「な、なに言ってんだ!!藤原」

なんかゴリラが言ってるけど

「だって私乱入しただけだし」

「確かに木下君の代わりに出るとは言って無いですね」

さすが慧音、私が言ってること理解したみたいね

「では1回戦Aクラスの勝利とします」

あ、明久も帰って来たみたい出し戻るか

第２１話　Ａクラス戦１　夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

おまけ

「秀吉…」
「なんじゃ？姉上」
「さっき馬鹿にしてごめんなさいね」
「別にもうよい」
「藤原さん強いわね」

姉上…

「多分それは明久が理由だと思うぞぃ」
「吉井君が？」
「うむ」

『明久～勝ったけど負けたぞ～』
『妹紅なに言ってるの？てか抱きつかな…』

わしは明久を見ながら姉上にそう言った

第２２話　Ａクラス戦２　もこたんは帽子（前書き）

もこたんがＩＮされました
今回のお話は
カオス
三頭身
たれパンダ
でお送りします

第２２話　Ａクラス戦２　もこたんは帽子

今の状況をお伝えしよう・・・

「うにゃ～」（明久の頭の上でたれパンダ状態のもこたん）

「久しぶりに見たわねこれ・・・」

「そうですね、この頃この状態になることなかったですから」

慧音・・・懐かしそうに言わないでどうにかして・・・

じゃないと・・・

「「どう躾ようかしら（ましょうか）・・・」」

だから僕は君達のペットじゃないって・・・

「「「「「「死死死死死死」」」」」」

そこうるさいよ

「なあ・・・藤原が三頭身みたいになってるような気がするんだが・・・」

「創作物の話だから仕方ないわ」

雄二がまともな意見・・・そして幽香メタ発言しない

「ホントこう見ると人形みたいね」

永琳・・・てかいつの間に来たの！？

「ちょっと紫さんに呼ばれてね」

さいですか・・・てか心読まないで・・・

「では2人目どうぞ」

「じゃあ須川頼んだぞ」

「俺か？」

「あぁ、藤原はもう出れないからな」

「ふ・・・本気を出せってことだな・・・」

「あぁ、逝ってこい」

雄二・・・漢字違うよ・・・

「なんじゃ？この空気は」

「あ、秀吉おかえり。お姉さんは何て？」

「さっきの謝罪だそうじゃ、。それより明久治療ありがとうなのじゃ」

「気にしないで、最初の原因は雄二だから」

「しかし、異様に手馴れておったのぅ、あとあの救急セットはどこから出したんじゃ？」

「それは・・・」

う～んどうしよう

「吉井君が治療がうまいのは八意先生から習ってたからですよ」

「どういうことですか？上白沢先生」

「言ったまんまよ。明久は八意先生の弟子みたいなものなのよ」

「いや、別に弟子ってわけじゃないんだけどね、幽香」

「そうね、もう吉井君ほとんどの治療の仕方と薬の調合覚えてるものね？」

永琳！？

「明久が？ありえんだろこのバカが」
「「「「確かに」」」」
「あら、貴方達シニタイノカシラ？」
「「「「「すいませんでした」」」」」

「あの・・・」
「「「「はい？」」」」
「早く3人目でてくれませんか？」
「「「「え？」」」」

須川君・・・・瞬殺だったんだね・・・

「・・・・・俺が行く」
「おう、ムッツリーニ頼んだぞ」
「了解」

ムッリーニは科目選択に保健体育を選ぶだろう。
保健体育だけでムッリーニは総合科目の点数のうち８０％を占めている。
その単発勝負ならＡクラスにだって負けはしないだろう

「じゃ、僕が行こうかな」

？知らない子だな？

「１年の終わりに転入してきた工藤愛子だよ。よろしくね」
「教科は何にしますか？」

「・・・保健体育」
「土屋君だっけ?随分と保健体育が得意みたいだね?」

工藤さんがムッリーニに話し掛ける

「でも、僕だってかなり得意なんだよ?・・・・・・キミとは違って、『実技』で、ね♪」
「・・・・・・じ、実技・・・(ブシュー」
「「「「ムッツリーニ!!??」」」」

な、いきなり鼻血出して倒れた!??

「ちょっと、大丈夫!?ムッツリーニ」
「・・・問題ない」

いやどう見ても瀕死だから・・・

「そっちのキミ、吉井君だっけ?勉強苦手そうだし、保健体育でよかったら僕が教えてあげようか?
もちろん『実技』でね♪」
「え?いや別に「アキには永遠にそんな機会来ないから保健体育の勉強も要らないわよ!」・・・」
「そうです!永遠に必要がありません!」

なんだろうすごく失礼な気が・・・

「うにゃー!!」

もこたん人間の言葉喋ろうね。てかそろそろ戻ろうよ・・・

「そうね妹紅の言うとおり・・・」

え?幽香今言ったことわかったの!??

『ギュッ』

「へ?」

「ちゃんと相手がいるから問題ないわ」

「「「「くそー!!!吉井殺す!!!」」」」

幽香が抱きつきながらそう言う

「あ~確かにそうだね」

「「「「・・・・・へ?」」」」

?みんなどうしたんだ?

「え・・・吉井君って・・・」

工藤さん?何驚いてるんだろう・・・だって

「え?保健体育の『実技』って体育のことでしょ?」

しーん

あれ?僕何か変なこと言った?

「・・・まぁそこら辺はあとで教えてあげるから吉井君、気にしなくていいわよ」

「は、はぁ・・・」
「「「「八意先生と個人授業だと!?吉井許すま・・・」」」」」
「はいはい、黙りなさい・・・・」
「「「「「Ｙｅｓ　ｓｉｒ・・・」」」」」
うん?
「そろそろ召喚してください」
あれだけの騒動にも関わらず、高橋先生は冷静だな・・・
「はーい。サモンっと」
「・・・サモン」
二人の召喚獣が姿を現す。
ムッツリーニの召喚獣は隠密スタイルで武器は二本の小太刀。対して、工藤さんの召喚獣は…。
「なっ、何だあの巨大な斧は!?」
見るからに破壊力抜群そうな大戦斧に加え、腕輪まで装備している。
見るからに強そうだ
「では第三試合、始めっ!」
「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」
「……その必要は無い」
「えっ?何で?」
「……工藤愛子、お前では俺には勝てない」
「へぇ～、自信満々だね。けど――っ!」

工藤さんの召喚獣はものすごいスピードでムッツリーニの召喚獣に突っ込んできた

「それじゃあ、バイバイ。ムッツリーニ君っ！」

そして斧を振り上げムッツリーニの召喚獣を両断・・・

いや、そんなことないか・・・だって・・・

「……『加速』」

『ムッツリーニ』だし

ムッツリーニはそれ以上のとてつもないスピードで工藤さんの召喚獣を切り捨てていた・・・

「・・・え？」

「……『加速』、終了」

保健体育

Ｆクラス　土屋康太　５７２点

ＶＳ

Ａクラス　工藤愛子　４４６点

「すごいスピードだな・・・」

「そうね・・・２０回かしら？」

「何がだ？」

「切った回数よ」

「「「「「え？」」」」」

「正確には２４回」

「へ～私には幽香と同じ２０回しか見えなかったや」

あ、妹紅元に戻ってる

「な・・・何言ってんだ?明久」
「・・・・・明久・・・全部見えてたのか?」
「うん、どこを切ってるかも切り方も全部見えてたよ」

志貴さんのほうがやっぱ切り方は正確かな・・

「ムッツリーニ、まさか・・・」
「・・・・・切った回数２４回」
「「「「「・・・・・・」」」」」

「しょ、勝者、Ｆクラス」

高橋先生・・・Ａクラスだから絶対負けないってわけじゃないんですから・・・

おまけ

「ところで妹紅」
「うん?」
「いつまで抱きついてるの?」
「気が済むまで『ギュッ』」
「そう。まぁ別にいいけどね・・・」
「・・・（妹紅の奴いいな・・・）」
「・・・（勢いとはいえ明久に思いっきり抱きついちゃった・・・

／／／／／）」
「（私も頼んで抱きついてみようかしら・・・）」
「（ほんと明久君変なとこで天然なんだから・・いっその事本気で実践しようかしら・・・）」
「アキ・・・」
「吉井君・・・」

なんか美波と姫路さんから不穏な空気が・・・
ハァ・・・咲夜との試合まで生きてられるかな・・

第２２話　Ａクラス戦２　もこたんは帽子（後書き）

やっぱりいろいろとフラグを立てる明久でした。
え？手紙？友人からか・・・なになに・・・
明久はもこたんから後ろから抱きつかれてるならすなわち胸が・・・
『蓬莱「凱風快晴　―フジヤマヴォルケイノ―」』

作者はログアウトしました

第２３話　Ａクラス戦３　燃え尽きたか・・・（前書き）

注意　久保君にはお気を付けください

第２３話　Ａクラス戦３　燃え尽きたか・・・

「で、では４人目の方前へ」
「じゃあ姫路頼む」
「あ、は、はい」

雄二に言われて姫路さんが前へ・・・？ＦＦＦ団？幽香がそこで山にしています

「姫路さんの試合か・・・どうなるかな・・・」
「そうだね・・・勝たないとやばいもんね」

妹紅が上から聞いてきたのでそう答える。あ、美波が幽香にコブラツイスト喰らってる・・・
あとムッツリーニ美波のスカートの下を写そうとしない

「それなら僕が相手をしよう」
「あっ、あれは！」
「やはり来たか。現学年次席、久保利光」

復活するのはやいな・・・あれ？久保って・・・

「大丈夫だよ明久」
「そうね」
「「私達が守るから」」
「「私達も手伝いますね」」
「何から？」

４人ともどうしたんだろう・・・

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「構いません」

「やばいな・・・」

「なにが？雄二」

「前のテストで二人の差はそこまでなかったんだ。もし万が一のことがあったら・・・」

「大丈夫だろ」

妹紅がはっきりとそう言った・・・

「何を根拠に・・・」

「見てればわかるさ」

「それでは４試合目開始してください」

「「サモン！！」」

総合科目

Ａクラス　久保利光　３９９７点

ＶＳ

Ｆクラス　姫路瑞希　４４０９点

「な、何だと！！？」

「差が４００オーバーなんて・・・」

「いつの間に・・・」

「あれ代表にも匹敵するんじゃ・・・」

Ａクラスの面々の反応すごいな・・・

「先生、合図を」
「あっ…！し、失礼…」

先生、さっきから驚きすぎです・・・
なるほど確かに妹紅がの言うとおりだね

「ぐっ…！姫路さん、この短期間にどうやってそこまで強くなったんだ！？」
「私、このFクラスが好きなんです！誰かの為に一生懸命になれるこのクラスの皆が！」

うん・・・確かに一生懸命だね嫉妬面では・・・

「Fクラスが好き？」
「はい！だから、私は頑張れるんですっ！」
「だとしても、僕も負ける訳にはいかないっ！」

なんとか拮抗してるけど

「やぁっ！」
「あっ！？」

姫路さんの大剣が久保君の大鎌を真っ二つにヘシ折り、すかさず左腕を相手召喚獣に向けて翳す。
あ、あれは・・・

『シュボッ』

腕輪の能力を発動させ、ほぼ零距離から放った熱線砲。成す統べな

く久保君の召喚獣は消し炭と化してしまった。
それを見て僕は・・・

「燃え尽きたか・・・」
「？どうしたの明久」
「いや・・・なんか電波を・・・」
「「？」」

「しょ、勝者、Ｆクラス」
「お疲れ様、姫路さん」
「はいっ！私やりましたよ、吉井君っ♪」

うん？
なんか嬉しそうというか、桃色オーラが・・・

「アキ・・・「ハイハイ黙っときましょうね」そろそろ腕といて幽香！！？？？」

あら？いつの間にか名前呼ぶようになったんだね～

「む～」
「？どうふぃふぁふぉふぉふぉう」（？どうしたの妹紅）
「べつに～」

いきなりほっぺ引っ張ってきて・・・

「５人目の方前へ」
「あ、僕だね」
「おう、逝ってこい」
「雄二漢字変だよ」

「気にするな」

さて行こうかな・・・

「ちょっと待った～～～」

するといきなり乱入者が・・・

「な、だれ「問題ないさね」が、学園長!?」

「今回の実験のスポンサーだよ」

うん・・・何となくわかってたけど・・・

「紫・・・空気読もうよ・・・」

・・・ハァ

第２３話　Ａクラス戦３　燃え尽きたか・・・（後書き）

まさかの咲夜の登場を妨害して登場した紫。
この作品での紫は基本ダメっ子です。
あとアンケート結果ですが
・台詞の前には名前をつけない

・映姫の外見は１７歳（明久くらい）程に決定しました
アンケートにお答えいただきどうもありがとうでした

第２４話　Ａクラス戦４　説明（前書き）

さて説明と明久の能力が・・・

第２４話　Ａクラス戦４　説明

「あ、ごめんなさいね。私は八雲紫と言って召喚獣のシステムの制作担当の一人よ」

まぁ、ちょっと記憶をいじってそうなってるけど関わってるのは確かだね・・・

「な、製作者だと」
「でもなんで・・・」
「あ、なんでここにいるかというと新システムの実験を頼んでる子たちがいるからその説明よ。ってことで吉井君、カモン♪」

・・・なんていうか・・・・

「話は別としてふざけた行動をしないでください」
「話は聞いてたけど空気を読んでください」

慧音、永琳言いたいことありがとう

「えっと、八雲さ「ゆかりんでいいわよ」ふざけないでください」
「うぅ・・・」
「あ、Ｂクラスの壁ありがとうございます」
「気にしないで」
「じゃあ紫さん説明お願いします」
「分かったわ」

「今回だけどちょっと幻想郷関係者である貴方に頼みたいの」
「今回のあの学園長の考えてるシステムどうしても危険だと言って

るんだけど聞かなくてね」
「教育者としてどうなんですかそれ…」
「で、それを疑似的に作るために明久に頼みたいことがあるの」
「なんですか？」
「一つは直死の魔眼を発動しないこと、これは実験と表して境界をいじるからそれを殺されたら困るからよ」
「うん」
「もう一つは明久の能力を押さえてほしいの、理由はさっき言ったとおりね」

僕に能力の一つで「あらゆる状況下で我を貫く程度の能力」と言うのがありこれは、
認識しさえすれば、時が止まろうがその影響を受けないのだ。咲夜の能力が効かなかったのもこれのおかげ。あと自分自身で考えれば思考を読まれるのを拒否したり、幻覚等も効かず、紫の境界制御すら効かないはっきりいってチート的能力だが難点もあり、認識できていないと発動しなし、物理的？なものは防げないし、自分自身にしか意味がないのだ。

「わかったよ、それだけ？」
「えぇ、ところで私の境界の力は役に立ってるかしら？」
「うん、荷物とかの持ち運びにすごく」
「・・・ほんと無欲よね・・・」
「そうかな？結構貪欲だと思うけど・・・」

そしてもう一つの能力、それは「力を共有し昇華させる程度の能力」
・・・『あの子』いわく、こちらは僕が本来もとから持っている能力らしい。
これは相手と力を共有しその力を使うことができる物である。力ははっきり言って固定的意味はなく技術力や魔力等も共有して身につ

け自分自身に合わせて昇華してしまう。志貴さんとの修行はこれのおかげでかなり早く覚えた。
ただし身につけるためには、理解し、その行動を行い、それを受けることが条件であり、妹紅の「死なない程度の能力」などは覚えることができない。また相手が拒否した場合力の共有は行えない。

(明久の能力がわかりにくい場合は明久のキャラ紹介を)

「後フィードバックだけど２０％ほどつくわ・・・」
「うわ・・・けがしたらホントどうするんだろう」
「えぇ・・・しかも困ったことに追加だからはっきり言って明久は４０％近くのフィードバックを食らうってことよ」
「・・・もう何も言わない」
「もう咲夜にも伝えてるけど合図したら「イリュージョン」って言ってちょうだい」
「なんで？」
「それらしく見せるためよ」

まぁいいか

Ｆクラス陣

ある程度省いて雄二達に説明した。

「で、明久どうだった」
「なんかちょっと用意がいるみたい」
「しかしあの婆あほか？」
「婆って・・・言いすぎだよ」

まぁ確かに言いたくなるけどね

「用意出来ましたので5人目の方、前に」
「いってくるね」
「「行ってらっしゃい」」
「気を付けてくださいね明久君」

慧音・・・心配なのはわかるけど・・・

「逝ってこい」
「ハァ・・・・」

境界のずれたフィールド

「ごめん待たせたかな？」
「いえ、待ってないわ明久」
「じゃあ・・・」
「「楽しもうか（しみましょう）」」

ｓｉｄｅ雄二

「明久が負けるのはわかってるし、あいつがボロボロになるのを楽しむかね（笑）」

コイツ学習しないのかな・・・・

「吉井君なんだか楽しそうですね・・・」
「そうね、お仕置きが必要かしら・・・」

「「「「またか、またなのか！吉井の野郎！！」」」」
「どっちかというとお仕置きが必要なのはあなた達よ」

あいつ等は幽香に任せよう

「坂本、あんたの予想だけど確実に外れるよ」
「何？」

「教科は何にしますか？」
「えっと古文で」
「では召喚してください」
「「サモン！！」」

古文
Aクラス　十六夜咲夜　６１３点

「「「「な・・・！！？？」」」」
「な、なんだよあの点数！？」
「さっきの土屋ってやつを超えてるぞ！！」
「てか代表でも無理なんじゃ・・・」

Aクラスの反応すごいな

「な、化け物かよ・・・」
「あんなのアキに勝てるわけない・・・」
「吉井君・・・」

ハァ・・・

「何言ってんのさ・・・」

「そうね・・・」
「「明久は」」
そして明久の点数が遅れて表示された
「「あれよりもすごいよ（わよ）！！」」
Ｆクラス　吉井明久　６８４点
「「「「「「「「「・・・・・・・・・・えええええええええ！
！！？？？」」」」」」」」」」
学園が揺れた

第２４話　Ａクラス戦４　説明（後書き）

まあ普通に考えて永琳のとこで勉強してたんですから・・・
点数はほぼ適当です

番外　キャラ紹介　吉井明久（前書き）

主人公のキャラ紹介です

番外　キャラ紹介　吉井明久

吉井　明久
読み　よしい　あきひさ
能力：『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』『力を共有し昇華させる程度の能力』
スタイル　身長は１７０程度　ほっそりしているが鍛えられている
外見：茶髪に濃い茶色の目、それなりに美形に分類される（アニメ１期のエンディングの容姿で少し髪が長い）
召喚獣の能力：『スタイルチェンジ』
１００点を消費して武器、外見が変化する。最初はランダムだが一回発動させるとそのあとはコストなしで武器は変換可能。（総合の場合は１０００点消える）
しかし外見（服）は一回なると変えることができない。あと低い確率だが『大当たり』が存在する。
点数：慧音、永琳から教えてもらっているためどれも高い
口調：年相応
能力について
『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』
認識していれば時が止まっていようがその影響は受けず、意識すれば心を読むことも、幻術にかけることも、境界などをいじることすらも拒否できる。
しかし気づいていることが条件で不意打ちや認識できていない状態だと発動せず、また物理的干渉については拒否できない。しかし、命になどが危険にさらされるような物理的なものは除く干渉には自動的に発動する。指定は自分自身のみ。
明久はこれが自分の能力だと思っていたが、
実はというと、誰かの能力を昇華して手に入れたわけでもなく、『』に何度も明久が繋がり続けたために手に入れた能力である

『力を共有し昇華させる程度の能力』
明久が元から持っている本来の能力。
相手と力を共有する能力。また共有した力は使うことができる。
力に制限はなく、他人の能力もだが魔力等もさることながら、技術力ましてや生命力等も共有できる。
しかし相手側から拒否されると共有できない。
また能力や技術力に関しては自分に合わせて昇華させることにより身につけられる。
しかし、認識、見る、行う、感じる等条件があり、妹紅の『死なない程度の能力』など条件が無理なものは覚えられない。

『直死の魔眼』
本来は違うらしいが今のところはこれで表現する。
物の死を見ることができる目。これが読み取って視覚化するのは単なる生命活動の終了ではなく、意味や存在における「いつか来る終わり」「死期」「存在限界」であり、「存在の寿命」そのものである。直死の魔眼所有者にとって「死」は黒い線と点で視認され、強度を持たない。魔眼所有者がこの「死」を切ったり突くと、対象（有機、無機を問わず、時にはより広義・上位概念上の存在も含む）を殺すことができる。
しかし明久に関しては狂気など、精神等にも干渉できるらしく、志貴いわく「似ているが全然違うもの。性質が悪ければ直死の魔眼より上位の魔眼」らしい。
本来の名前は『虚無の神眼（クリフォト）』。明久が真理の扉を開いたことにより手に入れた物

今のところ共有して身につけている物で分っているもの
七夜の技術　永琳の才能（劣化版）身体能力　直感　霊力　魔力

『空を飛ぶ程度の能力』
『魔法を使う程度の能力』
『気を扱う程度の能力』
『剣術を扱う程度の能力』
『境界を操る程度の能力』（境界を開くことしかできない）
『あらゆる薬を作る程度の能力』
『怪力乱神を持つ程度の能力』（劣化版、せいぜいコンクリートを砕く程度。しかし霊力等で肉体強化をした場合十数トンは出るみたいだ）

設定：基本は原作と変わらないが頭は良い。しかし天然で時折すごいボケをかます。
ある意味ねじが抜けており、慧音の正体等聞いたり見たりしても「だからどうした」というほど神経が図太い。またあまり怒らずとても優しいが、怒ると手がつけられず、昔暴走した時、幻想郷の最強勢が総出で止めにかかったが止まらないほどである。しかし無敵というわけではなく、負ける時は負ける。
夢想天生を発動した状態の霊夢と戦うことができ、殴り合いになるとどうしても明久に分があるため、今のとこ事実上幻想郷最凶。
努力家でもあり、仲間のためなら自分すらも犠牲にする。が本人いわく「けがとかは気にしないけど死ぬつもりはさらさらない」らしい。
後なぜだかわからないが幻想郷の住人いわく彼には嘘などがつけないらしく、胡散臭いといわれる紫ですら彼と話しているときは胡散臭くないそうだ。（てゐですら嘘をつくのをためらう）
そしてやっぱり鈍感。それなりに性に興味はあるが相手が嫌がることはしたくないので表だっては出さない。
主な使用武器はナイフの七ッ夜。一応ほぼすべての武器が使用可能でナイフ投擲技術なども高い。素手による格闘も美鈴との組み手で得意としている。

首に制服等で隠れているがひし形をした結晶のついたネックレスをいつもつけている。
この結晶は『刹那』と明久は呼んでおり、武器に変化する。

ｙｕ－ｚａ－ゴートンさん作です

＞ｉ３７４６４－４２５１＜

番外　キャラ紹介　吉井明久（後書き）

書きなおし、追記ははしていく予定です

第２５話　Ａクラス戦５　メイドと執事？（前書き）

分割
後アンケートあります

第２５話　Ａクラス戦５　メイドと執事？

ｓｉｄｅ妹紅

古文

Ａクラス　十六夜咲夜　６１３点

ＶＳ

Ｆクラス　吉井明久　６８４点

いや～やっぱり高いな…

咲夜の召喚獣だか外見はメイド服に犬耳と尻尾である（いぬさくや

「な、あ…あり得ない…」

「あの馬鹿の代表が６００オーバーだと!?」

「ふ、不正じゃ…」

驚くのはいいが、最後の二人覚えてろよ?

「…藤原、どういう事だ?」

「見たまんまだ」

「でもアキがあんな…」

「明久は八意先生に勉強を昔から見てもらってたのよ」

「みんな馬鹿だの何だの言ってるけど、明久私達の中で一番頭良いんだよ?」

「…」

信じてないな

「…ならなんで隠してたんだ？それになんで今更…」
「別に隠すんじゃなくて目立ちたくなかっただけだろうし」
「今日咲夜と本気でやると約束した、って言っていたわね」
「？あの二人一言も喋ってないぞ？」
「大体なら視線で会話出来るし」
「「視線だけで…」」

…羨ましいのは分かるが明久に殺気むけるな…

ｓｉｄｅ明久

！？な、なんか美波達から殺気が…
「やはり明久に勝てませんでしたね」
「いや点数がすべてじゃないし分からないよ」

紫を見ると扇子を閉じた…合図だね

「じゃあ」
「始めましょうか」

「「イリュージョン！！」」

召喚獣が光になり僕達を覆い尽くす。そして光が消えると僕達の見た目（服等）は召喚獣と同じになっていた。

「召喚獣との融合か…」
「結構違和感あるわね…」

「動いて慣れよう」
「では、５試合目を開始します」

まずやることは…

「スタイルチェンジ！！」

吉井明久　５８４点

光が僕を包み、手には七ッ夜を持ち服は…

執事服だった

「「「「／／／／／／」」」」

何でさ…

第２５話　Ａクラス戦５　メイドと執事？（後書き）

明久の幻想郷での話ですがこの作品の番外編見たいに書くか、別投稿で書くか投票してください

第２６話　Ａクラス戦６　人間最強ＶＳあらゆる意味で最凶（前書き）

時を止めれるってある意味人間最強ですよね

第２６話　Ａクラス戦６　人間最強ＶＳあらゆる意味で最凶

ｓｉｄｅ慧音

とりあえず言いたい

「「「「戦う執事とメイドですね」」」」

ん？どうも皆と意見が重なったようだな

紫いわく周りに被害はいかないように結界が張っているらしいが心配だな・・・

「・・・あれ本当にアキなの？」

咲夜と切り合ってる明久を見て島田さんがつぶやいた

「あの二人は獲物が似てるからね～結構仲いいんだよな・・・」

「そうね、あの子たちたまに昔なじみじゃないのかしらと思うくらい息あってるものね？」

「え？八意先生どういうことですか？」

永琳の言葉に姫路さんが質問した

そうだったなこの子たちは知らないのか

「十六夜さんが吉井君にあったのは中学生くらいの時なんですよ」

「そうね」

「そう言えばその時くらいから八意先生、明久に医学と勉強を本気で教え始めたんでしたっけ？」

「まぁ上白沢先生と一緒にですけどね」

「今でも見ていますが、八意先生には勝てませんがね」
「えっとどういうことなのじゃ？」
「あ、貴方達は知らないんだったわね。八意先生は・・・天才といわれるほど秀才なのよ？」

月の頭脳といわれるくらいだからな

「「「「「「・・・天才」」」」」」
「医学もさることながら学者としても優秀。ここのシステムの管理等も行っているわね」
（（（（（この人なんで保健医してるんだ？）））））
「ちなみに保健医をしているのは吉井君のためだからよ？」
「「「「「くそ！！またなのか！？やはり処刑を・・・」」」」」

その意気込みを勉強に向けてほしいものだ・・・

「しかし明久達動き悪いな」
「多分体を慣れさせてるんじゃないかしら？」
「おいまて藤原、今何て言った？」
「だから動き悪いなって言ったんだよ」
「な、あれでか！？」

まるで舞うようにナイフをぶつけあう二人・・・しかし

「確かに。吉井君、十六夜さんに慣れさせるためでしょうね。手を抜いてますね」
「え、十六夜さんが手を抜いてるんじゃなくてアキが手を抜いてるの！？」

この子たちの中での明久の扱いとはどんな物なのだろうか・・・

「・・・・二人が止まった」

みたいだな・・・あれは・・・

『『さぁ、始めようか（始めましょう）！！、楽しい死愛を！！』』

「！！慧音、幽香、永琳！！」

「分かってるわ！！」

「急ぐぞ永琳！！」

「えぇ！！」

明久・・・本気でやりすぎるなよ？

ｓｉｄｅ明久

結構打ち合って、動きに慣れ始めたころ

十六夜咲夜　５７２点

ＶＳ

吉井明久　５７２点

「明久、もう結構慣れたし点数も同じみたいだからそろそろ本気でやらない？」

「そうだね～あんまりちんたらやってたら後がつっかえちゃうもんね」

後二試合あるし、もう結構動けるから問題ないでしょ

「いくよ・・・？」
「えぇ・・・」

「「さぁ、始めようか（始めましょう）！！、楽しい死愛を！！」」

同時に僕たちは数本のナイフを投擲、そしてそれに突っ込む
ナイフが弾きあうのは分かり切ってる。所詮これは目くらまし

そして近くで対面した僕たちは

「ふっ！！」
「はぁ！！」

『キンッ！！！』

互いにナイフを相手に向かって切りはらった

ｓｉｄｅ妹紅

『ゴウッ！！』

「「「「う、うわぁ！！？？」」」」
「ふう、間に合ったみたいね」
「そうだな」

私と幽香はＦクラス、永琳はＡクラス、慧音は教師陣、紫は高橋先生と学園長の盾になるように前に出た。あ、ＦＦＦ団だっけ？吹き飛んじゃったな、まあいいか

「な、なによこれ！！」
「ん？気当たりだよ」
「な、気当たりだと！？」

ま、明久のだろうけどね。・・・結構ストレスためてたんだね・・・
・

「なんでお前ら平気なんだ！！」
「それは感じ慣れてるからに決まってるじゃない」
「そそ。だからお前らの盾になってる」
「なんというかマンガみたいじゃのぅ・・・！！」
「確かにそうですね・・・」

ここまで口きけるなら大丈夫だろ…明久・・・勝てよ・・・

ｓｉｄｅ明久

僕と咲夜は縦横無尽に駆けながら切り合う

「・・・遅い！！」
「！？」

ｌ閃鞘・七夜ｌ

僕は急加速をし懐から斬りかかるも

「させません！！」

どこからともなくナイフが現れそれを妨害する

ナイフの設置と制御、咲夜の召喚獣の腕輪の能力は指定した場所にナイフを設置したり、ナイフの動きを制御する能力みたいで厄介だがいつものことなので気にしない

僕は壁、天井ありとあらゆる場所を駆け抜けながら咲夜に切りかかり、咲夜はナイフの投擲と腕輪の能力を駆使し時には自分の時間を早くしてものすごい速さでで突っ込んで切りかかってくる

「ふふ、やっぱりあなたとの戦いは楽しいわね」

確かに・・・でも隙だらけだよ♪

「切り裂く!!」

ー閃鞘・二拾掬威ー

僕は急接近して咲夜に掴みかかり、逆手で僕側に切り払い、掬うように切り上げしゃがむようにナイフを流した・・・これならしゃがむことにより相手の視覚から消えたように見え反撃はできない

「くっ!!」

しかし咲夜も喰らって終わるわけではなく、受け身を取りながらナイフを投げてきた

「ちっ!!」

こっちが相手の点を削れば相手が、相手が削ればこっちが・・・

「幻符「殺人ドール」!!」

咲夜はナイフをばら撒き、そのナイフは咲夜の周りを回っていたかと思うと僕に向かって飛んできた

「散れ！！」

ー閃鞘・散華時雨ー

無尽蔵にやるようにみえながらも僕は正確に刺突でナイフ落としていく。ちっ！！何本か落としきれなかったか！！

「斬刑に処す！！」

ー閃鞘・八点衝ー

僕は咲夜に向かって無尽蔵に斬撃をばら撒く

「くっ！？傷符「インスクライブレッドソウル」」

咲夜もそれに対して斬撃で対応してくるも数発かは当たる

「時符「イマジナリバーチカルタイム」」

そう咲夜が宣言した瞬間大量のナイフが現れる。

僕はそれを避け、時には弾き、潜り、飛び越えながら咲夜に近づき

「遅すぎるんだよ！！」

ー閃鞘・一風ー

肘鉄を当て投げ飛ばした

「つっ・・・光速「C・リコシェ」」

な、くそこの狭い空間じゃあれはきついけど

ー閃走・水月ー

僕は反射しながら来るナイフのタイミングをずらすために壁、天井ありとあらゆる場所を駆け抜けながら避けるも最後の最後でカスってしまう

「・・・やっぱ避けきれないね」

「・・・それだけ避けられれば十分だと思うんだけど」

鍔ずり合いをしながら互いに点数を確認する

十六夜咲夜　１１２点

ＶＳ

吉井明久　１０９点

微妙に負けてるな・・・

「咲夜、もう点数も時間もきついし次の一撃を最後にしよう」

「そうね。明久・・・」

「なに？」

「勝ったらひとつ願いを言ってもいいかしら」

「うん、出来ることならね。でも・・・」

「勝たなきゃ意味がない」

僕達は距離を取る・・・
僕は水月で0からトップスピードに入り咲夜に接近する

「・・・・!!幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」」

咲夜の周り全体を襲うようにナイフが飛び交う

「・・・・」

しかし僕はまるで慣性の法則を無視したかのように急停止した

「なっ!!??」

急停止したことにより予想が外れたのだろう、ナイフは本来僕がいるはずだった目の前を通り過ぎる。
僕はまた高速で接近にしながら消えうせた。そして

「「「「え?」」」」

「なっ!?」

周りからの驚愕の声・・・そう周りや咲夜には僕が『2人』に見えているのだろう・・・

「・・・弔毘八仙、」

ー閃鞘ー

地に伏せるように疾走する僕と、上空を飛ぶように舞う僕から同時に咲夜に向かって斬撃が放たれる

「無情に服す・・・」

ー迷獄沙門ー

咲夜は棒立ちになり・・・僕は蹲るようにして現れる

「あっ・・・」

十六夜咲夜　０点　戦死

「し、勝者Ｆクラスです・・・」

静まり返った教室に高橋先生の声が響く・・・

あ・・・やばいな・・・意識が・・・この頃まともに自主練できなかったし、フィードバックの影響かな・・・

僕はそのまま闇へと落ちて行った・・・

第２６話　Ａクラス戦６　人間最強ＶＳあらゆる意味で最凶（後書き）

咲夜と明久の試合でした
ちなみに死愛は誤字ではないのであしからず

捕捉で永琳は明久に永夜変以降から勉強等を見ており、一応その前から知り合い程度には関係を持っていました

第２７話　Ａクラス戦７　そして・・・（前書き）

明久の気絶した後のお話、そしてまさかの幽香の弱点が！？

第27話　Aクラス戦7　そして・・・

・・・あれ？・・・またなんか後頭部に柔らかい感触が・・・

「う・・・ん・・・」

「あ、吉井君起きましたか」

「・・・慧音？」

「・・・まぁ、上白沢先生と言いなさいというところですがいいでしょう」

上から慧音が覗き込んでくる・・・あ～膝枕か・・・

「えっと、咲夜は？」

「今そこで八意先生から治療を受けてますよ。あ、噂をすれば・・・」

「明久、大丈夫かしら？」

「大丈夫だよ。ところで実験はどのように？」

「中止よ。いくらなんでも生徒が怪我するんじゃ危ないじゃないの」

「しかし、学園長「はぁ、こりゃだめさね」と言って吉井君達に労いの言葉も謝罪もせず帰るなんて・・・」

「「ホントお話が必要かもしれませんね、あの人」」

（（頑張って生きてください、学園長））

なんだか横がうるさいなと思い見てみると

「邪魔しないで！！幽香、アキに説教をしなきゃなんだから！！」

「そうです、妹紅ちゃん！！吉井君とお話できません！！」

「「「「「異端者には死を！！死を！！！！」」」」」

「ねぇ、明久・・・」

「言わないで、咲夜・・・」

あいつらに労いという物はないのだろうか・・・あ、幽香と妹紅が切れて吹き飛ばした

「では６人目の方お願いします」

高橋先生、冷静なのはいいですが止めてください

「じゃあ風見頼んだ」

「仕方ないわね・・・」

「幽香・・・」

「明久は休んでなさい。妹紅があれは止めてるし、最悪の場合八意先生も止めてくれるでしょ？」

「ふふ、当り前でしょ」

「・・・がんばってね」

「行ってくるわ」

Ａクラスも誰が行くか決まったみたいだね

「では、教科はどうされますか？」

選択権はＡクラスだ

「社会で」

・・・社会・・・・

「やばい！！」

「何がやばいんだ明久」

雄二復活してたんだね。それより

「いや幽香にはその・・・弱点があって・・・」

「では始めてください」

今回の社会のテストは「ある物」が大半を占めていた・・・それは・・・

社会

Ａクラス　佐藤美穂　３０１点

ＶＳ

Ｆクラス　風見幽香　１８９点

「幽香は社会の倫理が大の苦手なんだ・・・」

「「「「え？」」」」

ある程度幽香も召喚獣は使えるけどあの点数だときついわけで・・・

「勝者Ａクラス」

「ごめんなさい・・・」

「大丈夫だよ、今度から一緒に頑張って勉強しよう」

「・・・そうね（一緒に・・・か／／／）」

「それでは7回戦を始めます。代表者は前に出てください」

「俺の出番だな」

今3対3・・・この試合で決まる・・・（起き上がろうとしたが永

琳に止められたためまだ膝枕中

「科目は？」
「科目は日本史、内容は小学生レベルで方式は１００点満点の上限ありだ！」
「分かりました。そうなると問題を用意しなければなりませんね。このまま待っていてください」
「上限ありだって？」
「しかも小学生レベル、満点確実じゃないか」
「注意力と集中力の勝負になるぞ」

雄二がいったん戻ってきたので

「坂本、負けたら承知しないからな」
「みんなの努力無駄にしないでね」
「が、頑張ってください」
「当り前だ」

さて僕からは

「雄二・・・」
「なんだ？明久、いい御身分だな」
「からかわないで、勉強してきたよね？」
「ふっ、大丈夫だ」
「準備が出来ましたので、代表者は視聴覚室に来てください」

高橋先生の呼びかけに答えて、雄二と霧島さんが教室を出る。

「試合状況と問題内容がそちらのディスプレイに映されますので、代表者以外の生徒はそちらを見てください」

これで確認できるってわけだ

「不正行為は失格となります。良いですね？」

「……はい」

「わかっているさ」

「では始めてください」

ディスプレイに次々と問題が映されていく・・・

次の（　）に正しい年号を記入しなさい。

・
・
・

（　）年　大化の改新

あった・・・

「あった……あったぞ！」

「じゃあ、ウチらの卓袱台が……」

「俺たちの勝利だ！」

「「「うおぉぉぉぉぉぉ！！」」」

・・・

「どうしたのかしら？明久」

「いや・・・雄二ってさ中学校時代『悪鬼羅刹』って言われててね」

「・・・にあわねぇな」

「それで勉強をしてなかった人間が点を取れると思う？」

「無理ですね、普通は」

「でもさっき明久君の質問には返事してたわよね？」
「八意先生・・・多分あの大丈夫は・・・」

あ、結果が表示された

日本史　限定テスト　１００点満点
Ａクラス　霧島翔子　９７点
　　ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　５３点

「勉強しなくても大丈夫だっていう意味だよ」

やっぱりか・・・

「４勝３敗でＡクラスの勝利です！」
「……とまぁこうなる」
「ふふふ」
「あははは」

二人が怖い・・・

こうして僕達Ｆクラスはちゃぶ台がミカン箱になった。

第２７話　Ａクラス戦７　そして・・・（後書き）

次回、雄二の処刑

第２８話　Ａクラス戦　戦後対談　そして幻想入り？（前書き）

いや～もうＰＶが１０万行きそうだ・・・

第２８話　Ａクラス戦　戦後対談　そして幻想入り？

「……雄二、私の勝ち」
「……殺せ」
「フフフ、いい覚悟ね・・・」
「ハハハ、カンタンニシネルトオモウナヨ」
「幽香、妹紅おさえて」

僕は幽香と妹紅の前に出て抑えた

「大体５３点ってなんだよ！？これが０点とかだったら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この中途半端な点数だと！！」
「いかにも、俺の全力だばぁっ！！？」
「雄二も威張るな」

いかん妹紅の言葉に威張るように雄二が返事したからつい足が・・・

「……でも危なかった。雄二が「所詮、小学生の問題だ」と油断していなければ負けていた」
「言い訳はしねぇ」
「明久の予想道理なのね」
「明久コイツ本気で燃やしちゃだめ？」
「妹紅ダメだから押さえて、ね？」
「む～」

冗談にしても全然笑えない

「……所で、約束」
「……！（カチャカチャカチャカチャ！）」

「手伝うぜ、ムッツリーニ！」
「照明、スタンバイＯＫ！」
「おい、そこのレフ板持ってこい！」
「なんかこいつら見てると頭が冷えてきたよ・・・」
「そうね・・・」
ホントなんでこんなのしかいないんだろう・・・
「分かってる。何でも言え」
「……それじゃ」

「……雄二、私と付き合って」
「「「「「・・・・・・・・・・はい？？？」」」」」
「明久の予想道理ってわけね」
「だな」
「でも雄二とは思わなかったな」
「「確かに」」
「……やっぱりか。お前、まだ諦めてなかったのかよ」
「……私は諦めない。ずっと雄二の事が好き」
「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気は無ぇのかよ？」
「……私には雄二しかいない。他の人なんて興味無い」
「拒否権は？」
「……無い。約束だから。デートに行く」
「ちょ！？ちょっと待て！！」

霧島さんが雄二の襟首をつかみ引きずっていくと・・・

「ちょっと霧島さんいいかしら？」
「・・・・何？」
「その（ゴニョゴニョ」
「・・・そうなの？」
「えぇ、そうしたほうがいいわよ」
「・・・・・」
「あ、私の名前は風見幽香よ」
「風見、いい人ありがとう」
「どういたしまして」

？幽香何言ったんだろう・・・

「雄二・・・」
「・・・・なんだ・・・？」

すると霧島さんは雄二を立たせ腕に抱きついた

「行こう？」
「ちょ／／／腕放せ！！／／／／／」

『ガラガラ、バタン』

「幽香なんて言ったの？」
「内緒よ。しいて言うならちょっとしたおせっかい」

フム・・・女の子とは分からないな・・・

「…さて、お遊びの時間は終わりだ。Ｆクラスの諸君」
「あ、こんにちは鉄人」

「鉄人ではない、西村先生と呼べと言ってるだろう藤原」
「どうしたんですか？こんな時間に」

もう放課後だ

「おめでとう。お前達は戦争に負けたお陰で、担任から上白沢先生から俺に変わるそうだ。これから死に物狂いで勉強が出来るぞ。ちなみに上白沢先生は副担になられた」
「「「「「「え、えぇぇぇ！！！！？？？」」」」」」

なるほど

「いいか。確かにお前達はよくやった。学年最低ランクであるFクラスがここまでやるとは正直夢にも思わなかった。だがな、いくら『学力が全てでは無い』とは言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つになるんだ。それが現実だ。全てでは無いからといって、蔑ろにして良い物ではない」
「とりあえず吉井と坂本は念入りに監視…と言いたいところだが吉井に関しては補修も免除だ」
「「「「「「な、なんでですか！！」」」」」」
「たしかになんでですか？」
「吉井と藤原、風見の補修に関しては八意先生が受け持ってくれるそうだ。あと監視については俺はお前を信用してるからな」

やっぱり鉄人は僕が観察処分者になった理由を引け目に感じてるのかな・・・

「取り敢えず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」
「「「横暴だぁぁぁーー！！！」」」

「黙れ！只でさえお前達は試召戦争で本来受けるべき授業が大量に潰れてるんだから当然の措置だろうが！休日まで補習漬けにしないだけありがたいと思え！」

「さぁ～て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は前に言ってた駅前のクレープでも食べに行こうか♪」
「え？ちょっと美波？何でいきなりそんな話に…」
「だ、駄目ですっ！吉井君は私と映画を観に行くんですっ！」
「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がって無いよ！？」
「はいっ！今決めました！」
「なっ・・・・」

『ガラッ』

「「「「ん？」」」」
「あ、明久いたわね」
「咲夜？どうしたの？」
「その・・・明久様、今日お嬢様がお食事会を開きたいそうでご参加いただけませんか？」
「え？レミリアが？うん、大丈夫だよ」
「あと風見様達も・・・」
「なら行こうかしら」
「私も。じゃあ永琳と慧音には私が伝えとくよ」
「ありがとうございます」

しかしレミリア達と会うのも久しぶりだな・・・

「それと・・・」
「？」
「明久今日の試合では私が負けたから命令権は貴方にあるわ」

「「「「「「な、なんだと!?」」」」」」
「アキ～」
「吉井君・・・」
「「ハイハイ、貴方達は黙っとこうね～」」
う～ん。あ、そうだ
「じゃあさ、今日の食事でパエリア作ってよ」
「・・・それでいいの？」
「うん」
「・・・心をこめて作るわ」
「楽しみにしてる」
「後、買い物手伝ってほしいのだけれど・・・」
「構わないよ、じゃあ行こうか」
「「な、まっ・・・」」
「「ハイハイ邪魔しない」」
「じゃあ幽香たち後で」
「「わかった（わかったわ）」」
こうして僕と咲夜は買い物をして・・・

ある丘

「さて集まったかしら？」
紫が確認をしてくる。
僕、妹紅、幽香、慧音、咲夜。永琳は事務処理と学園長の教い・・・

お話のために無理だそうだ。

「うん、みんないるよ」

「では幻想郷へごあんな～い」

そして僕達は隙間へと入って行った

第２８話　Ａクラス戦　戦後対談　そして幻想入り？（後書き）

ちょっと霧島さん修正。
だってあれは見ててかわいそうなんだ・・・
次回紅魔館でのパーティです

第２９話　紅魔館の人々？　ステミタックルは致命傷になります（前書き）

紅魔館お食事会編です
曜日ですが金曜日ということになってます
では、どうぞ

第２９話　紅魔館の人々？　ステミタックルは致命傷になります

隙間を通り僕達は紅魔館の門の前にいる。（紫は寝るそうだ）
妹紅、慧音、幽香は一回家に戻るらしい。
紅魔館の門・・・そしてそこには・・・

「・・・Ｚｚｚｚ」
「・・・・・・」
「・・・・・・（チャキッ」

『ヒュッ、トスッ』

「あ痛！？」
「何寝ているのかしら・・・」
「さ、咲夜さん・・・」

彼女は紅　美鈴。紅魔館で門番をしているのだが・・・正直来たときはたいてい寝ている・・・

「明久、先に入ってお嬢様にあってきて。私は彼女と話があるから・・・」
「あ、明久くん助け・・・」
「えっと、わかったよ」
「明久くん！？」

ごめん、庇いようがないんだ・・・

紅魔館主の間

「ひさしぶりね、明久」
「そうだねレミリア、少しは背のびた？」
「いきなり雰囲気壊さないでくれないかしら！？」

この子はレミリア・スカーレット。紅魔館の主で吸血鬼である。
しかし・・・ほんと小さいな・・・

「明久・・・すごい不快な気分になったんだけど・・・」
「えっと、・・・れみ☆りあ☆」
「う～～☆♪」
「・・・」
「・・・はっ、な、なんで今のを・・・」
「え？咲夜から買い物の時にやってみたら？って言われたから・・・」
「咲夜ー！！！？？」

うん何となく咲夜がかわいいって言った意味がわかったよ

「う～知られたからには・・・」
「え？ちょっと！？何槍構えてんのさ！？」
「明久殺して私も死ぬ～～～！！」
「どこのヤンデレ発言！！？？」

音声のみでお楽しみください

「逃げるな～～～！！」
「逃げるに決まってるでしょ！！」
「神槍「スピア・ザ・グングニル」！！」
「うわっ！？」

「な、殺すなんて卑怯よ！！」
「いや、当たったら危ないからね！？」

数分後

「すみません、お待たせしました・・・って何ですかこの状況・・・」
「おつかれ・・・咲夜」
「～♪」

部屋は荒れ、レミリアは僕の髪をいじって遊んでいた

「ちょっとレミリアが暴走してね・・・」
「は、はあ・・・そう言えばお嬢様明久様に何かお話が・・・」
「～☆・・・あ、そうだったわ。明久今からパチェのところに行ってくれないかしら？」
「？いいけど」
「用意ができましたらお呼びしますね」

さて図書館っと

少年移動中

紅魔館地下の大図書館

「・・・なにこれ・・・」

目の前には崩れた本の山・・・
？気配が・・・って！？

「ちょ！？パチュリー！？今助けるから！！」

本をのけること数分

「むきゅ～～～～」

「ふう・・・」

とりあえず隙間から医療セットを取りだし・・・

「う・・・ん・・・」

「あ、気づいた？」

「明久？来てたのね」

「うん、とりあえずシップはるから動かないでね」

「・・・うん／／／／／」

「ところでなんでこんなことに？」

「・・・魔理沙が来てたのよ・・・この頃また借り癖が悪くなってきてね・・・」

「・・・・・・」

「あ、明久？」

「うん？何かな？ちょっと魔理沙とお話ししなくちゃね（ニコッ」

「（ごめんなさい、魔理沙。怒らせちゃいけない人怒らせたわ・・・）」

「あ、パチュリー話って？」

「あ、魔道書のことなんだけど・・・こあ持ってきて」

あ、こあやっと気がついたみたいだね

このあと僕達は魔道書の解析をしていた

「ありがとね明久」
「いやいいよ」
「明久様、パチュリー様食事会の準備ができました」
「うん、わかったよ。ほらパチェリー」
「・・・なにかしら？」
「足、まだ痛いでしょ？おぶってってあげるよ」
「・・・・・・お、お願いするわ／／／／／」

ロビー

「あ～き～ひ～さ～♪」

いきなり黄色い物体が・・・

『ドゴッ！！』

「ゴフッ！！」

鳩尾あたりにステミタックルをかましてきた・・・ぐっ・・・パチュリーを背負ってるから倒れられない！！

「や、やあフラン久しぶりだね」
「うん！！」

僕に抱きつきながらにこにこしている少女・・・フランドール・スカーレット。僕は時々思う・・・果して彼女を救えたのだろうか？と。でも彼女に会うとそれも杞憂だと実感する。

「さ、今日はお食事会だしそれが終わったら一緒に遊ぼうか？」
「やった～」

こうして食事会が開始し、咲夜のパエリアの出来に驚き、幽香がレミリアを弄っているのに参加し、慧音がハクタク化してちょっと混乱し、みんなで人生ゲームをして僕とフランチームが優勝し楽しんだ。

そして就寝・・・部屋全体が赤くて目が痛かったです・・・・

第２９話　紅魔館の人々？　ステミタックルは致命傷になります（後書き）

おまけ
紅魔館朝

「・・・・・・」
「・・・・・すぅ・・・・」右　パチュリー
「・・・・うにゅ・・・・」左　レミリア
「・・・あきひさ・・・・」上　フラン
「・・・・なんか前にもあった気が・・・・」

第３０話　町の人々　森と人形使い？（前書き）

ＰＶ１０万達成。早いのか分からないけど・・・現代で土曜日のお話
ちなみに記念短編は書きます

第３０話　町の人々　森と人形使い？

朝・・・門の前に二つの影・・・

「・・・ふっ！！」

「・・・しっ！！」

僕と美鈴は組み手をしていた・・・

「ふう、ありがとうございました」

「いえいえ。しかしそろそろ本気で抜かれそうですね・・・」

「あははは、じゃあ頑張って抜かないとね」

「ふふ、そう簡単に抜かれませんよ」

「さ、そろそろ朝食だし行くかな」

食事中

「さていろいろとありがとね」

「また遊ぼうね～あきひさ」

「ではまた学園で」

「また来なさいよ」

「何かあったら連絡するわ」

僕は町へと向かった

町（てか村）

「お、明久じゃねえか久しぶりだな」
「あ、おじさん久しぶりだね」
「明久君、妹紅ちゃん達とは仲良くしてる？」
「はい」

村に入るといろいろな人が声をかけてくる
ん？あれは・・・

「霊夢、魔理沙」
「あれ？明久じゃん」
「明久帰ってきてたのね」

まず巫女服の少女が博麗霊夢。博麗の巫女で妖怪退治と異変解決を仕事としているが・・・めんどくさがりでもある。そして・・・

「霊夢、ちゃんとご飯食べてる？」
「・・・ちゃんと仕事して食べてるわよ・・・」

一時何もしなかったために瀕死になりかけたりしていた

そして黒白も少女が霧雨魔理沙。自称普通の魔法使い。この二人は昔から異変解決時一緒に解決してきた仲間だ。
そういえば魔理沙には悪いとこもあって・・・あっ

「そう言えば…魔理沙・・・」
「ん？・・・どうしたんだぜ？明久（なんだろう・・・冷や汗が・・・）」
「（・・・なんだか帰りたくなったわ・・・）」
「また・・・借り物癖悪くなってきてるみたいだね・・・」

そう魔理沙は昔から物借り癖は悪かったが一時「死ぬまでの間借りているだけ」と言い泥棒まがいな借り方をしていた時期があり・・・・（その後それを知った明久はぶち切れた）

「どうもまた・・・ムカシニモドッテキテルミタイダネ？」
「え、そ、その・・・」
「オハナシ、シヨウカ？（ニコッ」
「「「「「「ご愁傷様です」」」」」」

「いやあああああああああああ！！！！」

「もう、借りた物はちゃんと返すこと、そうすればまた貸してくれたりするんだから」
「・・・はい」
「わかったね？」
「ごめんなさい・・・」
「（やっぱり明久は怒らしちゃだめね・・・）」
「なんだかすごい悲鳴が聞こえたのだが・・・」
「？あ、藍久しぶり」
「久しぶりだな、明久」

彼女は八雲藍。紫の式神で九尾狐、昔は丁寧語で僕がため口でいいと言ったのでため口で話している。ただしたまに丁寧語になる。

「どうしたの？」

「あ、紫さまから伝言があってな」
「僕に？」
「あぁ、実は・・・・・・」

ふむ・・・なら行くとしたら魔法の森かな？いるといいな・・・

少年移動中

魔法の森

・・・いるといいんだけど・・・

『コンコン』

「どちら様？って、明久どうしたの？」
「うん、ちょっと用事があってね。今大丈夫かなアリス」
「えぇ、紅茶入れるからあがりなさい」
「ありがとう」

彼女はアリス・マーガトロイド。魔法使いで人形使いとも言われる。

「で、用事って？」
「あ、紫から現代入り許可が出たって・・」
「ホント！？」
「ほ、本当だから落ち着いて・・・」

外での技術とかいろいろと興味があるらしく、紫に頼んでいたらしい。藍の言伝はこれの許可だそうだ。

「えっとなんか条件があって」

「何かしら？」
「1、吉井明久の近くにいること。2、学園教師という形で入ること。3、能力制限をつけること」
1は安全策らしい。2は多分生活手段でだろう。
3に関しては幻想郷の住人は現代の人間からすると当り前だが力が強く、もしものことがないように制限がかけられている。外す方法は僕か紫が許可したときだけみたいだ。
「わかったわ。（学園て明久の行ってる学園か・・・生徒じゃないけどいいか）」
「じゃあ用事も終わったし・・・」
「帰るの？」
「いや久しぶりだし話しよう」
「そうね」
この後家の帰りつくと・・・慧音が隅で蹲っていた・・・
ごめん帰る時間言ってなかったね・・・・
泣きつかれながらそう思った・・・・

第３０話　町の人々　森と人形使い？（後書き）

１０万記念・・・明久の観察処分者になったわけを書く予定です

第３１話　太陽の畑（前書き）

・・・うんスペルカードがわからん

第３１話　太陽の畑

「あやや、明久君ではないですか」

村を歩いてると下駄を履いた少女から話しかけられた

「あ、文。久しぶり」

彼女は射命丸　文。天狗であり、本来は１０００年近く生きている最高クラスの妖怪なのだが、戦闘は好まず新聞記者をしている。あと羽だと思っていたがあれは羽毛らしい・・・

「あ、そうだ。文、はいこれ」
「なんですか？」
「現代での記事と、シャーペンと手帳後カメラ」
「おお、これはまたありがとうございます」
「いいよ、気にしないで」
「しかし現代も楽しそうですね・・・」
「来たいの？」
「いけたら行ってみたいものですが・・・あ、明久君？間違っても大天狗様のところに突っ込まないでくださいね！？前の時は本当に心配したのですから」

まさか考えを読まれるとは・・・

「あ、そうだもう少ししたら僕の学園で学祭があるんだけど来る？」
「学祭ですか・・・」
「一応紫に言ってみるけど？」
「では今回はご厚意に甘えましょう。ところでどこか行くんですか

？」
「太陽の畑だよ。幽香との約束で」
「それは呼び止めてすみませんでした」
「いいよ、ちょうど探してたし」
「ではお気をつけてくださいね～」
「うん、またね」

さて、行くかな

少年移動中

太陽の畑

「や、お待たせ」
「そうね、じゃあ始めましょうか・・・」
「だね」

開始と同時に幽香が弾幕をばらまく。

「なら僕も・・・」

僕は手の中の魔力で短剣を大量に作り出しそれを弾幕に向けて投擲した

普通の短剣なら意味はないが、これは魔力で作った短剣・・・

『ボンッ！！』

短剣が弾幕に当たると爆ぜ、連鎖的に爆発し幽香の弾幕を消し去った

「簡単にはいかないわね・・・なら花符「幻想郷の開花」」
まるで花のように並べられた弾幕が敷かれる
僕はそれを避け、避けれない場合は魔法刃で相殺していく
「なら僕も行くよ刃符「散華時雨」」
閃鞘・散華時雨を表すように魔法刃広範囲にばらまく
「さっきの貴方のやり方借りるわ」
「え?」
「幻想「花鳥風月、嘯風弄月」」
「あ・・・」
互いの弾幕は相殺し合う・・・あ、煙幕の役目か!!
「しまっ「捕まえた」!!」
「マススパーク!!」
こうして僕の負けが決定した
「今回は負けちゃったな~」
「持続戦になるとあなたのほうが有利だから速攻で決めさせてもらったわ」
「でもホントにこんなことでいいの?お願い」
僕と幽香は太陽の畑で紅茶を飲んでいた。あ、クッキーもあるみたい

「いいのよこれで。昔を思い出せるからね」
「そういや幽香と初めて会ったのもここだったね」
「・・・覚えてたのね」
「うん、大切な記憶だもん」
「そう・・・明久こちらへいらっしゃい」

幽香は太股を指さす

「・・・え？」
「ふふ、昔みたいに膝貸してあげるわよ？」
「はは、じゃあお言葉に甘えようかな」

僕は幽香に膝枕をしてもらいながら…

「この一週間楽しかったけど疲れたや」
「なら・・・おやすみなさい。帰る時は起こしてあげるから」
「うん・・・おや・・・すみ・・・幽香・・・『お姉ちゃん』」
「えぇ、おやすみなさい」

僕は太陽の畑の優しい雰囲気のなか眠りについた・・・

自宅

その後自宅に帰りつき、

「さて明日からミカン箱だな・・・」
「そうね・・・」
「そう思うと憂鬱だよな・・・」

「あ、そうだ！！慧音」
「ん？なんだ明久」
「大掃除したいんだけどダメかな？」
「う～ん、西村先生と相談してみよう」
「ありがとう」

さて、掃除でもすればそれなりに快適になるだろ

第３１話　太陽の畑（後書き）

魔法刃＝魔力で作った短剣と思ってください
短編でもすこし言ってましたが、明久は幽香のことを一時『幽香おねえちゃん』と呼んでいました。

ＰＶ１０万超え記念短編　観察処分者（前書き）

明久が観察処分者になった経緯です
クラスが違うこともあり、あまり東方組が出ないかも・・・

ＰＶ１０万超え記念短編　観察処分者

それは帰り道・・・
何となく幽香たちに何かプレゼントをしようと思って、商店街を歩いていたら

「これ買えないのですか？」
「お譲ちゃん、このお金じゃ無理だよ」
「うぅ・・・・」
「あぁ・・・・どうしたらいいかな・・・」

人形屋で泣きかけの少女とそれを見て困ってるおじさんがいた

「どうかしたんですか？」
「いやね・・・この子がこの人形が買いたいそうなんだが、お金が足りなくてね。ほかのを薦めるんだが・・・」
「これじゃないとだめなんですぅ」
「この一点張りでね・・・」

そこには可愛らしい人形があって・・・って高！！
さすがにこれは・・・

「おねえちゃんのプレゼントはこれじゃないとだめなんですぅ・・・」
「えっとどれくらい足りないんですか？」
「～円だよ」

元の値段の半分くらいか・・・

一応お金はあることにはあるんだけど・・・まっ、すごく質素になるだけか・・・
「ちょっと待っててもらえますか？」
「？大丈夫だが」

僕は銀行に走りお金をおろした

「はい。これとこの子の出したお金で足りますよね？」
「あぁ。だが坊主、いいのかい？」
「いいですよ」
「そうか、いい男だね～ちょっと待ってな包んでやるから」
「えっと・・・」
「おねえさん喜ぶといいね」
「・・・ありがとうですぅ、優しいお兄ちゃん」

その子はうれしかったのだろう人形を抱えて走っていった。
ハァ、質素に生きるかな・・・

キングクリムゾン！！時間は消し飛ぶ！！

明日、親の仕送りがくる。それまでの辛抱だ
なんとか時折幽香や妹紅宅にお邪魔し空腹を耐えた・・・

「今日は持ち物検査をする」
「「「「な、なんだと！？」」」」
あ～僕には関係ないか・・・

放課後

ふう、なんとか乗り切ったこれであとは夜家に帰ってご飯を・・・

「やばい見つかったぞ逃げろ!!」

「うん?」

「明久?・・・!!」

?雄二どうしたんだ?

「明久荷物は俺に任せて逃げるんだ」

「え?何言ってるの?」

雄二は叫ぶと走っていった。うん?この足音は・・・

「吉井!!お前も共犯か~!!」

「え・・・鉄人?」

急接近しこぶしを振り上げる鉄人

『ゴツン!!』

あ、やばいこの頃まともにご飯食べてなくて体力が・・・

その後、鉄人には誤解は解けるも点数も悪く、よく雄二達とつるんでいた僕はあまり良く思われていたのか、観察処分するべきではないかという意見が上がった。

鉄人、慧音、永琳は僕を頑張って弁護するも学園長はこれを聞き入れず・・・

「吉井、本当にすまなかった・・・」
「いえ、いいですよ。目をつけられてたのは僕自身が悪いですし」
僕は紙見つめた・・・その紙には
『本校の吉井明久を本日より観察処分者とする』
こうして僕は、学園初の観察処分者となった。
ちなみにその事件当日（鉄人によって気絶させられた日）の夜僕は永琳、慧音、幽香、妹紅からなんで相談しなかったのかと説教を食らった・・・
僕からすると観察処分者になるよりあっちのほうが辛い・・・

ＰＶ１０万超え記念短編　観察処分者（後書き）

あら？なんか雄二がひどい扱いになってるけど・・・まあいいか

第３２話　手紙？ラブレター？よし殺そう！！　１（前書き）

今回は
逃げる明久
追うバカ達
守る東方勢
でお送りします

第３２話　手紙？ラブレター？よし殺そう！！　１

朝、いつもならいる二人は紫達と共に、アリスのことについて話会いをするそうだ
しかし思ったけどアリスどこに住むんだろう？まぁ、ない時はうちでもいいけどね（ちなみにこのことについての話だったりする）

「うん？吉井か、おはよう」
「あ、先生おはようございます」
「藤原達はどうした」
「なんか用事で・・・」
「あ、すまないんだがグランドにゴールポストがあるんだが、校門近くまで運んでおいてくれないか？」
「分かりました」
「すまないな」
「いえ、観察処分者の仕事ですから」
「・・・本当にすまない・・・」
「だから気にしないで下さいよ、西村先生」
「あぁ、たぶん先生がいるはずだから召喚はその先生に頼め」

僕はゴールポストを持ち上げ（先生等誰もいなかったので素手で）校門まで運んだ

「・・・吉井、教師は居なかったのか？」
「いやそれが・・・」

『ピンポンパンポーン～』

《文月学園教師は至急職員室に集まってください》

「あれが原因見たいですね」
「すまなかった、もう行っていいぞ」
「はい」

僕は少し遅れて昇降口へ行き靴箱を開くと・・・手紙？

「う～ん・・・？」

これ・・・あ、ちょっと術式が書いてるな・・・

「どうしたんだ？明久」
「あ、おはよう雄二」

まぁ、読むのは後でいいか

僕達は教室に入ると、その後すぐにチャイムがなり鉄人が入ってきて出席を取り始めました

「工藤」
「はい」
「久保」
「はい」

幽香たちの話いわく、アリスは咲夜と同じく幻想郷から通うみたいだ（紫にそれ専用の術を書いた札を二人は貰っている）

「坂本」

「・・・・・・明久がラブレターを貰ったようだ」
「・・・・え?ちょっと何言ってんのさ!?」
「「「「殺せ!!!!」」」」

雄二の一言にクラスメート達から殺気が・・・

「お前らっ!　静かにしろ!」
「「「「はい・・・」」」」
「それでは出席確認を続けるぞ」
「手塚」
「吉井コロス」

『ピクッ』

「藤堂」
「吉井コロス」

『ピクピクッ』

「戸沢」
「吉井コロス」
「・・・どうもお前達は補習時間を延ばされたいらしいな」
「「「「いえ、めっそうもございません!!」」」」

「布田」
「吉井マジ殺す」

『『ブチッ』』

「藤原」

「お前ら覚悟できてるよな・・・」
「あら、妹紅それなら私も参加するわ」
「「「「「「「「「・・・・・・（あぁ、忘れてた）」」」」」」」」」
「では、勉学に励むように」
「「「「「「「「「先生助けて！！！！」」」」」」」」」
「お前ら、勘違いするな」
「「「「「「「「「はい？」」」」」」」」」
「自業自得だ」
「「「「「「「「「いやあああああああ！！！」」」」」」」」」

確かに・・・

「明久ラブレターもう見たのか？」
「いや、まだだけど。てかラブレターじゃ・・・」
「明久君もう読んだんですか？」
「どうなのアキ！？」

何焦ってるんだろうこの二人

「いや、お昼になったら読む予定」
「明久、どんなの？」
「これ」
「これは・・・」

（あ、幽香わかった？）
（多分アリスあたりでしょうね）

妹紅は魔法関連がわからないみたいだが視線で話すと理解してくれた

「・・・・・明久君、それが例の手紙ですか？」

「えっと・・・どうしたの？姫路さん」

目にハイライトがない・・・

「諸君。ここはどこだ？」

「「「「最後の審判を下す法廷だ」」」」

「異端者には？」

「「「「死の鉄槌を！」」」」

「男とは」

「「「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」」」

「宜しい。これより、ＦＦＦ団による異端審問会を開催する」

復活するのはやいね！？君達

「妹紅、幽香ごめん。ノートとか取っといて」

「わかったけど、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

ー閃走・水月ー（ちょっと早さ抑え版）

『逃がすな！　追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！』

『サーチアンドデェースっ！』

せめてデストロイって言おうよ！！

『待ってください明久君。お話がまだですよ』

『待ちなさいアキ！』

ある意味きみたちのほうが怖いからお断りします！！

「はぁ、なんか逃げてばかりだな・・・」

僕はため息をつきながら窓から飛び出て壁を走るのだった

第３２話　手紙？ラブレター？よし殺そう！！　１（後書き）

鉄人は明久に対して原作よりは優しいです

第３３話　手紙？ラブレター？よし殺そう！！　２（前書き）

長くなりそうだったので分割

怒らない人を怒らせると、とてつもなく怖いです

第３３話　手紙？ラブレター？よし殺そう！！　２

ｓｉｄｅ妹紅

明久大丈夫って言ったけど心配だな・・・

「あら妹紅、心配？」
「うん、あんな奴らでも明久って手加減したりするから・・・」
「そうね・・・」
「では授業を・・・って藤原さん皆さんは？」

慧音が入ってきた。あ、１限目歴史か

「実は・・・・・・・・・」

少女達説明中

「・・・ハァ・・・ある程度は見逃していたけど・・・」
「うん、やっぱ心配だ」
「授業をさぼるだけでなく明久を殺しに行こうとは」

「「「よし、ヤリに行こう」」」
「あやつら生きてられるかのぅ・・・」

恋する乙女とは時としてとてつもなく恐ろしい

ｓｉｄｅ明久

「吉井の野郎どこだ!?」
「おい須川、A、D、F班がやられたそうだ」
なんとか罠にかけながら逃げてるけど・・・執念深すぎでしょ!!
??
「アキ~どこなのよ」
「まだお話してないのに逃げるなんて」
いや、君達とお話する理由ないからね?
保健室とかAクラスとかに逃げ込もうにも待ち伏せがありいけなかった
くっ、罠だろうけど屋上行くしかないか
「よぉ、遅かったじゃねーか。明久」
「雄二……!」
屋上のドアを開けると雄二がどや顔で立っていた。うわ・・・腹立つ
「雄二! 何で根も葉もない嘘で僕を不幸に貶めようとするんだ!」
「どうして? 決まっているだろう……」
雄二は何を今更という顔で答える。決まっている?
「明久、俺はお前の幸せが心底、大ッ嫌いだからだ!!」
そういや、そんなこと言ってたね・・・
後ろから島田さんと姫路さんが鉄球とかを持ってって現れる。あれ

？　こ、殺す気なのか……彼女たちは

「アキ。じっくりはなしてもらうわよ？」
「大丈夫ですよ？　お話するだけですから……」

いや、聞く気ないでしょ！？

「諸君、ここはどこだ？」
「「「最後の法廷だ！！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きるもの！！」」」
「よろしい。これより異端者、吉井明久の処刑を実行する！！」

ちっ！！集合が早い！！

「・・・・・異端者は許さない」

ムッツリーニ・・・そうか！！彼の情報操作か！！

「「「「死死死死死死」」」」
「さぁ、アキお仕置きよ！！」
「・・・・異端者には死を」
「あははははははは（大爆笑）」

・・・・・・・・

『ブチッ』

「フフフ、あは、アハハハハハハハ」
「「「「な、なんだ!?」」」」
「な、何よいきなり笑いだして!!」
「・・・・おかしくなった?」

「さっきから聞いてれば殺しとかどうとか、ならやられる覚悟はあるんだよなぁ?(ニヤッ」

「「「「「!?」」」」」
「え、え?」
「・・・・・(ブルブル」
「あ、明久?(あ、そう言えば藤原達が明久は自分達より強いって言ってた気が・・・)」

何みんな震えてるのかな~?

「遺言はあるかい?」
「「「「「に、逃げていいですか?」」」」」
「逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・極彩と散れ」

「「「「「「ぎゃあああああああああああああああああ!!!!」」」」」」

「はぁ、案外大丈夫だったみたいだけど・・・」
「止めなきゃよね・・・あれ」
「私達で勝てるかしら・・・」
「ちょっと微妙だな・・・」
「場合によっては誰かが明久君にキスでもしてみたら?」

「「「「なんでそうなる（の）！！／／／／／／」」」」
「伝承みたいに戻るかもしれないし、明久君ならなんか気絶しそうだもの」
「永琳本当になりそうだからやめてくれ・・・」
「だって前慧音がキスした時・・・」
「いうなあああああ！！！！／／／／／／／／／／」
「とりあえず、」
「止めようか・・・」
「「「「「ハァ・・・」」」」」

この後僕は咲夜たちによって止められた。慧音、顔真っ赤だけどどうしたんだろう？

手紙の内容だが、これからよろしくの意と学園と町の案内の頼みでしたとさ

第３３話　手紙？ラブレター？よし殺そう！！　２（後書き）

さてどうだったでしょうか。
え？慧音の顔が真っ赤な理由？早い話頭突きって・・・

第３４話　新任教師と大掃除と駆け引き？（前書き）

友人との会話
友「なな、影月」（本名呼びですが変えてます
影「？なんだ？」（ストーリ等制作中）
友「これさ１８き・・・」

『バキッ』

影「なんか言ったか？」
友「調子に乗ってすいませんでした」

あの時、怒りに任せて殴った私は悪くないと思う！！

第３４話　新任教師と大掃除と駆け引き？

朝、緊急集会が行われ、新任教師の紹介が行われた

「アリス・マーガトロイドよ。担当科目は今回から新しくつけた召喚獣の操作技術について教えるわ」

「うわ～すげ美人」

「肌白～い」

「てか俺らと歳近いのかな？」

結構ざわついてるな・・・まあ仕方ないか。アリスの外見は金髪で肌の色は薄く、瞳は薄い水色。見ようによっては人形のような容姿をしているしね。

「以上、緊急集会を終わります」

Ｆクラス

「え～上白沢先生との話の結果、大掃除を行おうと思う」

鉄人の一言で始まった大掃除・・・結果は・・・

「ダメだ・・・こいつ腐ってやがる・・・」

「こっちもだ」

「てか、下の板まで腐ってね？」

悲惨だった。畳は８割方が腐っており、下の板まで腐敗し始めている・・・

「雄二・・・さすがにこれって・・・」
「ひどすぎだな・・・」
「よくこれで文句言われなかったな・・・」
「・・・上白沢先生、八意先生呼んでくれませんか？」
「いいですよ」

さて・・・僕も準備するかな・・・

キングクリムゾン！！

ただ今僕達（永琳、慧音、幽香、妹紅）は学園長室前にいる。

「失礼します」
「あ、明久君さすがにノックしなさい」
「確かに失礼なガキだね」
「失敗する実験を手伝わせといてお礼や謝罪もしない学園長に対する礼儀なんて持ってません」
「・・・はぁ、ところで何のようだい？」

あ、ケンカ売るほうから先にしちゃったや

「ただいま大掃除したところ畳は腐っており、下の板も腐敗していました。」
「それで？」
「ですので人体の影響を八意先生に頼んで見てもらったところ、健康に害を及ぼす可能性が非常に高いとのことですので、方針ということは理解していますが、せめて下の板と畳の交換の許可をもらいたくて来ました。まぁ畳に関しては中古等でも問題ありません」

「ふむ・・・」

学園長は悩むそぶりをする・・・実際悩んでないだろうな・・・

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「では？」

「却下だね」

「なぜですか？」

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちょろいガキども。」

「専門家が危険と言ってるんですよ？」

「だろうと方針だよ」

「生徒がどうなろうと関係ないと」

「なんと言おうとだめだね」

ハァ・・・この手段はとりたくなかったけど・・・

「分かりました。では今からＰＴＡに訴えてきますね？」

「なに言ってんだい」

「いや、だって『カチッ』」

『専門家が危険と言ってるんですよ？』

『だろうと方針だよ』

『生徒がどうなろうと関係ないと』

『なんと言おうとだめだね』

僕はボイスレコーダーを流す

「僕はちゃんとした理由、確認、証拠、対応を持ってきました。それを方針だからの一点張りで対応する様な学校を野放しにできると思いますか？」

「・・・」
「誰も方針を変えろとは言いません。ただ中古でもいいから畳と板を変える許可をくれ、と言ってるだけです」
「・・・ちっ、分かったよ。ただしその取り付けとかは「こっちでやります」はぁ、じゃあもう帰んな」
「失礼しました」

僕達は学園長室を出た

「明久・・・」
「ん？どうしたの？」
「いやあれだと目をつけられるんじゃ・・・」
「そうだね～でも悪いのあっちだし」
「畳とかはどうするの？」
「あ、それは」

僕は境界を開き探る・・・

「フィッシュ！！」

そして釣りあげたのは枕を持った紫だった

「「「「・・・え？」」」」
「あ、明久・・・なにかしら？」
「ごめんね。実は・・・」

少年説明中

「ハァ・・・もういいけど、こうやって私を扱うのはあなたくらいよ？」

「あはははは」
「とりあえず幻想郷で余ってる中古の畳と板を持ってくればいいのね？」
「うん、お願いね」
「じゃあ、戻りましょうか」
「私は戻るわね」
「ありがとね、永琳」
「ふふ、いいわよ」

少年少女移動中

「ということで、明日板と畳を取りかえることになったから」
「・・・明久、お前何したんだ？」
「何もしてないよ？雄二」
「よしじゃあ補習を開始するぞ」

西村先生も来たし席つくかな・・・ミカン箱だけど

「あ、吉井実は頼みがあるんだが・・・」
「なんですか？」
「いや、本人からの依頼でな」

『ガチャッ』

するとドアが開いて

「失礼するわ」
「な、あれって」
「確か新任のアリス先生」
「きれいだな・・・」

アリスが入ってきた

「あ、明久居たわね」

「どうかしたの？」

「前案内頼んでたでしょ（第３３話参照）」

「あ、そうだったね。西村先生・・・「かまわん。それについて言おうとしてたからな」じゃあ行こうか」

「「「「「ま・・・」」」」」

「ん？ま？」

「「「「また吉井かあああああ！！！」」」」」

「なんだ？えぇ？貴様にはフラグ建築機でもあんのか！！」

「え？何言ってんのみんな！？」

「アキ・・・」

「吉井君・・・？」

「なに？ふたりとも。なんか怖いんだけど・・・」

「「お話いいですか（かしら）？」」

いや話する気ないでしょ・・・

「えっと・・・アリスごめん」

「え？」

僕はアリスを抱えると教室から逃げ出した

「「「「「「ＦＦＦ団の名に懸けて吉井！！貴様を殺す！！！」」」」」」

「待ちなさい！！アキ！！」

「待ってください、吉井君！！」

僕は逃げながら

「なんで僕頑張ったのに追いかけられてるんだろう・・・」

「／／／／／／／／」

一人愚痴るのだった

次の日、腐った畳と板は中古の（幻想郷製）畳と板になった。

第３４話　新任教師と大掃除と駆け引き？（後書き）

さて次回から本編に戻ります
まだアンケートは受け付けております。

第３５話　清涼祭１（前書き）

う～ん原作組一回でもいいから幻想入りさせようかな・・・

第３５話　清涼祭１

暖かくなり、新緑の芽吹き始めたこの季節。俺たちの通う文月学園では、新学期最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。どのクラスも学園祭の準備の為のＬＨＲの時間は活気に溢れている。

そして我がＦクラスというと・・・

「横溝！　こいっ！」

「勝負だ、須川！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備なんてせずに校庭で野球をしてやがった

こいつら・・・なんでこういうとこで協調性ないのかな・・・

「僕達だけでも決めようか・・・」

ただ今教室にいるのは僕、幽香、妹紅、秀吉、美波、姫路さんそして・・・

「何にするの？明久」

なぜかアリス・・・

「なんでアリスがここにいるの？」

「慧音さんから貴方達を見るよう頼まれたからよ」

慧音、貴女の心配は的中してしまいました

『貴様らー！！何をしている！！』
『げっ！？鉄人が来やがった！！』
『に、逃げろ！！』

「もうちょっとしたら皆来るし待とうか・・・」
「「「「「は、はぁ・・・」」」」」

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

雄二は教壇の上から俺たちを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。
ちなみにさっき西村先生に全員連れてこられた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心底どうでも良さそうな雄二の態度。ぶっちゃけ『そいつに全部押しつけて俺はサボる』ってことだろか？

「んじゃ、学園祭実行委員は島田でいいか？」

どうやら実行委員は美波に決まったらしい

「別にいけど・・・補佐つけていい？」
「好きにしろ」
「じゃあ・・・」

補佐候補

1：吉井

2：明久

・・・・・・・・・・

「どっちがいい？」
「ねぇ・・・どっちも僕な気がするんだけど・・・」
「甲乙つけがたいな・・・」
「そうだな・・・」
「「「だってどっちも、バカだし」」」

なんだろうか・・・みんなひどくないかな・・・

「はぁ、これじゃ話が進まないわね・・・明久、私が進行するから筆記お願いしてもいいかしら？」
「え、ｎ「分かったよ」あ、アキ！？」

アリスの言葉に美波驚いてるけど

「確かに決定を渋るならそっちのほうがいいわね」
「幽香何言ってるのよ！！」
「あ～どうでもいいから早く進めようよ」

美波が幽香に食ってかかろうとするが、妹紅が制止する。ありがとう妹紅

「じゃあ何か案はあるかしら？」

アリスの声に何人か挙手する

「はい、えっと土屋君」

「……（スクッ」

名前を呼ばれてムッツリーニは立ち上がった

「……写真館」

「写真館だね」

「次は、姫路さん」

「メイド喫茶……というのはよくあるのでウェディング喫茶っていうのはどうでしょうか・・・？」

ふむ、やっぱ女の子ってそういうのに憧れるのかな？

「はい、須川君」

「ウェディング喫茶も斬新で良いが、ここは味勝負で中華喫茶はどうだ？　本格的なウーロン茶や簡単な飲茶を出したりするんだ」

「じゃあ、ある程度出たから多数決を取るわね。最初に・・・・」

結果から言うと中華喫茶となった

「では、次にホール班とキッチン班に分けます。ホール班は坂本君、キッチン班は須川君の方に行ってね」
「僕どうしようかな・・・」
「う～ん明久料理うまいしね・・・」
「時間ごとで両方したらどうかしら」
「「なるほど」」
「あれ、康太もキッチン班？　料理できるの？」
「……紳士の嗜み」

絶対違うな・・・

「あっ、それじゃあ私はキッチン班に……」
「姫路はホール班に決定済みだ」
「そうね、貴女は調理台に立っちゃだめよ」
「ど、どうしてですか！？　私、料理が好きなのに！」
「なんであの子あんなに言われてるの？」

あ、アリス知らないんだっけ？

「姫路さんはね、前酸味が足りないからって・・・硫酸を入れたんだ。料理に」
「・・・姫路さん」
「なんですか？アリス先生」
「貴女はホール班で決定よ」
「な、なんでですか！？」
「さすがに私も死者は出したくないの・・・」
「先生ひどいです！？」

いや仕方ないと思う・・・

「私もホールにしようかな」
「おねがいね、美波。ただでさえ女の子少ないし頑張ってね」
「分かったわ」

うん？なんか死亡フラグを回避した気が・・・

「でも、なんかそれだけじゃインパクトないよな～」

妹紅インパクトって・・・

「じゃあ、明久に執事服を着せるってどうかしら」
「「それだ！！」」
「いや、なにいってるのさ！？三人とも！！」
「では、昔明久が使用していた執事服を持ってきますね？」
「って咲夜ものらないで！！てかどうしたの？」
「いえ、明久の執事服と聞いて・・・」

君は何ものさ・・・

こうして、僕は執事服を着ることが決定した。くそぅ・・・妹紅、幽香覚えてろよ・・・・

第３５話　清涼祭１（後書き）

明久は死亡フラグを回避しました。

第３６話　清涼祭２（前書き）

結構いろいろと変わりますが、原作どうりいけたらいいな・・・

第３６話　清涼祭２

僕達はある問題に直面した・・・

「そう言えば、台がないね・・・」

そう、台がないのだ、机はミカン箱だから

「しかしどうするのじゃ？」
「まぁそこについては外から持ってこようか・・・」
「そうだね。じゃあ学園長の許可もらってくるかな」
「じゃあさ、ついでにで良いんだけど坂本を呼んでくれない？　ちょっと協力を頼みたいのよ」
「いいけど、前までめんどくさいって言ってたのにどうしたんだ？」

確かに

「……本当は秘密なんだけどね協力してくれることだし。誰にも言わないでね？」
「実は瑞希なんだけど……あの子、このままだと転校してしまうかも知れないの」
「転校？」
「・・・なるほど」
「どうしたの明久？」
「早い話、姫路さんの親がこのクラスの状況を聞いてそんなところ行かせられない、って言ったところでしょ？」
「確かにそうね。クラスのみんなの学習意識のなさ、ある程度良くなったとは言え教室環境の劣悪さ。最悪といっても良いほどの環境だもの。こんなところに娘を任せたくはないわよね」

「学習意識とかは召喚大会に出て、アピールすることでなんとかなるんだけど教室の環境とか喫茶店の出来映えとかになると、やっぱり坂本の力が必要かなって思って……」
「うん、わかったよ。ちょっと待ってね」

僕は携帯を取り出し

「あ、雄二？」
『明久か？何のようだ？』
「ちょっと清涼祭でね」
『俺は参加する気ねえぞ』
「なら・・・（ゴニョゴニョゴニョ）って霧島さんに伝えるよ？」
『な、てめえやめろ！！？』
「なら、手伝ってくれるよね？」
『ちっ！！分かったよ』
「じゃあ学園長室前に来てね」

学園長室前

ある程度雄二に説明した後、僕、妹紅、雄二、幽香で学園長室に入ろうとすると
『……の賞品の……として隠し……』
『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』
「なんか言い争って「失礼します」な、明久！？」
「またアンタかい。何の様だい？」
「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません・・・・・まさか、貴女の差し金ですか？」

確かこの人は教頭の・・・竹原先生だったかな?女子に人気らしいけど僕にはなんだかひどく嫌なものに見えるんだよね・・・

「馬鹿を言わないでおくれ。
どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。
負い目があるというわけでもないのに」
「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」
「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」
「・・・・・・そうですか。
そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

・・・・・・

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

竹原先生は出て行った

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい?」
「その前に・・・」
「ん?どうしたんだい」

僕はポケットから七ッ夜を取りだし壁に向かって投擲した

「な、何してんだい!!」
「学園長、盗聴されてるの気づいてなかったんですか?」
「え?」

僕は七ッ夜をポケットに戻し、壊れた盗聴器を壁から取り出した

「な・・・」
「明久、普通わかるわけないだろ・・・」
ふーん、妹紅がそう言うならそうなんだろうね
「で、話は戻しますが用事ってのは台の調達の許可がほしいんです」
「台ね・・・いいだろう」
なんかあるみたいだねさっきに話からすると
「ただし、こっちの頼みを聞いてくれるならだ」
「何ですか?頼みっていうのは」
な・・・雄二が丁寧語を!?
「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい?」
「えぇ」
今年は清涼祭で2人1組のタッグマッチの召喚大会が行われるらしい
「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい?」
「いや、知りませんけど」
「優勝者には賞状とトロフィーと副賞に『白金の腕輪』と『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』2枚を渡すつもりだよ」
「それが?」
「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」
「なら出さなきゃいいじゃん」

まぁ、妹紅の言うとおりだけど・・・

「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

「契約する前に気付けよ。学園長なんだから」

「うるさいガキだね。白金の腕輪で手一杯だったんだよ。

それに、悪い噂を聞いたのは最近だしね」

雄二の言葉に反論するも一応責任位は感じてるみたいだね

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

「つまらない内容なんだけどね、如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。

『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

「それのどこが悪い噂なのかしら？」

たしかに幽香の言うとおりだね。聞いた限りは普通の噂だ

「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネイトするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと！？」

雄二が大声を上げる

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろう！　今ババアが言ったことは、『プレオープンプレミアムチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」
「くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」
「ふむ。流石は神童と呼ばれているだけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

呼ばれていた、だけどね・・・

「・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる・・・。行けば結婚、行かなくても『約束破ったから』と結婚……。俺の、将来は……」

・・・ガンバレ雄二

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

ボイスレコーダをここで流して、前言った言葉を聞かせてやりたい！！

「つまり頼みって言うのは」
「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、台の件だけじゃなく教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

なんか裏がありそうだな・・・

「わかった。ただし、こちらからも提案がある」
「なんだい？　言ってみな」

「召喚大会は形式はトーナメント制で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」
「それがどうかしたかい？」
「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」
「ふむ・・・。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」
「・・・・・ありがとうございます」
「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」
「大丈夫ですよ」
「それじゃ、任せたよ」

さて、チームを決めなきゃね

「で誰が出る？」
「私と幽香は出れないからパス」

そういや、何人か幻想郷から来るから面倒見頼まれてたね

「じゃあ普通に考えて僕と雄二か」
「だな。やるぞ」
「ふ、任しといてよ」

ついでだし雄二の勉強も見なきゃだよね

第３６話　清涼祭２（後書き）

原作では雄二は自分で勉強していましたがこっちでは明久が見ます

第３７話　清涼祭３　さぁ、どっちを選ぶ！？（前書き）

ちょっと短いかも…
この話の幽香は優しいんですよ？

第37話　清涼祭3　さぁ、どっちを選ぶ！？

清涼祭準備3日目

「…衣装できた」
「え、そういうの着ないんじゃなかったの？」
「売り上げのためだ、すまんが着てくれ」
「仕方ないわね」

美波と姫路さんは服を持って更衣室に向かった。

数分後

「着替えたわよ」
「似合ってるよ」
「…ありがとう…」
「そういえば、ムッツリーニ。藤原と風見のは作らなかったのか？」
「……サイズが…くっ」

ふっ、それなら…

「問題ないよ、雄二。妹紅と幽香のチャイナドレスはここにあるから」
「「「…え？」」」
「ま、まて明久。私は着ないぞ？」
「せっかく作ったのに、きてくれないの？」
「う〝…」
「じゃあ僕も執事服きないよ」
「「そ、それは…」」

いやそこで悩むの！？

「…わかった、着てくる」
「着れば良いんでしょ…」
「……明久、２人の採寸知ってるのか？」
「いや、目測」
「なん、だ…と？」

少しして２人が戻ってきた。

「着たわよ」
「どこかきついとかない？」
「いや丁度いいよ」

幽香は黒に太もも近くまでスリットがあり、妹紅のは深紅に腰までスリットがあるがズボンを穿いている（誰か絵書ける人書いて下さいと頼んでみたり）
しかし、それより皆が注目したのは…

「ま、負けた…圧倒的にｏｒｚ」
「妹紅ちゃん、スタイルいいですね…」
「意外と大きいだと…」
「「「ひｎ「黙れ！！」ぎゃあああ！！」」」」

妹紅の胸元であった。あ、そうそう…

「ムッツリーニ…盗撮したら…わかってるね？」
「……（コクコク）！！」

はぁ、カオスだな…

「あ、そういえばムッツリーニと試作品でゴマ団子作ったんだけど」
「では食べてみるかのぅ」

皆が皿から団子をとって行く。
あれ？数が…

「嘘！？外はカリカリなのに、中はもっちりしてて美味しい！」
「外はガリガリしてて、中はドロリと…グハッ！！」
「雄二！？」

ま、まさか…

ｓｉｄｅ妹紅

まさかあの団子…

「ねぇ、姫路さんもしかして調理場に入った？」
「はい！！ちゃんと上手くなってるって証明したくて」
「味見した？」
「いえ？してませんけど」

この子は…

「姫路さん…貴女には調理場に立つ事も、入る事も禁止するわ」
「な、なんでですか！？」
「あれ見て解らないかしら？」

『雄二!?そこ渡ったら駄目だ!』
『明久君、治療開始しますから手伝ってください』

永琳来てたんだね

「危うく坂本君死ぬとこだったのよ?」
「…それは…」
「なにが悪いのか理解できない限りは、調理場に行かせられないわ」
「…わかりました…」

これで学習してくれればいいんだが…

第３７話　清涼祭３　さぁ、どっちを選ぶ！？（後書き）

絵書いて送ってもらえれば、はりかた調べて（または聞いて）貼ります。
誰か送って～（笑）

番外　明久の一日（前書き）

技、武器等を考えてるシーンです

番外　明久の一日

僕は妖怪山の一角にある開いた場所にいた

「さて、ＤＭＣ４楽しかったな・・・」

今回買ったゲームなのだがあまりにもはまってしまいこの頃寝不足である

「あ、そうだあの武器とか技参考に新しいの技作ってみよっと」

「最初は武器だね・・・『刹那』！！」

僕がそう言うと首にかかった結晶、『刹那』は僕の思いにこたえるように形を変えていく

「お～想像通りだ」

僕の手に握られていたのはＤＭＣ４の主人公が持っていたレッドクイーンの様な大剣だった

「うん、グリップも大丈夫だしイクシードも付いてるね」

グリップを捻るとまるでバイクのエンジンがなるような音が鳴る。

まあ違うとこは僕から流れてる魔力を回収するってとこかな・・・

「さて・・・なら！！」

僕はイクシードフルまで溜める。すると刀身が赤く染まった

「セヤッ！！」

トリガーを引きながら近くにあった木に振り下ろすと、剣に溜まっていた魔力が爆発し木が吹き飛んだ

「・・・威力がわからないからこれはよく使って慣れないとだね・・・」

「次は、っと・・・あ、そう言えば徒手空するのにグラブとか作ってなかったな・・・」

まあ普通に腕を追う感じで指は出てたほうがいいかな？

「出来たにはできたけど・・・」

間違っても人に向けて殴れなさそうだ・・・

「よし・・・あの岩がいいかな？」

僕は近くにあった岩に手を添え・・・

「・・・フッ！！」

ー寸剄ー

体を震わせるように動かし、気をこめて岩をたたいた

『ドガッ』

「うん、手にも全く違和感ないしこれである程度本気で殴れるね」

人間の体って脆いから霊力とか殴る時防御面に大半使っちゃうからね。技の反動の。

「で、えーっと、そうそう槍だ」

次に作り出したのは槍。突くというより斬るがあってるねこれ

「しっ！！」

槍を岩の残骸に振り下ろすと抵抗なく切り裂いた。籠めた魔力や霊力の量で切れ味が上がるっと

「えっと投擲は、っと」

僕は槍を振りかぶると槍が変形し、虹色の光をまとい始めた

「う～んよし。神槍「ロングギヌス（神をも射殺す槍）」！！」

ある意味この目のおかげで間違ってないけど

僕は槍を投擲する

『ビュン！！』

槍はまるで障害はないかのように物を貫いていき、何処かへと飛んで行ったかと思うと、空間が開き手元に戻ってきた。

「さて、新しい武器も作ったし、練習しようかな」

こうして今日も僕の一日は過ぎて行った

番外　明久の一日（後書き）

いや～短・・・

番外　武器、道具説明（前書き）

七ッ夜と刹那の説明です

番外　武器、道具説明

『七ッ夜』
志貴から貰った仕込みナイフ。吸血鬼の攻撃を凌いでも傷一つ付かず、頑丈な物。七夜の技術の継承の証と師弟であった証として貰った

『刹那』
ひし形をした結晶で明久はネックレスとしてつけている。明久の意思によって武器となりその武器は鬼が本気で殴ったり、弾幕等を食らっても傷一つ付かない不思議な金属。
今現在種類は刀、大剣、槍、籠手、脚甲、双剣がある。

『刹那』武器の種類

大剣・・・ＤＭＣ４のレッドクイーンをモデルとしており、イクシード機能（ただし明久から出た魔力を溜めるという形になっている）も搭載している。フルまで溜めると刀身が深紅に染まる

＞ｉ３７４３１―４６８０＜

プレート絵

＞ｉ３７４２３―４６８０＜

槍・・・全体的に赤色をしており、突くより斬るがメイン。投擲時変形する

＞ｉ３７４３０―４６８０＜

上が通常時で下が投擲時

籠手・・・腕を守るだけでなく、魔力、霊力、気を増幅することができ、通常の十数倍の破壊力が出せる
色は全体的に銀
＞ｉ３７４２９―４６８０＜

脚甲・・・籠手とセット。効果は籠手と似ているが、空中に一瞬だが魔力で足場を作ることができる（明久から漏れている魔力を固化させる）
＞ｉ３７４２２―４６８０＜

双剣・・・威力よりも手数を取っている。刀身に魔力をまとわせることが可能
＞ｉ３７４２８―４６８０＜

グローブ・・・殴るためではなく、鋼糸を扱う。指一本から十数本出せるらしい

絵作成中

明久の持つ道具
白金の腕輪・・・明久と永琳の魔改造により点数制限解除
同時召喚
使用者の点数を二分してもう一体召喚獣を呼び出す機能を持つ。ただし主獣（メイン）と副獣（ダブル）２体の動きを一人で制御しなければならないため、

操作には多大な集中力を要し長時間の使用は厳しいのだが明久のあり得ない思考処理によりこれをなしている。起動キーは「二重召喚『ダブル』」

ユニゾン

明久と永琳により魔改造され付いた効果。仲間を指定し（同意が必要）その召喚獣と融合する。

点数は相手の召喚獣の半分を自分の召喚獣に追加した点数でもしも相手が腕輪等が使えた場合、相手の召喚獣と同じ能力も使える。起動キーは「融合『ユニゾン』」

霊糸の指輪・・・１０個の指輪で霊力を込めると鋼糸を出す。博麗神社で明久が見つけ貰った

転移の呪符・・・紫の妖力が籠っており、幻想郷と現代を行き来できる（ただし充電式

番外　武器、道具説明（後書き）

絵は出来次第更新。下手でごめんなさい・・・

第３８話　清涼祭４　いらっしゃいませ、お嬢様（前書き）

キャラ紹介東方編で身長修正
武器説明修正

第３８話　清涼祭４　いらっしゃいませ、お嬢様

「明久、台はここでいい？」
「うん。あ、須川君その台もうちょっと右」
「ここか？」
「うん、じゃあ台の並びはこれでいいかな」

台は紅魔館から借りて来ており、クロスは１００円のものだが・・・

「うん、見た感じ悪くないね」
「どう？進んでる？」
「・・・雄二いる？」
「結構きれいね」
「あ、咲夜に霧島さんに秀吉のお姉さん」

雄二は・・・いない。
逃げたか・・・って霧島さんはやっ！？

「吉井君、私は優子でいいわよ。呼びにくいだろうし」
「じゃあ優子さんで。そう言えば咲夜ありがとね、台」
「問題ないわ。明久からの頼みって言ったら、お嬢様大喜びで使用許可をくれましたから」

じゃあ、レミリアにお礼いわないとだね

霧島さんが雄二を連れて来て、みんなが集まった

「そういえば優子さんとかは召喚戦争に出るの？」

「私は代表と一緒に出るわよ」
「・・・・優子と一緒に出る」

雄二の腕に抱きつきながら霧島さんが答える

「ウチも瑞希と出るわよ」
「はい、頑張りたいと思います。妹紅ちゃん達は出ないんですか？」
「私と幽香は用事で忙しいからパス」
「私もお嬢様達がいらっしゃるので」

（え・・・大丈夫なの？）
（はい、永琳さんが日光に関しては抑える薬が完成したそうなので）

永琳、やっぱすごいね・・・

「吉井君は出るのかしら？」
「え、うん。雄二と出る予定だよ」
「分かってるところ最大の壁ね」
「あれ？アキ達も出るんだ」
「うん。色々あってね」

台とかの条件だし

「もしかして、賞品が目的とか・・・・・・？」
「うーん。一応そういう事になるのかな」
「・・・・・誰と行くつもり？」
「え？」
「吉井君。私も知りたいです。誰と行くつもりなんですか？」

二人が怖い・・・てか戦闘態勢入ってるし、姫路さん悪いほうでＦ

クラスに染まってるな～

「（誰と行くんだろう・・・）」

「（確かに気になるわね）」

「（でも、明久だし固定の人とはいかないでしょうね・・・）」

妹紅達からも聞きたそうな雰囲気はするけど、こっちは純粋に興味みたいだ

「う～ん、誰かってのは決めてないけど、行くとしたら多分上白沢先生かな？」

「「「「え？」」」」

「明久、なんで慧音なの？」

「いや・・・この頃迷惑掛けまくったからね・・・・」

何回か泣かせちゃったし・・・

「まぁ、行く時は妹紅達の分のチケットも買うよ」

「「「（やっぱり明久ね、でもまあいいか）」」」

呆れながらも喜んでるけど？

「アキ～、どういうことかしら？」

どういうことってさっき言ったじゃん

「明久君、お話したいんですけど」

お話するなら戦闘態勢といてください

「お二人方明久に手を出すというのでしたら、私が相手になりますよ？」

咲夜はナイフ（刃抜き状態）を取りだし僕の前に立つ

「「うっ・・・」」

「てか十六夜さん、いつの間に移動したの？」

「メイドのたしなみでございます」

能力に制限がかかってもある程度は使えるみたいだしね

咲夜たちはＡクラスへ帰っていき、僕らは作業に戻った

清涼祭当日・・・・・・

「お前らー、準備はできてるかー？」

「「「「おう、大丈夫だぜもこたん！！」」」」

「もこたん言うなあああ！！」

「お、落ち着いて。もこた・・・妹紅」

「明久、今もこたんて言おうとしただろ！？」

そんなこんなで清涼祭が開始した

ｓｉｄｅ幽香

「すいませーん、注文いいですか？」
「少々お待ちください」

結構大繁盛ね

「あの子美人だな」
「てか・・・むねデカ・・・」
「あの赤い服の子も・・・」
「てかあのこ誰だろうめっちゃかわいいけど」
「ご注文はこれでよろしいかのぅ？」

秀吉君？男の子って見られたいなら、少しは女装に抵抗を持ちなさい・・・

まぁ、大半女子目当てかと思うだろうけど意外と一番人気なのは・・・

「すいません」
「はい、なんでございましょうか？お嬢様」
「お、お譲／／／／え、えっとゴマ団子とウーロン茶を／／／／」
「はい、かしこまりました。少々お待ちください」
「は、はい／／／／」

明久なのよね。女子の大半が明久目当てで何回か入ってきてるし

「なあ、風見。あれなんだ？」

「明久よ」
「いやそうじゃなくて・・・」
「明久は一時執事の仕事をしていたんだもの。あの程度そんなに苦労なんてしないわ」
「そ、そうなのか・・・」
「「「「「（執事って・・・何やってたんだ?あいつ）」」」」」

Fクラスの心は（幽香、妹紅、明久を除く）一つになった

「フフフ、ここが現代ですか」
「あきひさって、此処の学校ってとこに通ってるんだよね?」
「えぇ、会うのが楽しみね」
「む、むきゅう・・・」
「もう死にかけてるけど大丈夫かしら・・・」

そこには紫を合わせて5人が立っていた

第３８話　清涼祭４　いらっしゃいませ、お嬢様（後書き）

まさかの明久の選択、これにより私は自分の首を絞めるのだった！！
明「いや、ダメでしょ」
しかし最後の４人分かる人にはもう分かるでしょう
明「次回に出るの？」
一応その予定遅くてもその次には出すようにする
では次回に

第３９話　清涼祭５　１試合目と営業妨害（前書き）

一試合目です。そして妨害・・・明久執事モードでお送りします

第３９話　清涼祭５　１試合目と営業妨害

「明久、そろそろ試合開始時間だぞ」

うん？もうそんな時間か

「分かった、じゃあ着替え・・・」

「いや着替えなくていい。ちょうどいいし、宣伝するぞ」

「ＯＫ」

「えー。それでは、召喚大会一回戦を始めます」

「律子頑張ろうね」

「うん」

仲いいなあの二人

「さて僕達も行こうか」

「だな、負けるわけにはいかないんだ・・・」

「雄二・・・（苦笑）」

「では召喚してください」

「「「「サモン！！」」」」

僕達はサモンし構える

数学
Ｂクラス　岩下律子　１７９点
Ｂクラス　菊入真由美　１６３点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　１９２点
Ｆクラス　吉井明久　４７９点

「「「え？」」」

何驚いて・・・あ、そうかＡクラス戦見てる人しか僕の点数知らないんだっけ。

それより・・・

「……素手？」

武器を何も持っていないように見える。

「明久。よく見ろ」

雄二が召喚獣を動かし、拳を掲げる。

「メリケンサックを装備しているだろう？」

「なンでだ！？」

他にそんな装備の奴なんかいなかったぞ。武器がメリケンサックだなんて……あ、普通か

「それより、お前は下がってんじゃねぇか……」

「ごめん、服作るので勉強してなかった」

「おい！」

実は今日、午前3時ぐらいまで幽香と妹紅のチャイナドレスを調整していた。

「ちょっと!?勉強してなくてあれ!?」

「どうしよう律子・・・」

「や、やるしかないわ」

「よし、明久。例の作戦で行くぞ」

「了解」

作戦開始の合図をする雄二。そう、俺達の作戦は一人一殺。

雄二を操作にならすためだ

「えっと、岩下さんだっけ・・・ごめんね?」

「え?」

僕はスタイルチェンジを行い、外見はＤＭＣ４のネロで大剣を持った。

お、いい組み合わせだ

「イクシード」

召喚獣は剣のグリップを捻り、魔力（この場合点数）を溜め、刀身が深紅に染まる

「エクスプロージョン・ブレイク！！」

『ドガンッ！！』

トリガーを引きながら振り下ろすと大爆発が起こった

岩下律子　０点

「え・・・何も出来なかった・・・」

よし、雄二の方は・・・

「ふはははは！　無駄無駄無駄ぁっ！」

うわっ・・・

「きゃぁぁぁあ！」

「とどめっ！」

菊入真由美　０点

雄二の召喚獣の拳が相手の腹にヒットし勝利した

でもなんだか弱いものいじめみたいだったな・・・

「……勝者、坂本・吉井ペア」

先生もちょっと引いてるし

「えっと・・・岩下さん、菊入さんごめんね？」
「いや・・・気にしなくていいよ」
「うん」

いい子たちだな～

「明久～戻るぞ」
「分かったよ」
「ところでさ、律子」
「なに？」
「なんで吉井君執事服だったんだろう・・・」
「さぁ？でもにあってたね／／／／／」
「うん／／／／／」

Fクラス

「ただいま、ってあれ？」
「あ、ちょうど良いところに来たのじゃ」
「なんかお客さんすくないけど・・・」

店はさっきよりガラリとしていた

「ちょっと迷惑な客がおってな」
「・・・・・営業妨害か」

考えるに・・・

「ちょうど藤原も風見も材料調達で席をはずしててな、手に余って

たのじゃ」
「いったい誰だ?」
「うちの学校の三年じゃよ」

すると・・・

「こんな食べ物食えるわけないだろ!」
「まずいしな!」

ふむ、あいつらか

「まったく、責任者はいないのか!」
「全く・・・」
「雄二待って、僕が行く」
「・・・わかった」

さてと・・・

「すいません、お失礼ながらお話はお聞きしますのでお静かにしていただけませんでしょうか」
「なに~お客様に対して静かにしろだって?」
「周りのお客様の御迷惑になりますので」
「おいお前ふざけてんのか?」
「御騒ぎになるのはおやめください。でないと強制で外にお出ししますよ?」
「てっめ!!」

坊主頭のほうが殴りかかってくるも

『パシッ、ぐい』

腕をきめる

「いでで!!??」

「な、てめえ!!」

「はあ・・・私は忠告しましたから。失礼します」

僕は二人の胸元に手を添え

『ドンッ!!』

「「!?」」

吹き飛ばし教室から出した

そして

「皆様、お騒がせしてすみませんでした」

まだいるお客様の謝罪のお辞儀をすると

「これが不味いって・・・・・あいつら舌がおかしいんじゃないのか?」

「てかあの執事すごいよな」

「うん、動かないで相手吹き飛ばしたぜ」

「あ、ゴマ団子追加お願い」

「分かりました。しかし謝罪の意味を込めて今いらっしゃるお客様は2割引きさせていただきます。」

「いいのか、雄二よ？」
「ま、この人数なら大丈夫だろ。逆にこういう行為で客が戻ってくるかもしれないしな」

ふう、なんとか治まったね・・・

「ただいま～」
「戻ったわ」
「あ、幽香、妹紅、お帰り」
「さっき人が飛んでたけど・・・」
「ちょっとね」
「あやや、明久君すごいですね～」

あれ？この声は

「あれ？文？」

そこにいたのは射命丸　文だった

第３９話　清涼祭５　１試合目と営業妨害（後書き）

謝罪は大切です

第４０話　清涼祭６　東方勢（前書き）

おぜう様達登場

第４０話　清涼祭６　東方勢

「文来てたんだね」
「はい、でも私だけじゃありませんよ？」
「私もいるわよ」
「・・・」
「あ、レミリア達も来てたんだね」
「あやや？フランさんは・・・」

え、フランも来てるのか。何処にも見え・・・

「あ～き～ひ～さ～～～～！！！」

向こうからものすごい速さで突っ込んでくるフラン・・・
僕はそれを脇に手を入れるようにして持ち上げ止めた

「フラン、走っちゃだめだよ」
「えへへ、いろんなものがあってちょっとはしゃいじゃった」

フランにとってまだまだいろんなものが新鮮みたいだ

「明久、そいつら誰だ？」
「ん？あ、そういえば知らなかったね」
「この二人が咲夜の働くとこのお嬢様の」
「レミリア・スカーレットよ」
「フランドールだよ」
「「「「「幼女萌えええええええええ！！！」」」」」
「え、えっ？」
「・・・（チャキッ」

「「「「「す、すいませんでした・・・」」」」」

もしも何なしたら・・・

「でこの子が」

「射命丸文です」

「あぁ、俺は坂本雄二だ」

「でこっちが・・・」

あれ？様子が・・・

「・・・グハッ」

「な、血吐いたぞ！？」

「アハハハ…」

僕は執事服から出すようにしながら、隙間から医療セットを取りだし

「ほら、パチュリーこれを飲んで」

薬を飲ませながら力を共有した

「「「「「あの執事さん何処からあんなものを？」」」」」

「ホントに明久は謎だらけじゃのぅ」

「明久、空いてる席あるわよ」

「あ、ありがとう幽香。妹紅、お茶ついで来てくれないかな？」

「わかった」

僕はパチュリーを抱きかかえ、席へと連れて行った

「「「「「執事のお姫様だっこ／／／／／」」」」」

何みんな顔を赤く?

「ご、ごめんなさいね・・・」
「気にしないで、安静にしてなよ?」
「わかったわ」
「さて、何かご注文なさいますか?お嬢様」
「「「じゃあ、明久　（あきひさ）（明久君）を」」」
「僕は商品じゃないからね・・・」
「冗談ですよ」

「明久、そろそろ休憩入ったらどうだ?」

もうそんな時間か・・・

「じゃあ、そうするよ」
「あ、あの吉井く・・・」
「あきひさ～一緒にまわろ～?」
「私も一緒に行くわ」
「ん?いいよ、フラン」

はて?なんか一瞬姫路さんの声が・・・まあいいか

「着替えてくるから待っててね」
「うん!!」

少年着替え中

「じゃあ行こうか」
「ゴーゴー！！」
「待ちなさいフラン！！」
僕はフランに右手を引っ張られ、仕方ないのではぐれないように左手をレミリアとつなぐのだった

ｓｉｄｅ妹紅

明久行ったな～
「アキ・・・」
「吉井君・・・」

なんか殺気立ちながら更衣室に行こうとするバカが・・・

「お～い、二人とも。あんたらの休憩はまだだよ」
「でもアキが！！」
「吉井君が変なことするかも・・・」
「そんなことするわけないでしょ。いいから作業に戻りなさい」

はぁ、ホントこいつら明久をどんな目で見てるんだろうな・・・

「ところで気になったのですか、幽香さん達の服だけ他の人と作りが違いますね」
「あ～、明久が作ったからな」
「あ～なるほど。たしかに明久君裁縫とかも上手ですからね～私も服とか縫ってもらいましたし」
「私もあるわね」

パチュリーやっと治ったみたいだな

「えっと、どういうことですか？」
「なんていうかですね、私達服とか結構破きやすくて・・・」
「そのたびに明久が縫ってくれてたのよ」

まぁ、原因は大抵弾幕勝負だけどな

「ところでさっきから気になってのですが・・・」
「うん？なんだ？」
「いえ、さっきからお二人さん明久君に殺気飛ばしたりと、どういうつもりなのかが気になりましてね」
「べつにあれはアキが・・・」
「見てる限り貴方達の独りよがりですよね？」
「ち、ちがいます！！」
「まぁ、明久君が何も言ってないので私も何もしませんが・・・もし・・・」
「「「「！？」」」」

その瞬間殺気が文からあふれた・・・よかった客いなくて・・・

「もし明久に何かあった場合は容赦しないんであしからず・・・」
「私からも明久にもしものことがあった場合、私達は容赦しないわ・・・」
「おい、二人とも。殺気を抑えろ」

まぁ、天狗は身内に対して甘いのはわかるけど
お前ら二人が暴れると制限があるとはいえ危険なんだよ・・・

「妹紅の言うとおり殺気を抑えなさい。明久が心配するわよ」

「あやや、そうでした。すみません・・・」
「いいわよ。でもあの文が感情的になるなんて久しぶりに見たわね（ニヤニヤ」
「な／／／からかわないでくださいよ幽香さん／／／／」
「なんでお前達、そこまで明久のために動けるんだ？」

なんでって不思議なこと聞くな

「そりゃ、昔からの付き合いで」
「それこそいろんなことで助けられたし」
「家族みたいに私は思ってますし」
「そして最後にみんな明久が好きだからよ」
「「「幽香　（さん）！？」」」
「嘘は言ってないわよ？」

絶対幽香の奴楽しんでるな・・・

「早い話私達は明久に昔のように傷ついてほしくないのよ」
「あ、アリスさん」
「来てたのね、文にパチュリー」
「「「「・・・・・」」」」

みんなは黙っていた・・・
いつもならネタ等に走るが（彼らは本気である）、アリスの一言を聞いた時の反応を見て何も言えなくなったのであった

第４０話　清涼祭６　東方勢（後書き）

おまけ

「・・・・」
「あきひさ？」
「明久、気にしたらだめよ」
「・・・でも・・・」
「文達が信じれないの？」
「・・・そうだね・・・」
「ってことで明久、あれを取って！！」
「はいはい」

僕達は射的をしているのであった

第４１話　清涼祭７　人形の少女（前書き）

や、やばい・・・ぎっくり腰に・・・

第４１話　清涼祭７　人形の少女

ｓｉｄｅ幽香

明久も休憩から戻り、文達は一応条件らしく帰っていったで、そろそろ坂本が休憩が終わるころなんだけど・・・

「遅いわね・・・何処で道草食ってるのかしら」
「だね～、でも客の入りが少ないね」

そう、おかしいまでに少ない客の入り・・・

ん？

「お兄さん、すみませんです」
「いや。気にするな、チビッ子」
「チビッ子じゃなくて葉月ですっ」

坂本と小さな女の子の声が聞こえてきた・・・彼ってロリコンなのかしら

「戻ったぞ」
「あ、お姉ちゃん」
「あれ？葉月じゃないの？こんなところにどうしたの？」
「美波ちゃんその子と知り合いなんですか？」
「知り合いも何もウチの妹よ」

ふ～んまぁ見た感じは似てるけど・・・雰囲気がね・・・

「ここにもいないですぅ・・・」
「誰を探してるのかしら？」
「えっと、優しいお兄ちゃんです」
「う～ん」

この子ってどういう人かって伝える気ないのかしら・・・

「分からないわね・・・」
「どんな人だったんだ？」
「えっと・・・あ、お姉ちゃんの人形を買う時にお金を出してくれました！」
「「明久だな（ね）」」
「ん？呼んだ？幽香、妹紅」
「あ、あの時の優しいお兄ちゃん」
「うん？あ、人形をほしがってた子だね」
「葉月ですぅ」
「葉月ちゃんね」

当たりだったみたいね

「アキ、葉月と知り合いなの？」
「まぁ、そうかな？」
「ふ～ん」

妹に嫉妬するって・・・

ｓｉｄｅ明久

葉月ちゃんは美波の妹らしく人形のお金について謝られた時

「・・・戻った」
「ムッツリーニか。どうだった？」
「・・・・ここの料理がまずいって噂が新校舎の何処かから流れている」
「何処からかはわかる？」
「・・・・（フルフル」

う～ん、そういや咲夜からさっきメールが来てた気が・・・

「お兄ちゃん。葉月ここに来る途中で色々な話を聞いたよ」
「葉月ちゃん。それを何処で聞いたかわかる？」
「えっと確か色んな服を来ていて綺麗なお姉さんがいるお店」

・・・・・え？

「・・・・・・急いで行くべき」
「そうだな。それはすぐに行くべきだな」

Fクラスの男子はみんなして走っていった

「・・・・」
「バカしかいないのかしらね・・・」
「だな・・・」
「アキは行かなかったのね」
「だって結果見えてるし」
「「え？」」
「これ・・・」

僕は携帯を見せる

ｆｒｏｍ十六夜　咲夜

Ａクラスで貴方のところを悪口言ってるバカがいるんだけどヤッテいいかしら？

「・・・いくか」

「行きましょうか・・・懲りてない人にはちゃんと罰をあたえないとね・・・」

「・・・・ハァ」

なんというか子供だよね、あの常夏コンビ（雄二がつけた）だっけ？

少年少女移動中

Ａクラスに着くと雄二が立ち往生していた

「なにしてるの？雄二」

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何言ってるのさ！　早く中に入るよ！」

「頼む！　ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」

「・・・シッ！！」

「ごふぅあ！？」

「入るよ？」

「は、はい」

はぁ、そんなに霧島さんと会うのがいやなのかな・・・

「そうね。それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手でドアをくぐる

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

「わぁ、綺麗……」

出迎えたのは霧島さんだった

「それじゃ、僕等も」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ～！」

「おかえりなさいませ、お嬢様。そして旦那様」

「咲夜、僕誰とも結婚してないんだけど・・・」

案外とこの子乗りがいいからな・・・

「ほら雄二入りなよ」

「分かった・・・」

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。」

なるほど・・・

「霧島さん大胆です・・・」

「ウチも見習わないとね……」

「「いや、見習わなくていいから（わよ）」」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

「お席にご案内いたします」

ふう、常夏コンビは・・・いないみたいだね

「……ではメニューをどうぞ」
「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれがいいです」
「葉月もー！」
僕は・・・

「僕はメロンソーダとパンケーキで」
「私もそれで」
「私もそれにするわ」
「んじゃ、俺は……」
「……ご注文を繰り返します」

あれ？雄二の聞いてないんじゃ…
「……『ふわふわシフォンケーキ』を３つ、『メロンソーダとパンケーキ』と３つ、
『メイドとの婚姻届』が１つ」
「あと『幻想郷専用』重婚用婚姻届が一つ、以上でよろしいでしょうか？」
「「ちょっと、まてー！！」」

『幻想郷専用』重婚用婚姻届ってなにさ！？

「全然よろしくねぇぞっ！？」
「「それでいいわ」」
「ちょっと幽香、妹紅！？」」
「……では食器をご用意致します」

女子三人の前にはフォークが、僕、幽香、妹紅の前にはフォークと

ストローとナイフと婚姻届が、雄二の前には実印と朱肉が用意された

「しょ、翔子！　これ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

「これ、どうしろってのさ・・・」

「とりあえず持っとけば？」

「そうね」

しかも現時点で数人名前が・・・彼女達は誰と結婚する気なんだろう・・・？

「……明久、俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「んで、葉月ちゃん。キミの言っていた場所はここで良かったかな？」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん2人がおっきな声でお話してたの！」

そう話していると・・・

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。2人だ。中央付近の席は空いてるか？』

ちょうどいいタイミングできたみたいだね

『まったく、この和風喫茶は美味くて良いな！』

『全くだ。中華料理屋は不味くてしょうがねえ！』

わざと聞こえるように大声でそんなことを言い始める2人
悪評を広めたいからといってここでする必要などあるのだろうか？
これではこちらのクラスにも営業妨害となりそうだ

「……おーい、翔子ぉ！！」
「……何？」
「あの連中がここに来たのは初めてか？」

何か二人が話しているとき、ふと後ろから肩をたたかれた

「どうしたの咲夜」
「明久、あいつ等のせいでうちの店も迷惑になってるのよ・・・カタヅケチャだめ？」
「だめだからね？」

さすがにそれは許可できないよ・・

「ってことで明久、これを着てくれ」
「・・・・は？」

雄二の手にあったのは・・・・・・・メイド服だった。

第４１話　清涼祭７　人形の少女（後書き）

ただ今の悩みは原作キャラの誰を幻想入りみたいな感じにさせるかです・・・

第４２話　清涼祭８　なんか戦ってないな（前書き）

明久の女装！！

第４２話　清涼祭８　なんか戦ってないな

「・・・どういうことかな？雄二」

さすがにいきなりメイド服をだされて、これを着れって言われたら引くよ

「お前が女装してあいつらに近づくんだよ」

「・・・貸し１だよ・・・咲夜、ちょっと手伝って」

「いいわよ。更衣室はこっちよ」

僕は咲夜について行った

ｓｉｄｅ雄二

「結構あっけなく聞きいれたなあいつ」

「明久自身も思うところがあったんでしょ？」

まぁ、拒否しても藤原辺りを出すつもりだったがな

「しかし、明久の女装って久しぶりかもな」

「ん？前にもあったのか？」

「ちょっとした依頼でね。あの時はきれいだったわね」

「うん。確か踊り子だったっけ？剣舞の」

明久が剣舞・・・まぁＡクラスのあれを見た限り有り得ない事も無いかもな

「戻ったよ」
「おう、もど・・・誰だお前？」
そこには金髪蒼眼のメイドがいた

ｓｉｄｅ明久

「鬱だ・・・」
「ははは、悪い悪い。一瞬誰かわからなくてな」
「あん時も思ったけど・・・」
「えぇ、なんか女として負けた気がするわね」

言わないで幽香・・・

「大丈夫じゃ、似合っておるぞ」

秀吉・・・居たんだね

「じゃあわしは戻っておくから、後は任せたぞ」

仕方ない。やるか

「とにかく汚い部屋だったよな」
「まあ、旧校舎自体汚いしな」

まだ続けてる。ある意味すごいな・・・さてあー、あーこのくらいでいいか

「お客様」
「何だ？って、こんな子もいたんだな」
「結構可愛いな」

何だろう・・・気持ち悪いぞこいつら

「お客様、足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？」
「掃除？さっさと済ませてくれよ？」

僕は雄二に合図を送り・・・

「こ、この人！今私の胸を触りました！」
「は？何言っｔぐぶぁ！？」
「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、成敗するぜ」

雄二、ナイスドロップキック

「何言ってんだ！！俺らは何も」
「黙れ！たった今、こいつはこのウェイトレスの胸触っただろうが！俺の目は節穴ではないぞ！」

あえて言おう、節穴だ

「そうね、人のところの従業員に手を出したのだから、覚悟はできてるわよね？」

咲夜もたまったうっぷんを晴らすためか登場
さて、このたおれている坊主には・・・あ、そうだ。

僕は隙間から瞬間接着剤を取り出し、咲夜に渡された使い捨て用ブ

ラを坊主にくっつけた

「さて。痴漢行為の取り調べのために来てもらおうかしら？」
「ちっ！行くぞ夏川！！」
「こ、これ、外れねぇじゃねぇか！！畜生！！」

うわ・・・変態だ
二人は逃走した・・・とりあえず、着替えるかな・・・

僕達はＡクラスで食事をした後、２回戦に行ったんだけど・・・

「不戦勝じゃと？」
「あぁ、なんでも、食中毒らしい」

まさか・・・いやないな。ないはずだ！！

「お兄ちゃん、葉月もあの服着たいです！」

葉月ちゃんはチャイナ服を指差す

「ごめんね、予備っていうか、服なくて・・・」
「・・・・・・！！（チクチクチクチク）」
「ムッツリー二！？どうしてそんなすごい勢いで裁縫を！？てか、いつ戻ったの！？」
「・・・・・俺の嗅覚を舐めるな」

いやその場合嗅覚じゃなくて聴覚・・・

「・・・できた」
「わ、このお兄さんすごいです！！」

うわ・・・才能の無駄遣いってこういうことを言うのかな・・・

「明久・・・」
「ん？どうしたの幽香」

幽香が胸もとを手で覆いながら近づいてきた

「御免なさい、ちょっと服が破けちゃって・・・」
「「「「「な、なんだと！？」」」」」
「・・・・・（スッ）」

はぁ、

『シュカカカカッ』

僕は投げナイフを取り出し、Ｆクラスの面々の足元とムッツリーニのカメラに投げた

「治すから幽香こっち来て。妹紅、見張りお願い」
「わかった」

その後、第三回戦なのだが・・・
根本君と小山さんのチームだったのだが、雄二が取りだした『新しい私を見て』を見た根本君が辞退。

不戦勝となった

なんか、2、3試合で戦ってないな・・・

第４３話　清涼祭９　準決勝、そして誘拐

「明久、そろそろ４回戦だ」
「もうそんな時間？」
時計を見ると午後２時過ぎ。結構時間たったみたいだね
「あれ？アキ達もそろそろなの？」
「そうなんですか？実は私達もそろそろ出番なんですよ」
「そういえば相手はお前らだったな」
「恨みっこなしで行こうね」

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者前にどうぞ』
観客席ほぼ満席だな・・・
『では準備はよろしいですか？』
「はい・・・」
「「「「サモン！！」」」」
『では開始してください』

古典
Ｆクラス　姫路瑞希　３９９点
Ｆクラス　島田美波　６点
ＶＳ

Fクラス　坂本雄二　２２６点
Fクラス　吉井明久　５９７点

「な、４回戦は数学じゃ・・・」
「実はなお前らに渡した対戦表だが・・・・・・あれは俺の手作りだ」

いや、何してるのさ雄二

「騙したわね！！」
「勝てばいいんだ勝てば！！俺には後がないんだよ！！」

・・・雄二ドンマイ

「まぁ、始めようか姫路さん」
「はい」

召喚獣は腕輪の能力を発動しており、黒いロングコートに籠手と脚甲を着けていた

「いくよ！！」
「負けません！！」

僕の召喚獣は姫路さんの召喚獣に蹴りかかる

それを姫路さんは大剣で防御し、僕の脚甲の踵についているブレードと鍔ずり合いになった

「くっ！！」

姫路さんが距離を取り大剣をふるってきたが僕はそれをそらし・・・

「甘い！！」

ー閃走・六魚ー

蹴りあげて踵落としをした。

「しとめる！！」

ぼくが追撃で殴りかかろうとするも

「させません！！」

大剣で防いだ・・・けど甘いよ・・・

「・・・貫け」

ー檄・雷震衝ー

「え？きゃっ！？」

籠手が光、脈打ったかと思うと、掌底は大剣を砕き姫路さんに点（威力）の籠った一撃を与えた

姫路瑞希　０点

ふう、雄二は・・・普通に勝ってるね・・・

『えっと、坂本君と吉井君のペアの勝利です！』

「ひきょうもの」
「二人ともひどいです」
「これも勝負だ」
「僕はその作戦すら聞いてないけどね・・・」

僕たちは教室に戻ると

「あ、お邪魔しているわ」
「アリス、お疲れ様」

いろいろと用意で忙しかったみたいだしね

「私は終わったけど、永琳達はまだみたいよ」
「そうか・・・忙しそうだね」
「だから代わりに監督で来たから頑張ってね」
「はは、かしこまりました」

さて、頑張るかな・・・・

キングクリムゾン!!（久々の登場だ!!ｂｙ作者）

「さて準決勝だね」
「行ってらっしゃい」
「がんばってね～」
「けがしないようにね？」
「うん。じゃあ行ってくるよ」

僕はのちに思う。この時、妹紅と幽香に注意するよう言っとけばと・・・

「明久、この試合はとくに負けられない！！お前も気を引き締めろよ」

相手は・・・

「・・・雄二、吉井。邪魔しないで」
「当たっちゃったか…」

霧島さんと優子さんだ。しかし・・・

「そうはいくか。俺はまだやりたいことがあるんだ！！」
「・・・雄二そんなに私と行くのがいやなの？」
「あぁ、いｙ「ちょっと黙って」ぐふ・・・」

あ、強く殴りすぎた・・・

「まぁ、いいか。秀吉？」
「なんじゃ？」

近くにいたみたいだね、雄二が何か作戦のために呼んだのかな？

「御免雄二の代わりにしゃべって」
「構わんが・・・コホン」
秀吉は咳払いをすると・・・
「翔子、俺の話を聞いてくれ」
僕は雄二を立たせる
「お前の気持ちは嬉しいが俺にはちゃんと考えがあって行動しているんだ!!」
「・・・雄二の考え?」
お、気づいてない・・・てか秀吉アドリブだけどなんて言うんだろう
「俺は自分の力でチケットを取ってお前を誘いたいんだ!!」
「・・・・・・・雄二」
「だからここは引いてくれ」
「・・・わかった」
「だ、代表!?ひ、卑怯よ」
「ごめん、さすがに2対1はきついんだ」
てか僕は今とても吹き出しそうなんだ・・・
「まぁ、僕はちゃんと戦うからそれで許して?」
「・・・わかったわ・・・じゃあ」
「「サモン!!」」
保健体育

Aクラス　木下優子　３２１点
ＶＳ
Fクラス　吉井明久　４２１点

「まぁ、勉強してないしこんなもんか」
「勉強してなくてそれっておかしいでしょ・・・」
「ごめん、悪いけどお店が気になるからすぐ終わらすね？」
「え？」

僕は双剣と学ランの姿になり

「凍てつけ」

ー雹剣・蒼翠斬ー

点数を剣に籠め振りおろすと優子さんの回りが凍りつき・・・

「斬！！」

剣を切り上げると、氷でできた剣が地面から突き上げ召喚獣を貫いた

Aクラス　木下優子　０点

「「「「え？」」」」

会場が唖然とする。まぁAクラスの生徒がFクラスの生徒に瞬殺されたらそうなるか

「ほんとに何もできなかったわね・・・」

「ごめんね？」
「いいわ、これも勝負だし。負けよ」

『し、勝者、坂本君と吉井君のＦクラスペアです』

僕は雄二をたたき起し、Ｆクラスへと戻った

「あ、明久」
「あれ、妹紅。みんなは？」
「・・・・・雄二」
「これはどういうことだ？」
「・・・ウェイトレスとアリス先生が連れてかれた」
「なっ！？」
「やはりか・・・」

くそ！！なんとなく予想はできていたのに！！止めれなかったなんて・・・・

「ごめん、明久・・・守れなかった・・・」
「席を離れているうちにやられたわ…」
「気にしないで、妹紅、幽香。で、行き先はわかる？」
「・・・近くのカラオケ店だ」
「・・・そうか・・・」

フフフ、僕の友人に手を出すとはフザケタコトヲシテクレルジャナイカ・・・

「なんだろうか・・・さらったやつに同情するぞ」

「・・・・・・（コクコク）」
「じゃあいこうか」
「そうだな」
「・・・・（コク）」
「幽香たちは待っててね」
「気をつけてな・・・」
「怪我しないようにね」

さて、お願いだアリス！無事でいてよ。そして誘拐したやつら！！
カクゴシテイロヨ？

第４３話　清涼祭９　準決勝、そして誘拐（後書き）

授業中ノートに書いてたぜｂ

第４４話　清涼祭１０　あほらしい

僕達はあるカラオケ店の前にいる・・・

「明久、様子を見てから突っ込むぞ」

「・・・わかった」

「じゃあムッツリーニ」

「・・・・（コク）」

少年移動中

『さて、どうする？　坂本と・・・・・吉井だったか？
そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？」

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。
坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいしな』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……』

『気持ちは分かるがそうもいかないだろ？　依頼はその２人を動け
なくする事なんだから』

ムッツリーニのとうｔｙ・・・ラジオからそんな会話が聞こえてくる

『お、お姉ちゃん・・・・・・』

『アンタ達！　いい加減葉月を離しなさいよ！！』

『そんな小さな子を人質にするなんて、恥ずかしいと思わないのか
しら』

いくら制限があるとはいえアリスが簡単にさらわれた理由、それは
葉月ちゃんを人質にされているからか・・・どうする・・・

『お姉ちゃん、だってさ！　かっわいぃー！』

・・・・

「明久我慢しろ。今突っ込んだらやばい」

「・・・分かってる・・・」

『このオネーチャンたちどうする？　ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺は、コッチの巨乳チャンがいいなー！』

『あっ、ズリー！　それなら俺、２番目ね！』

『じゃあ俺こっち！』

『くっ！？はなしなさい』

『ちっ！だまれっての』

『きゃっ！！』

何か倒れる音とともにアリスの声が聞こえた・・・

『ドカッ』

「失礼するよ～」

「あ、明久？」

そこには頬を抑えたアリスがいて・・・

「な、てめえ誰『ガスっ』あが・・・」

僕は突っかかってきた一人の鳩尾に一撃を入れ、

「大丈夫？アリス」

「「「「・・・え？」」」」

水月でアリスのそばに近くにしゃがみこんだ

「えぇ、ちょっと叩かれただけよ」
「そうか、まあよかったよ」
「コイツ吉井ってやつじゃ・・・」
「くそ!!てめぇ!!」
「アキ!後ろ!!」
「吉井君!!」

後ろから一人が金属バットを振り下ろし、それに美波達が叫ぶが

『パシッ』

「な・・・」
「な、こいつ見てねえのに素手でバットを・・・」

僕は素手でバットを止め

『グシャッ』

「「「「「「!?」」」」」」

握りつぶした

「お前ら・・・・」
「な、なんだよこいt」
「喋るな・・・」
「「「「「「!?ひっ!!」」」」」」

僕は殺気を放ちながら（犯人のみに向けて）

「今すぐに消えろ、もし報復とかでも考えようなら・・・」

「腕一本は覚悟しろよ」

「「「「「・・・・・」」」」」

「明久押さえて。気絶してる」

はぁ・・・

「もう終わったのか？」

「うん、ごめん雄二耐えれなかったや」

「いや、誰も怪我してねえからいい」

気絶していた秀吉を起こし、後処理（警察に通報）は済ませ
美波と姫路さんと葉月ちゃんは咲夜に任せて帰らせた後、僕と幽香、
妹紅、ムッツリーニ、秀吉、雄二
そしてアリスは教室で待機していた

「・・・まだなの？」

「まあ待て。もうそろそろ来る頃だ」

「？　来るって、誰がじゃ？」

「ババァだ」

普通に考えてその場にいないとは言え学園長をババア呼ばわりなど
褒められた事ではない。
だが今回のことは、あの人が隠し事をしていたのが原因だ
さすがに我慢がならない。吐かせる、隠し事を

「・・・・やれやれ、態々来てやったのに、随分と御挨拶だねぇ、

ガキ共が」
「来たかババァ」
「来たのね学園長」
「さて、どういう事か説明して貰うぞ?学園長」
「確かにそうですね」

それ相応の理由があるんだろうね・・・

「俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思うが?」
「ふむ・・・・・やれやれ、賢しい奴だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」
「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を例えばそこにいる翔子や木下優子の様な高得点をたたき出せる優勝候補を使えば良いからな」

すると学園長はアリスと秀吉に気づき

「何でアリス先生がここにいるさね?」
「今回のでの被害者の一人ですよ」
「話に戻るが、あの時俺がババァに1つの提案をしたのを、覚えているか?」
「科目を決めさせろってヤツかい? 成程ね、あれでアタシを試したってわけかい?」
「ああ。めぼしい参加者全員に、同じような提案をしている可能性を考えてな。
もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗ってこない」

僕たちにとっては破格過ぎる条件だ。なのに、学園長は提案を呑んだ

つまり、この2人が決勝に出なければ学園長が困ると言う事。
そして、学園長が困らなければならない連中が居る事につながる事も、その2人の周りに起きている。

「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たりしてたのは、明久達がが勝ち上がっては困る奴がいるってことか？」
「そういうことだよ、妹紅」
「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が、姫路たちを連れだしたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまではしない」

事実警察沙汰になったのだ

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか・・・・・・すまなかったね」
「な、ババァが謝っただと？」
「雄二、話を折らない」
「アンタ達だったら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど目論見が完全に潰されて、焦ったんだろうね」
「さて、ここまであった以上話して貰うぞ？あんたが俺達を選んだ真の目的を」
「はぁ・・・アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね・・・・・・」

学園長の話いわく、白金の腕輪は欠陥品で出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすらしく、
優勝の可能性を持つ〝低得点者〟が必要だったらしい

「とりあえず、召喚フィールド作成用の方はある程度まで耐えられるんだけどねぇ。もう片方の同時召喚用は、現状だとBクラス程度で暴走する可能性がある」

それを聞いて僕は

「あほらしい」

「な、明久？」

「確かにそうだな」

「何を言って・・・」

学園長が何か言おうとするが

「だって、貴女の身勝手なプライドで、生徒と先生が危険な目にあったのよ？」

「その理由がこんなのなんて、あほらしいわ・・・」

被害者にまで言われたら終わりだな・・・

「まぁ、今回のことは多分教頭が関わってると思う」

「やはりそうだったかい・・・近隣の私立校に出入りしてたなんて話を聞いたが、最早間違いないさね」

そこまでつかんでて放置してたんかい…

「まぁ・・・それなりの罰は受けてもらうとして」

「「「（明久が黒い（わね））」」」

「騙していた事はすまなかったね。だが、目的は既に達成はされているんだ。このまま何もなければ、全てはまるく収まるんだよ」

また手出ししたら・・・・・

「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もう帰ろう」
「そうだな。家に帰ってやる事もあるし・・・それに明日も早いしな」
「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

「2人とも、学園長としても個人としても、礼と謝罪をさせてもらうよ」
「はい」

学園長が戻った後

「さて、俺達も帰るか」
「そうだね。アリス」
「なにかしら？」
「今日うちに泊まっていきなよ」
「「「・・・え？」」」

何驚いてるんだ？

「いや、咲夜にも言ってるけどさすがに心配だからね」
「じゃあ、私と慧音も泊る～」
「私も行こうかしら」
「うん。じゃあ今日は腕を振るわないとね」
「ふふ、じゃあ泊らせていただくわ」

この後、僕の家には幽香、妹紅、咲夜、慧音、永琳、アリスと集ま

った。
遊んだ後就寝。朝は
「・・・・・」
「「「「「「・・・・スゥ・・・・」」」」」」
・・・何も言うまい・・・

第４４話　清涼祭１０　あほらしい（後書き）

何があったかご想像に・・・

第４５話　清涼祭１１　あんたに用はない（前書き）

決勝戦でございまする

第４５話　清涼祭１１　あんたに用はない

「さぁ、今日が二日目稼ぐぞ！！」
「「「「「おぉおおおお！！」」」」」

朝、幽香たちと行くと襲われかけたが幽香たちが殲滅したＦＦ団。
復活早いね？

「ちょっと決勝始まったらおこしに来てくれないかな？」
「どうしたんだ？」
「補給テストのために朝早くから勉強しててね」
「俺もだ、じゃあ屋上で寝ているから」

雄二に関しては目にクマが・・・それに何かと言いながら朝霧島さんと来てたし、やっぱ心配だったんだね・・・
さて寝るかな・・・

ｓｉｄｅ幽香

「やっぱり、２人一緒に寝るんでしょうか？」
「間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……」
「どんな想像しているのよ」
「お前等の想像力が恐ろしい」

なんでそんなのに繋げようとするのかしら・・・

「それ以前に多分明久なら保健室だぞ」

「「え？なんで（ですか）？」」
「そうね、あそこならゆっくり休めるし永琳が・・・ってあなた達何処に行くの」
「アキのところよ！！」
「そうです！！」

はぁ、悪いけど文の言う通りね・・・

「許可はできませんよ」
「「か、上白沢先生・・・」」
「八意先生は吉井君の専属医師なんです。もしも吉井君の休憩を邪魔しにこようものなら・・・」
「切れるな」
「切れるわね」
「「う、うぅ・・・」」
「ほら、早く。お客様もいるんだから」
「「はい・・・」」

ホントに大丈夫かしら・・・

ｓｉｄｅ明久

「失礼します」
「あら明久君。どうしたの？」

名前呼びってことは誰もいないのか

「ちょっと休憩にね」

「あ、ならその前にここに座って」
「え?あ、はい」

僕は永琳の目の前の椅子に座ると

「ちょっと、眼を見せてね・・・」
「うん」
「・・・・」
「・・・・」
「うん、強化はされてるけど、問題はないわね」
「そうですか」
「じゃあ服脱いで」

・・・・・え?

「あ、上着よ?」
「ですよね」

僕は上を脱ぐと永琳は少し黙り胸元を見る

「やっぱり・・・この傷は消えないわね」
「まあ治ってはいるんですけどね」

僕の左胸付近には大きな破裂痕の様なものがある

「私でも治せないなんてね」
「気にしてませんからいいですよ?」
「そう・・・もう大丈夫よ。寝るのならそこのベットを使いなさい」
「分かったよ」
「私が寝てるベットだから」

「おねがい、からかわないで・・・」
「ふふ、じゃあおやすみなさい」
僕はベットにもぐりこみ眠りについた

キング（ｒｙ

さてよく寝たし、もうそろそろかな・・・

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！
これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』
始まったね。てか放送は先生じゃなくて放送部の人かな？

『出場選手の入場です！』

「いこうか」
「だな」

『２年Ｆクラス所属・吉井明久君と、同じくＦクラス所属・坂本雄二君です！皆様拍手でお迎えください！』

うわ、すごいお客・・・

『なんと、最高成績のＡクラスを抑えて決勝に進んだのは、
２年生の最下級であるＦクラスの生徒コンビです！　これはＦクラスが最下級であるという認識を、

改める必要があるかもしれません！』

うん、これなら姫路さんのことも大丈夫だろうね

相手は・・・

『対するは3年Aクラス所属・常村勇作君と、同じくFクラス所属・夏川俊平君です』

まがりなりにもここまで来れるということは点数はいいはずだ
あんなことしなくてもいいはずなのにね・・・まぁ、そんなことは関係ない

『では召喚してください』

「「「「サモン！！」」」」

日本史
Aクラス　常村勇作　２０９点
Aクラス　夏川俊平　１９７点

『さすがAクラスですね。やはり点数が高い』

「どうした？俺たちの点数見て腰が引けたか？」
「Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな」

誇らしげにディスプレイを示す二人。反論はしない。確かに誇っても良いくらいの点数だ
でも・・・

「ホラ、観客の皆様に見せてみろよ。お前らの貧相な点数をよ」
「夏川。あまり苛めるなよ。どうせ直ぐに晒されるんだぜ？」
「お前らあほだろ」
「なに？」
「はあそっちの点数にはあんまり興味ないんだよね」
「な、何言って・・・」
「ただ、あんた等は他人に迷惑をかけすぎた・・・」

僕達の点数が表示される

日本史
Ｆクラス　坂本雄二　２１５点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井明久

「覚悟はできてるよね？」

１１８７点

「「「「「「「「・・・・はぁ！？？」」」」」」」」

「明久その点数なんだ？」
「頑張りすぎちゃった（テヘッ）」

『な、なんということでしょう・・・１０００点オーバーって・・・
学園初じゃないですか！？』

「気にしないで始めようか」

「そうだな」
「スタイルチェンジ！！」
僕の召喚獣は姿を変え・・・おっ
「うわ・・・大当たり～・・・・」
「「え？」」」
そこに立っていたのは戦闘服（マンガ真月譚月姫６巻表紙の志貴の格好）に七ッ夜。
そして・・・虹色の眼をしていた・・・
「とりあえず雄二、下がってて」
「あ、あぁ・・・」
「な、なめてんのか！！」
えっと夏川先輩だっけ？召喚獣が突っ込んでくるも
「・・・殺す」
ー１７分割ー
「え？」
夏川俊平　０点
僕の召喚獣は一瞬にして相手を１７個に解体した
「な、夏川！？くそ！！」

さすがに相方がやられたから様子見か・・・

「・・・・・」

僕は・・・ナイフをポケットにしまい、片手で顔を隠すようにして立った

「な、てめぇ!!」

「・・・・・」

「ふざけんじゃねえぞ!!」

怒り心頭で突っ込んできたけどダメだね・・・

「・・・遅い・・・」

ー極死ー

僕は、即座にナイフを取り出しながら相手の腕を斬り飛ばし、反し手で足を斬り飛ばす

「あんたに用はない、じゃあな」

ー無空ー

そして相手に向かってナイフを振り下ろし・・・突き刺した

常村勇作　0点

「な・・・」

『え、えっと・・・ものすごい瞬殺劇により、優勝は明久君、雄二君ペアです』

「最後俺なんもしなかったな」

「まぁ、いいじゃん」

こうして僕達の優勝が決まった

第４５話　清涼祭１１　あんたに用はない（後書き）

最後の技はｍｕｇｅｎよりです

第４６話　清涼祭１２　僕はあんたを許さない（前書き）

ただ今頑張って東方プレー中
今決定してることですが
弾幕ゲームは非想天使用っていうか接近戦ありで、負けを宣告するか、戦闘不可で勝ち、てな感じです

第４６話　清涼祭１２　僕はあんたを許さない

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了します。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「「「「おわったあああああ！！」」」」
「終わったね・・・」
「さすがに疲れたわね・・・」
「そうだね・・・」
「「（姫路と島田を止めるのに・・・）」」

幽香と妹紅は思った。明久が客に対応するたびにこの二人が殺気立ち・・・特に姫路さん、あんたやめたくないんだよね？

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

僕はふと今回の問題の一つについて聞くと・・・

「後夜祭の後で話をしにいくと言っておったのう。結論はその時じゃな」
「まぁ、そうだよね」
「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」
「私も着替えよ」
「私もそうするわ」
「「「「な、なんで！？」」」」
「どうしてって言われても・・・・・恥ずかしいからに決まってるでしょう！」

うん、そうだよね

「明久、この服どうしたらいい？」
「？貰っていいよ」
「明久ってコスプレさせるのが好きなのね」
「なんでそうなるの！？」
「おい明久、遊んでないで学園長室に行くぞ」
「学園長室じゃと？　２人とも学園長に何か用でもあるのか？」
「ちょっとした取引の精算だ。ここが忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今から行こうと思う」
一応、取引だから、報告しないとね

「秀吉とムッリーニも一緒に行くか？」
「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」
「そうじゃの。では行くとするかの」

少年移動中

「失礼します」
「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねぇ」
「あ、学園長。　優勝の報告にきました」
「言われなくても分かっているよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」
「それもそうですね。そういや・・・」
「？なんだい？」
「腕輪は返却した方が良いですか？」
「いや、それは後で良いさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」
「・・・改造していいですか？」
「出来るもんならやってみな」

よし、帰ったら永琳と改造するか

「で、問題についてだが・・・」
「まって雄二!!」
「どうした?」

この気配は・・・

「ちっ!!あの教頭まだあきらめてなかったのか!!」
「やられたか!」

少しとはいえさっきの会話やばい!!

「とりあえず、まずは放送室を抑えるぞ!」

「抑えたのはいいけど教頭はどこに・・・」

その時屋上のスピーカーの配線が一つの部屋に・・・
あの部屋は!!

「やらせるか!!『刹那』!!」

僕は周りに誰もいないのを確認し、刹那を籠手に変え窓を飛び出す

「ふっ・・・」

脚甲はその特性により僕からあふれている魔力を足場にし、僕は屋上より高く飛んだ

「今回は崩しはいらない」

左手に魔力と霊力を溜めていく。すると2つの力は混じり合い、輪郭をもち、龍の腕のようになる

「突き崩せ!!」

ー魔霊・激龍爪ー

その拳撃は、スピーカーを破壊し、その下の教頭室まで貫いた

「な、なぁ・・・」

「う〜ん手加減したつもりなんだけどな・・・」

うん?あそこにいるのは・・・

「こんにちは、竹原先生」

「よ、吉井・・・な、なんだ今のは・・・」

「まぁいいじゃないですか、それより・・・」

僕は教頭に近づき

「今回のことについてもそうだが、もし僕の大切な人たちに手を出してみろ・・・」

『ドンッ!!』

僕は教頭のすぐ隣の壁を殴りつけた。壁はまるでクッキーのように砕け

「俺はあんたを許さない・・・！！」

・・・あら気絶してるや

さてレコーダー壊したし帰るかな・・・

「明久、これはどういうことかな・・・？」

「・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・」

こうして僕は慧音に頭突き＋説教を食らった

ちなみに教頭室は紫が直してくれましたとさ

どうも、吉井明久です。

ただ今慧音の説教が終わり打ち上げをしているのですが・・・

「「きゅぅ～・・・・」」

まず姫路さんと美波は誰が入れたのか解らないお酒を飲み、酔って

僕に近づこうとしたが

「あら、結構安ものでもおいしいわね」

幽香によって撃墜

ＦＦＦ団、幽香たちにより殲滅（永琳、アリス、慧音も参加）

で・・・

「この状況どうしようか・・・」

まぁ早い話で言うと、お酒を持ち込んだのは永琳で・・・

「・・・スゥ・・・」

アリスは酔って寝ており（て言うより時間的に寝ている）
慧音は・・・後ろから抱きつくようにして気絶している

「どんだけ強い酒持ってきたの・・・」
「ん？鬼の酒よ？」
「明久、ほらジュース」
「ありがとう」

僕はお酒を控えてます

「でもまさか明久教頭室を破壊するとわね」
「僕だって失敗する時は失敗するよ」
「まぁそこらへんの修正は賢者がしてくれてるんで大丈夫でしょう」
「さ・・・月見酒でもしましょうか」
「僕はジュースだけどね」
「「貴方とするから意味があるのよ」」

こうして清涼祭は終了を迎えた・・・

おまけ

「そうだ、明久チケット一枚くれない？」

「いいけどなんで？」
「霧島さんにあげるのよ」
「いいよ」
「ありがとう」

第４６話　清涼祭１２　僕はあんたを許さない（後書き）

え?雄二はどこ行った?霧島さんが連れていき、ムッツリーニは付いて行きました

幻想入り?勢ですが、雄二、ムッツリーニ、秀吉、姫路、美波の５人で決定しました

ＰＶ２０万越え短編　ハジメテノトモダチ（前書き）

まず言おう、題名じゃ誰かわかりませんね
ちょっとした設定崩壊が多々ありますがどうぞ

ＰＶ２０万越え短編　ハジメテノトモダチ

そう、すべてどうでもよかった

自我を持った時に私、博麗霊夢が最初に思ったのはその一言

妖怪とか、人間とかそこまで興味はない

努力もやるだけ無駄、報われるはずがない

ただ博麗の巫女だから此処の結界を管理し、妖怪を退治するだけ

そう・・・どんなに頑張ったってこの定めからは抜け出せない

努力したって無駄なのだ

奇跡なんてあるわけもない、そう思っていた・・・

だがしかし、それも間違いだと今ではちょっと思う

だって、その奇跡を起こし、努力でこの幻想郷のルールを変えた

頭は良いのにバカで、どうしようもない『兄』のような人がいるのだから

出会いは単純だった

いつものように修行をさぼって、お茶を飲んでいると

「やっとたどり着いた・・・てか妖怪多すぎだよ・・・」

まさかここまで来るモノ好きな人間がいるとはね・・・

見た目的に私よりちょっと上かしら…

まあ興味ないけど

「うん？あぁ人がいたんだね」

「さっきからいた」

「となり、いい？」

「好きにすれば」

「じゃあそうする」

・・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・」

静寂、そう表現すればいいだろうか・・・

静か、だがしかし意外と不快ではない雰囲気だった・・・

「そう言えば、君名前なんて言うの？」

「・・・霊夢」

「霊夢か～」

誰もつかむことができない私に、まるで普通のことのように触れてくる人

「・・・貴方は？」

「え？」
「名前」

だからなのかもしれない、『私』が初めて少しだけ興味を示したのは

「あ、名前ね。明久、吉井明久だよ」
「・・・・明久」
「うん」

これが初めての彼との会合だった

それからというもの、数日ごとだが明久はここに来るようになった
修行をさぼってるとばれると、修行してるか見に来るため、明久が来たときだけ私はしぶしぶ修行をした。
だが不快感はなく、明久もそれにつき合ってくれたりしたためなぜだか普通に修行していた
安定しなかった能力が安定したと言った時、まるで自分のことのように喜んでいた

妖怪が衰退してしまい、妖怪から決闘ルール制定の要望を受けた時は一緒に考えて
『スペルカードルール』を作った

その後、魔理沙とも出会い、3人でいることが多くなった

そして・・・赤い霧の異変・・・
明久は私達を庇い凶弾に倒れた・・・

「お願い、明久!!目を覚まして!!」

その時初めて涙を流した・・・まあその後何事もなかったようにあいつは起きてきたけど・・・

その後も一緒に行動をし、異変を解決していった

そのたび、明久はやさしすぎると実感した

そして他の子と仲良くするたびに、ちょっと、ほんとにちょっとだが不快感を覚えた

そして月に異変

私達を庇って傷ついた明久を見て怒りに飲みこまれ負けかけるも、

明久はその月人の使う神々の力に勝利した

明久は、私の否定した努力をし、奇跡を起こし、運命も変え、幻想郷すら変えてしまった。

でも・・・・

もう１５となるが・・・お茶をすすりながら現代で、学校なる物に通う明久を思い浮かべる

ちょうど文がその光景の写真を取っていたので貰ったけど・・・

「結構・・・似合ってるわね・・・」

執事服を着た明久が写っていた

彼は変わらず、明久であり

私の『初めての友達』であり

「・・・・いつ帰ってくるのかな・・・」

まだよくわからないけど、不思議な気持ちにさせる

今は『兄』のような想い人

ＰＶ２０万越え短編　ハジメテノトモダチ（後書き）

明久が霊夢にあったのは幽香の会合後の修行中の時です
そして霊夢はまだ自覚していません

如月グランドパーク編1雄二の朝と明久の誘い（前書き）

原作崩壊・・・いい時代になったものだ

如月グランドパーク編1雄二の朝と明久の誘い

ｓｉｄｅ雄二

休日の朝。俺が目を覚ますと、

「・・・・・雄二、おはよう」

目の前に翔子がいた・・・

「・・・・・今日はいい天気」
「ん？ああ、そうみたいだな」

カーテンを開けると強い光に目を細める、そして再びと幼なじみの姿を見る
今日は休日だからか、さすがにいつもの制服姿ではなかった
寝ぼけているのかもしれない。眠気を振り払うように頭を大きく振って、翔子に向き直る

「あらためて、おはよう。翔子」
「・・・・・うん。おはよう雄二」

「よいしょ、っと」

そういえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ？
今日はコイツと何かの約束をしていたっけ？
寝起きのためか本調子ではないが頭で記憶をさかのぼる。ダメだ。
全く覚えがない。なら約束ではないだろう。だとすると・・・・・・。

ほかの理由を考えて、１つの結論にたどり着く。そうか、そういうことか

「悪い翔子。俺の携帯とってくれ」
「・・・・電話でもするの？」
「ああ、そうだ」

翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号を押す
コイツがここにいること。それは・・・

「あああもしもし？警察ですか？」

不法侵入しかない

『ドドドドドドドド！　ガチャッ』

「おふくろっ！どういうことだっ！」
「あら雄二。おはよう」

キッチンに駆け込むと、おふくろは洗い物をしながら朝の挨拶をしてきた

「おはようじゃねぇっ！どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！
おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちまっただろうが！」

幼なじみが無断で俺を起こしに部屋に入ってきた、と告げたときの相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。寝ぼけていたとはい

え、一生の不覚だ

「・・・え？」

俺の言葉をうけて、おふくろが何度か大きな瞳を瞬かせる

「翔子ちゃんが・・・・・・？」

おふくろが頬に手を当てて困ったような顔をしている
この態度だと、もしや翔子単独の行動か？おふくろの手引きじゃなかったのか？
もしそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは悪かったかもしれない

「ああ、いや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に上げたものだと」
「もう、翔子ちゃんってば奥手ねぇ。折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんて勿体な・・・あら雄二、どうしてお母さんの顔を鷲掴みにするのかしら？」
「やっぱり、アンタのせいか・・・！」

この母親には一度きっかり常識を教えてやるべきだろう

「・・・・雄二。お義母さんを虐めちゃダメ」
「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないといけないんだ」

遅れて現れた翔子が俺の腕を掴んで邪魔してくる
なんとなく、翔子の言う『お母さん』の発言が普通と違うような気がするが、今は気にしてはいけない。というかツッコんではいけな

い気がする

「・・・・言うことを聞かないと、この本をお義母さんと一緒に読む」

「ま、待てっ！それは女子の読むものじゃない！早くこっちに寄越すんだ！」

翔子が取り出したのはＡ４サイズの冊子。

くっ、よりにもよってあの本か！ムッツリーニですら唸らせた至高の１冊が見つかるなんて最悪の事態だ！

っていうかどうやって見つけ出したんだ！？一緒に暮らしているおふくろでさえわからないような場所に隠したはずだぞ！？

「あら翔子ちゃん。それは雄二が歴史の資料集の表紙をかぶせて、机の２番目の引き出しの２重底の下に隠してある秘密の本じゃない？」

「わ、わかった。おふくろは開放しよう」

言われた通りアイアンクローを取りやめる。なんて汚い脅迫なんだ。てかおふくろにもバレていたのか

「やれやれ・・・・。んで、どうして翔子が来てるんだ？」

「・・・・・約束」

「約束？今日俺となにか約束をしていたか？」

「・・・・・うん」

いつもの調子で頷いてポケットから小さな紙切れを取り出す翔子。

どうやら何かのチケットのようだ。え～っと・・・・・

「あら。如月グランドパークのオープンチケット？しかもプレミア

ムって書いてあるから特別なチケットなんじゃないの？凄いわ翔子ちゃん、よくこんなもの手に入ったわね～」
「・・・風見が・・・友達がくれた」
「・・・・・・・・・雄二、行こう？」

いやだと言いたいが・・・言っても聞かんだろうし・・・絶対裏に風見とかがいるだろうしな・・・

「仕方ない・・・まぁいいだろう」

だが、この程度の困難に屈する俺ではない！なんとかして脱出をしなければ俺の人生が・・・・・・・・・

ｓｉｄｅ明久

「あ、そうだ慧音」

重要なこと忘れてた

「なんだ？」
「休みに如月グランドパークに行かない？」
「・・・・・・え？」
「ほら、優勝賞品でチケット貰ったからさ」
「いや・・・妹紅達は？」
「私らはパス。用事あるから」

そう、何だか用事があるらしく慧音と二人で行こうということになった

「もしかしてなんか用事でもあった？」
「え、いや、ない！い、行く！！」
「うん、じゃあ今度の休みね」
「わかった／／／／」

よかったうれしそうで

ｓｉｄｅ妹紅

「今より会議を始めるわ」

今ここにいるのは私、幽香、アリス、咲夜、永琳である

「今回みんなを呼んだのはほかでもない・・・」
「明久がお礼として慧音を誘ったの」
「だから私達は邪魔しないようするつもりだったんだが・・・」
「あの二人ね・・・」

アリスの言葉に私はうなずく

「しかも同日に霧島さんも誘ったみたいで、彼女達とバカ集団がいるのは確実」
「妹紅、質問していいかしら」
「なんだ？咲夜」
「あの子たちホントに明久のこと好きなの？」
「確かにそうね・・・」
「私にはまるでお気に入りのおもちゃ程度にしか見てないように見えたのだけど・・・」
「永琳の言いたいこともわかるけど、一応好きらしい・・・」

私達は黙りこむ

「一応私達は『相手は明久が』ということで同意してるけど・・・」
「出来るなら彼女達は・・・」
「まあその話は置いといて。今回の話は明久と慧音の護衛よ」
「秀吉の手を借りて手伝いとして混ざりながら護衛する、って感じだな」
「あのクラスで味方って秀吉君しかいないのね・・・」
「まぁ、そう言うことだから」
「当日、頑張りましょう」
「「「「「おぉ～」」」」」

こうして時間は一刻と過ぎて行く

如月グランドパーク編1雄二の朝と明久の誘い（後書き）

前半は大半原作コピペになっちゃいますね・・・

如月グランドパーク編2（前書き）

今回はメインは雄二視点です

如月グランドパーク編2

ｓｉｄｅ雄二

「・・・・・俺は・・・・・無力だ・・・・・」

電車とバスで2時間ほどかけ、俺と翔子は如月グランドパークの前にいた
こ、これは仕方がなかったんだ！翔子1人だけならまだしも、おふくろまで面白がって結婚の話を進めだしたのが悪いんだ！
あの妙な雰囲気から逃れるために出かけてしまった俺を誰が責められよう

「・・・・・やっとついた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子。
・・・・・ふむ。そんな姿を見ると連れてきた甲斐もあるかもしれないな。
うん、そういうことにしよう。

「よし。それじゃ、翔子」
「・・・・・うん」
「帰ろう」
「・・・・・ダメ。絶対に入る」

翔子は腕を組んできた、どういうつもりだ？

「・・・・・恋人同士は皆こうしてる」
「あれ？雄二。雄二たちも来てたんだね」

「?坂本か」

この声は・・・明久と・・・

「上白沢先生?」

「どうかしたか?」

「いや・・・喋り方が・・・」

「これが素だ。学園では教師だからな」

「そうですか。じゃあ明久、俺達は先に行ってる。」

「・・・・・・中でまた会えたら、よろしく」

俺と翔子はそれだけ行って、入場口のほうへ向かう。

プレオープンという限定的な期間であるため、特に待つ事もなく入り口の方へ行けた

ｓｉｄｅ明久

僕は今日、慧音とグランドパークまで一緒に遊びに行くため待ち合わせをしていた

幽香いわくこれが普通だそうだ。まあ確かに女性は用意が時間かかるっていうしね・・・

「すまない、またせたな」

「いや待ってないよ慧音」

慧音はいつもの帽子に白いワンピースを着て、上にブレザーっていうのかなあれ?まぁ服を羽織っていた

「似合ってるね」

「そ、そうか。ありがとう／／／」

「じゃあもうそろそろ電車来るし行こうか」
「うん／／／／／」

「・・・・・・・・・吉井君が、今向かい始めました」

ｓｉｄｅ妹紅

「よろしくな、秀吉」
「かまわんよ、ところでお主らはよかったのか？」

？

「いや、明久の・・・」
「あ～私は別に」
「私もそうね。誘いたいときは誘うし」
「そうか・・・」

今ここにいるのは私と幽香だけ。ほかは客に交じって待機してもらっている

「雄二達が来たみたいだな」
「ではスタートじゃ」

一応のメインはこっちだしな・・・頑張るか

ｓｉｄｅ雄二

「いらっしゃいマセ！如月グランドパークへようこソ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた
顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」
「・・・・・はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す

「拝見しマース」
係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった。
翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる

「・・・そのチケット、使えないの・・・？」
「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに背を向けてどこかに電話をし始めた。

「私だ。例の連中が来た。声が違うからこっちだ。ウエディングシフトの用意を始めろ。確実に仕留める」
「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

この係員、急に目の色が変わりやがったぞ。まさか例のジンクスを作るための工作員か？
・・・・・ん？明久以外にも来ているヤツらがいるのか？

「・・・ウエディングシフト？」

翔子が首をかしげている。

如月グランドパークの企みを知らないコイツにはよくわからない単語だろうな。ってか知らないでいて欲しい

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

「アンタ、さっき流暢に日本語話してなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカりまセーン」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。あからさまに怪しい。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで、向こうのやろうとしていることはよくわかった。

だが、そんなものに乗る気はない！そうしないと、俺の人生がっ！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トッテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろう。
なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め・・・・！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」
「・・・・記念写真？」
「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」
「・・・・・・・・雄二と、お似合い・・・・／／／／」

翔子は似非外国人の言葉に頬を赤らめていた。

「お待たせしました。カメラです」

帽子をかぶってるがこいつ・・・

「藤原、何してやがる」
「私は藤原ではありません」
「彼女はココのスタッフのエリザベス・フジナガ（二十五歳）通称もこたんでース。あなたの言うフジワラさんではありまセーン」
「黙れ！年齢氏名全てにおいて堂々と嘘をつくな！しかもどう考えてもその名前で通称もこたんはないだろ！！」
「ちっ、ばれたか」
「何が目的だ・・・」
「大丈夫。メインは明久の護衛だ」

そう言って藤原は戻っていった。あいつはそこまでかかわる気はないみたいだな・・・

「カメラもキマシタし、ソコノきみウツシテくださーイ」

花壇を整備してたやつに声をかける・・・
藤原がいたって事は他のヤツらもいるな。なら・・・・

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」
「・・・・・???」

きょとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。
下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった

「・・・・・・!!」

カメラを持った従業員はすぐさま反応した。ってことは

「ムッツリーニもいたんだな」
「・・・俺はムッツリーニじゃない」
「・・・・・・雄二、えっち」

翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた

「なっ!?ち、違うぞ翔子!俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ!」
「・・・・・それはそれで、困る」

翔子は腕に抱きついてくる。この頃暴力ではなくこういう行動だから対応に困る／／

「でハ、写真を撮りマース」
「ちょっと待て!!」
「はい、チーズ」

近くでフラッシュが焚かれ、ピピッという電子音が聞こえてきた

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくださイ」

「・・・わかった。このまま待ってる」

ちょっとして

「――――――はい、どうゾ」

ほどなくして似非野郎が写真を持ってきた。翔子は嬉しそうに写真を受け取った

「・・・ありがとう。・・・・雄二、見て。私たちの思い出」

翔子が俺に写真を見せてくれる。

「…なんだ、この写真は」

写っているのは俺と腕を組んで写っている翔子。そして

「サービスで加工も入れておきまシタ」

その2人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。

未来を祝福する天使が飛び回っている。この写真をみると本当に結婚してしまうみたいじゃないか！

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か!?コレを飾られたら俺はもう言い逃れが出来ないじゃないか!」

そう言いあってると

『あぁっ!写真撮影してる!アタシらも撮ってもらおーよ!』

『オレたちの結婚の記念に、か?そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

いかにもチンピラのようなカップルがやってきた。

「すいまセン。こちらは特別企画でスので……」

似非野郎が断ろうとする。どうやらあの写真撮影は例のウエディングシフトとやらの一環で、
俺たちだけが対象なのだろう

『あぁっ!?いいじゃねーか!オレたちゃオキャクサマだぞコルァ!』

『きゃーっ。リョータ、かっこいーっ!』

男が下から睨みつけるように似非野郎を威嚇し始める。
絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もどうかと思うが

『だいたいよぉ、あんなダッセぇジャリどもよりもオレたちを写した方がココの評判的にも良くねぇ?』

『そうよっ!あんなアタマの悪そうなオトコよりもリョータの方が１００倍カッコイイんだからぁ!』

とりあえずチンピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げるとするか。
「・・・・」
「っておい翔子。どこに行くんだ」
急に勢いよく歩きだした翔子の腕を掴んで引き止める。

「・・・・あの2人、雄二のことを悪く言ったから」
「あのなぁ・・・その程度のことでイチイチ目くじら立てていたらキリがないぞ？」

正直あんな連中に何を言われても気にならないし、何より視界に入れておくだけでも不愉快だ。
まあ、翔子怒ってくれた事に悪い気持ちはしなかったがな

「行くぞ、翔子」
「・・・・雄二がそう言うのなら」

翔子もその光景は嫌だったようで、促すと渋々ついてきた

「映画館でもあれば楽なんだがな」
「・・・・・折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく面倒が少なくて妙な雰囲気にならないようなアトラクションを探す。
すると、そんな俺たちにヒョコヒョコと着ぐるみが近寄ってきた。
確か表紙に載っていたキャラクターだ

『お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。
ボイスチェンジャーなどを搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。

「じゃあ、フィーとやら。お前のオススメを教えてもらえるか？」
『あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

フィーとかいう狐の手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。
ふむ。廃病院を改造したとかいう例のアレか。

「そうか、ありがとう」
『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中をおして歩き出す。すると慌てたように俺の腕をつかんできた

『ままま待って下さいっ！どうしてオススメ以外のところに行くんですか！？』
「どうしてもクソもあるか。お前もあの似非外国人の仲間だろう？だったら、お化け屋敷には余計な仕掛けが施されているのは明白だ。わざわざそんなところに行く気はない」
『そ、そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってください！』

「断る」

そのお願いとやらの為に残りの人生を捧げる気はない！
断固として否定し、俺は自由を謳歌するんだ！・・・・今更だが、
なんか聞き覚えのある声だ。
気のせいか、クラスメイトの優等生に思えてならない。こいつも確
認しておくか。

「そういえば、明久が上白沢先生と一緒にここに来ていたぞ」

『えぇっ、明久君が！？それはどこで見たんですか！？』

本当にこいつらは、揃いも揃って・・・。

「おい姫路。アルバイトか？」

『そんな事より、明久君をどこで見たんですか！教えてください！
！』

姫路からはいつも以上の強い殺気が感じられる。
まさか姫路までここまで堕ちるとはさすがＦクラスというべきか・・
・・・
少し明久に同情するな

そんな姫路の対応をしていると、姫路の方から携帯の音が鳴る。

『もしもし、美波ちゃんですか。・・・・・明久君が！？・・・・・
はい、分かりました！すぐ行きます！』

こいつ等はまともに仕事を行う気はないのか！？姫路は電話を切る
とすぐにこの場から消え去った。
・・・・・あいつ、確か運動苦手なんじゃなかったのか？

「まっ明久に関しては風見達がいるだろうし、大丈夫だろ」
「ハイ、すいませーん。お待タせしまシタ。チョッと撮影二手間取ってシマいましタ」
そうこうしていると、さらに面倒なヤツが現れた。さっきの似非野郎だ。
もう追いついてきたのか。ん？撮影？
「なんだ？さっきのバカップルでも撮影したのか？」
「イエ。アノあと、モウ1組みのプレミアムチケットの方タチがキテ、そちラの方々ヲ撮影しまシた」
「は？何だと。俺達以外に来ているのか？いったい誰が・・・」
あ、明久か
「お話はソレで終わりですカ？では坂本雄二サン、お化け屋敷に行って下サイ」
「前後の文に脈絡がないからな。それにイヤだと言っているだろうが」
そんな危険地帯に自ら踏み込む気はない。
「断れバ、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」
「やめろっ！そんなことされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」
あのおふくろは全ての梱包材を潰し終わるまで他のことは何もしないだろう。
なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ・・・・！

結果的に入ったのだが・・・いきなり「俺は姫路のほうが好きだな、胸大きいし」という放送が流れ、さすがに翔子も切れたのか追いかけっこになった

確かに別意味でスリルあるな・・・

如月グランドパーク編2（後書き）

とりあえず、他ユーザー様書き方似てたらすみません

如月グランドパーク編3　あれはマスコットですか？いえ、鬼です（前書き）

明久編です

如月グランドパーク編3　あれはマスコットですか？いえ、鬼です

雄二と別れた後

「さてどこ行こうか・・・」
「といっても私も初めてだからな・・・」

そうなんだよね～
うん・・・今度から暇なときはみんな連れて、たまに遊びに行こう

「オーウ、そこのカップルさん?写真なんかどうですか」

写真か・・・良いかもね（カップルさんのところは聞いてません）

「慧音、ついでだし写真撮ってもらおうよ」
「・・・カップル／／／／」
「慧音?」
「え、だ、大丈夫だ」

どうしたんだろう?

「でハ、撮りマース。お二人さんチカヅイテくださいネー」
「ほら慧音」
「・・・よし・・・」

すると慧音は腕に抱きついてきた

「け、慧音／／／／」

「ほら、前を見ろ／／／」
「はい、チーズ」

撮った写真にはちょっと驚いている僕と、その腕に抱きつきながら赤くなっている慧音が写っていた

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくだサイ」

外国人の男はどこかにいってしまう。あれを印刷するのか・・・・恥ずかしいかな／／／／というか、もしあれが姫路さんや美波が見たら、・・・・僕はその場で死ぬのかもしれないな。

「お待たせしまシタ――――――サービスで加工も入れておきまシタ」

どれどれと僕達は写真を覗きこむ。
その写真に写っているのは先ほど説明した状態の2人とその2人と囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字、それに未来を祝福する天使が飛び回っている
そうだった・・・このチケットって・・・

「この写真とアト、ウエディングドレス、タキシードを着ての撮影をおこなう事にシマシタ。それとこの写真をパークの写真館に飾っても良いデスか？」

あ、微妙に違かったみたいだね・・・・って

「やめてください。それとそのフレーム・・・」
「かまわないが、ただそのフレーム外してくれ」
「慧音！？」

「OK、分かりました。ありがトウございマース。それでは、後ほどウエディング体験の方に移りタイト思うので、後でスタッフを向かわせマス」
「慧音、いいの？」
「まぁ、思い出程度にはな」

まぁ、そう言うならいいか・・・

『ドドドドドドド！！』

「うん？」
「なんだ？」

向こうから・・・なにあれ・・・？
マスコットの面影すらなく、瘴気によって鬼のようになった2人の化け物が現れた

「吉井君・・・・」
「アキ・・・」
「この声・・・姫路さんに美波？」
「どうしてここにいるのかと・・・」
「なんで先生と腕組んでるのか・・・説明してくれないかしら」

あ、まだ組んだままだった

「さぁ、お話を『ガシッ』え？」

すると後ろから二人の肩を腕が捕まえ

『お客様に迷惑かけちゃだめだよ』

ボイスチェンジャー使ってるのかな?マスコットキャラのノインが現れ

『ほら行くよ?』

「ちょっと待ってください!まだお話が・・・」

「そうよ!お仕置きが・・・」

二人を引きずって行った

「・・・まぁ、行こうか」

「・・・だな」

side妹紅

ホントあの二人どういうつもりだろうな・・・

『こちら咲夜、二人を捕獲したわ』

「ありがとう・・・助かった」

さて明久達は・・・お化け屋敷か・・・でも慧音大丈夫かな・・・

『こちら幽香、さっきの慧音結構だいたんだったわね』

「そうだね。久々に二人だからうれしいんだろう」

『こちらアリス、お化けやしきに来たから仕掛けをしながら警護するわ』

「頼んだ」

ふう・・・雄二達は食事中・・・その後ウエディングシフトか

『こちら咲夜。ごめんなさい、上司の人に引き渡したら逃げられたわ』
「わかった・・・永琳」
「何かしら？」
「麻酔薬作って。二人見つけたらそれ使うから」
「わかったわ」

ホント、何考えてるんだか、あの二人・・・

ｓｉｄｅ明久

ノインが二人を連れて行ったあと僕達はお化け屋敷にいるんだけど・・・

「う、うぅ・・・・」
「慧音、怖いなら非常口で出る？」
「だ、大丈夫だ・・・」

そうだった・・・慧音こういうの苦手だったんだ。さっきからずっと背中にしがみついてる

「ひゃっ！？」
「結構リアルだね・・・」
「うわっ！？」
「お、びっくりした」
「えぐっ・・・・」
「って、慧音！？泣きださないで」

すると、上から

『ボトッ』

「「・・・え？」」

生首の作り物が落ちてきた

「・・・きゅうううう・・・」

「あっ・・・仕方ないな」

僕は気絶した慧音を背負い、外に向かうのだった

如月グランドパーク編3　あれはマスコットですか？いえ、鬼です（後書き）

ホントこの頃冷えてきたな・・・・

如月グランドパーク編４　写真（前書き）

時間がまばらですのでおきをつけて

如月グランドパーク編４　写真

ｓｉｄｅ雄二

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた。

「コチラでランチをお楽しみ下サイ」

そう言って似非野郎が案内したのはパーティー会場のような広間だった。

そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。

この雰囲気、レストランというより――――

「・・・・・クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、ＴＶでよく観るクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらっしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」

スタッフが現れ、俺たちを席に案内する。

・・・・・コイツも見覚えのある面だな、オイ。

「秀吉。スタッフの真似事か？」

「秀吉？なんのことでしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。
こいつ、役者モードになってやがるな。こうなるとそう簡単に化けの皮は剥がせない。

「違うと言うなら、確認させてもらうぞ」

携帯電話を取り出し、アドレス帳から『木下秀吉』を呼び出す。
スタッフは携帯を取るも、俺のは呼び出し中・・・
用意周到だな・・・そこまでやるか

「はい・・・すみません急用が入ったので失礼します」

そしてデザートも食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時。

《皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！》
会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。この声は秀吉か

《なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしゃっているのです！》

「ぶふっ！」

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！
題して、【如月グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズ！》

な、なんだと・・・

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！
もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》

「大問題だバカ野郎！」

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進み下さい》

ご丁寧にも司会が俺たちの席を示してくれたおかげで、レストランにいる観客が一斉にこちらへと目を向けた。

「・・・・ウエディング体験・・・・・頑張る・・・・！」
「落ち着け翔子。そういったものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだだっ！腕が決まってる！行く！行くから放してくれっ！」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上に上がる。

そこには縛られた姫路と風見がいた。（ちなみにその後ろに島田も・・・）

ｓｉｄｅ明久

時間は少し戻って

慧音が気絶から復活すると

「あぁ、此処にいましたね」

「えっと・・・」

「ウエディング体験の用意ができましたのでお呼びに」

「あ、わかりました」

僕達はスタッフさんに案内してもらい分かれた

「ふう、結構この服って堅苦しいな・・・」

タキシードを着ながら僕はぼやく

「すいません、お待たせしました」

「あ、大丈夫ですよ」

女性スタッフからいきなり話しかけられて驚いた・・・

「ほら、お相手さんもお待ちですから」

「いや・・・しかしだな・・・」

「もう、愛そう尽かされちゃいますよ」

「うぅ、わかった」

そこには純白のドレスに身を包んだ慧音が立っていた

「・・・」

「ど、どうだ?」

「うん、似合ってるよ」

「そ、そうか／／／／」

やっぱ女性にとってドレスを着るって夢なのかな？

「では写真撮りますよ～」

どうしようかな・・・

『彼方達此処にいたのね！！』

『はなしてください！！吉井君が』

『そうよアキが！！』

『永琳！！』

『わかったわ』

？何か聞こえた気が・・・まあいいか

「ほっと」

「なっ！？」

「あら♪」

僕は慧音をお姫様だっこした

「あ、明久！？何を・・・」

「さっきの仕返しと思い出づくりだよ」

「では、チーズ」

「写真は後でお渡ししますね」

その後写真を受け取り、僕達はスタッフの言っていた会場に向かった

如月グランドパーク編5　クイズ？何それわかるわけねーだろ！！（前書き）

はい、クイズの部分を書き忘れ書けたバカです

如月グランドパーク編5　クイズ？何それわかるわけねーだろ！！

《それでは【如月グランドパークウエディング】プレゼントクイズを始めます！》

俺と翔子の間に大きなボタンが1つ設置されている。
コレをおしてから解答するというオーソドックスなシステムのようだ。
正解したらプレゼント、ということは、間違え続けたら無効になるのだろう。
それなら俺が間違え続けるとするか・・・

《では、第一問！》

ボタンに手を伸ばす用意をし、問題を待つ。さて、どんな問題が来るんだ？

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

・・・・・おかしい。問題文の意味がわからない。
『ピンポーン！』

し、しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！
だが、いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「・・・・毎日が記念日」
「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！正解です！》

しかも正解！？秀吉を睨みつける。

すると、秀吉は観客に見えない角度で、俺に向かって片目を瞑ってきた。

さては・・・・出来レースかっ！

そこまでして俺たちにウエディング体験とやらをさせたいのか！？

それ以前に風見！！笑うな！！

いいだろう。それならば俺は間違えて見せよう！

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうか？》

『ピンポーン！』

ボタンを押し、マイクに口を寄せる。

不正解を出すなんて、造作もない！

《はい！答えをどうぞ！》

「鯖の味噌煮！」

《正解です！》

「なにぃっ！？」

場所を聞かれたのに鯖の味噌煮が正解なのか！？

《お２人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

「待ていっ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

《第三問！お２人の出会いはどこでしょうかっ？》

ダメだ、聞いてねぇ・・・・・！だが、向こうのやり口はわかった。
今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押し、間違った解答を

「・・・・・させない」

『ガチャッ』

「待て！その手錠どこから出した！？」

『ピンポーン！』

《はい、解答をどうぞ！》

「・・・・小学校」

《正解です！お２人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚までに至るという、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！》

くそ！！手が動かせねぇ！！
問題を聞いてから動き出すようでは遅すぎるようだ。
翔子の妨害が間に合わないタイミングで解答する必要がある。

《第四問に参ります！》

『ピンポーン！』

問題文が読み上げられるよりも先にボタンを押し、妨害が入る前に解答を済ませる！どんな問題が来るかはわからんが、【わかりません】と解答したら１００％間違いになるはず！

俺は顎でボタンを押し・・・

雄二「わかりま・・・」

《正解です！それでは最終問題です！》

うぉっ！？俺の解答を無視したぞ！？問題を無視した仕返しか！？もはや間違えることは不可能だ、と諦めそうになったその時

『ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？』

不愉快な口調の救いの神が現れた。その場の全員が声の主を探る。すると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか――――』

『あぁっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちはオキャクサマだぞコルァ！』

どこかで見た連中だと思ったら、入場口で似非野郎に絡んでいたチンピラどもか。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど～？』

『で、ですが・・・』
『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ！オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』
『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

慌てるスタッフたちをよそに、そのカップルはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクの一つをひったくる。これはチャンスだ。この連中が相手なら間違えられることができる。
あとは翔子の妨害を邪魔しておけば・・・！

「・・・・・・ゆ、雄二・・・・・・？」

解答者席の陰で翔子の手を握る。これでボタンは押せない。
あとは向こうの問題に間違えるだけだ！

『じゃあ、問題だ』

チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う。

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

雄二「・・・・・・・・・・・・・・」
『オラ、答えろよ。わかんねぇのか？』

確かにわからないと言えばわからない。俺の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。
その首都を答えるなんて不可能だ。

《・・・・・坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。
【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします》
『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？オレたちの勝ちじゃねぇかコルァ！』
『マジありえなくない！？この司会バカなんじゃないの！？』
バカップルがぎゃあぎゃあと騒ぎ立てる中、ステージの幕が下りてくる。
Fクラス以上のバカがいるとは世界って広いもんだな・・・・。
キングクリムゾン！！
《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》
「坂本雄二さん、お願いします」
舞台袖でスタッフが耳打ちしてきた。
コイツをブチのめして逃げてやろうか。
「抵抗したら、海栗とタワシの活け作りを雄二の実家に送るぞ」
くっ。そんな物を送られたら、
あの母親はきっと全部海栗だと勘違いしてタワシにも手を出してしまう……！
「やれやれ・・・・・。まぁ、あくまでもただの体験だしな。適

当に付き合ってさっさと終わらせるか・・・・・・」

油断を誘うため、スタッフに聞こえるようにつぶやく

「さァ、どうぞ」

「あいよ」

小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした。

雄二「おいおい・・・・・。なんだよこのセット・・・・・・」

数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席。

スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。

向こうにある電飾なんていくらかかってるか見当もつかん。

《それでは新郎のプロフィールの紹介を――――――》

ん？俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。

目的のシーン以外の部分もきちんとしているようだ。さっきのクイズもそうだが、

どうやって調べたんだ？（答：幽香が翔子に聞きました　ｂｙ作者

《めんどくさいので省略します》

風見・・・てめぇ・・・

《――――それでは、いよいよ新婦のご登場です！》

脱出はもう少し待つとしよう。折角来たんだ。

翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。

そんなことを考えながら待っていると、目が暗がりになれるよりも早く、スポットライトが点された

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

言葉を失った・・・あれは・・・・・誰だ？

『・・・・・・・綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に洩れ出た、誰のものともわからない台詞。

「・・・雄二」
「翔子、か？」
「・・・うん」
「・・・どう・・・？私、お嫁さんに見える？」
「す、少なくとも花婿には見えないな・・・」

動揺して変なこと言ってしまった

「・・・・・嬉しい・・・・・」
「え・・・？」
「・・・ずっと夢だったから。・・・小さな頃からずっと・・・夢だったから・・・・。
私と雄二、２人で結婚式を挙げること・・・・・。私が雄二のお嫁さんになること・・・・。
私１人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢・・・・・・」

幼い頃のある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への想い。

それは罪悪感と責任感からくる勘違いなはずなのに

「・・・・だから・・・・・本当に嬉しい・・・・・。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが・・・・・」

でも・・・俺は・・・

『あーあ、つまんなーい！』

何かを言いかけたところで、観客から大きな声があがる。

『マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、早く演出とか見せてくれな～い？』

『だよな～。お前らのことなんてどうでもいいっての』

空気読まないバカどもだな・・・

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？なに？キャラ作り？ここのスタッフの脚本？バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドぉ～。

あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？ギャグにしか思えないんだケドぉ』

『そっか！コレってコントじゃねぇ？あんなキモい夢、ずっと持ってるヤツなんてい「黙りなさい・・・」なんだと？！てめぇ！！』

「黙れって言ってるのよ屑が・・・」

そこにはいつもの笑顔はない・・・無表情の風見が立っていた

如月グランドパーク編５　クイズ？何それわかるわけねーだろ！！（後書き）

分割でっさ。幽香が切れた理由は幽香も同じようなモノってのもありますが・・・この作品の幽香にとって思いとは強ければ強いほどきれいだという扱いでそれを侮辱されたからです

如月グランドパーク編６　俺はお前の夢を絶対に笑わない（前書き）

私的にここのシーンは結構好きだ
サブタイトル編集

如月グランドパーク編６　俺はお前の夢を絶対に笑わない

ｓｉｄｅ明久

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？》

秀吉が叫んでいるがそれよりも幽香だ！！
あれは完璧に切れてる。幽香にとって想いとは強ければ強いほど花のようにきれいだと前言っていた。
それを侮辱されたのだから切れるのも仕方ないけど・・・

「慧音、此処で待ってて」
「あぁ、幽香を頼んだ」

僕は動きだした

「貴方達に霧島さんの想いを笑えるほどの思いがあるのかしら？霧島さんはね、この時をずっと待ってたのよ？あっちの馬鹿な新郎に心の中でずっと積もってた想いを打ち明ける日を・・・何年もかけて育っていった、その大切な想いを・・・」

くっ！間に合うか？
幽香はゆっくりと２人に近づいて行く・・・

「バカにしたんだから覚悟出来てるんでしょうね・・・」

そして幽香は二人に向かって拳を振り下ろした

『バシッ！！！！！』

「「え・・・？」」
「ふう、間に合ったか・・・」
「な・・・明久？」
僕は当たる少し前に幽香の腕を掴んで止めた
「邪魔しないで明久！！私は・・・」
「幽香気持ちはわかるけど、暴力に走っちゃだめだよ・・・」
「そ、そうだ！お、俺たちはお客様・・・」
「おい・・・少し・・・黙ってろ・・・」
「「ひっ！？」」
僕はそれだけ言って幽香を連れて行った
《霧島さん？霧島翔子さーんっ！皆さん、花嫁を捜して下さい！》
スタッフがドタバタと駆け出す。
「坂本、霧島さん探さないと・・・」
島田さんがそう言うと
「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」
「え？ちょ、ちょっと、坂本・・・・・・！」
「そ、そんな・・・」
「はぁ・・・」
「明久？」

「ほっといて問題ないと思うよ」
「な、アキまで！！」
「どういうことだ明久？」

慧音達も聞いてくるけど・・・わかり切ってるじゃん

「あの雄二が本気で霧島さんを無視するわけないでしょ？」

僕はみんなに言い放った

ｓｉｄｅ雄二

明久は気づいてたっぽいよな・・・ありがとな、明久

『・・・・・・・クソォ、あのガキども・・・・・・』
『リョータ、大丈夫だって』
『ああ、そうだな』

それじゃ、とっとと用を済ませるか。
ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける

「なぁ、アンタら」
「ぁあ？ぁんだよ？」
「リョータ。コイツ、さっきのオトコじゃない？」
「みてぇだな。んでその新郎サマがオレたちになんか用か、あァ！？」

ほんと、まだ明久とかのほうが強いな

「いや。大したようじゃないんだが・・・」

借り物上着を脱ぎ、タイを緩める
翔子の想いをバカにしたんだ・・・

「ちょっとそこまでツラぁ貸せやぁ！！！！！」

殴らねぇと気がすまねぇ！！！！

「よっ。遅かったな翔子」

木によっかかって待っていると翔子が俯きがちにやってきた

「・・・雄二・・・どうして・・・」
「此処だと思ってな」

そう、此処は昔翔子に嘘を教えてしまった場所…

「さて。それじゃ、帰るとすっか」
明久から受け取っておいた翔子の忘れていた鞄を担ぎ直して、駅に向かって歩き出す

「・・・雄二」
「何だ？」
「・・・・・私の夢、変・・・・・・？」

「・・・・・」

やっぱり気にしてたのか・・・

「翔子・・・この際だから言っておく」

これは言っとかなければならない

「お前の俺に対する思いは勘違いだ」

「・・・・・・・っ・・・」

「だが・・・俺は・・・・・・・・俺はお前の夢を絶対に笑わない。お前の夢は、大きく胸を貼れる、誰にも負けない立派なものだ。まあ、相手を間違えていなければの話だけどな?」

そう言いながらヴェール付ける

「まあせっかくの体験だったんだ貰っとけ」

「雄二・・・」

「そうだ。それと・・・・・・弁当、旨かったぞ」

「・・・・・・」

「帰るぞ、遅くなると勘違いされそうだからな」

「雄二っ!」

翔子の大きな声・・・久々に聞いたな

「何だ?」

「・・・私・・・」

「やっぱり何も間違っていなかった！」
そう言って・・・翔子は微笑んだ・・・

ｓｉｄｅ明久

はぁ・・・昨日はあの後美波と姫路さんに追いかけられるは散々だった・・・

「よ、明久」
「あ、雄二おはよう」
「昨日はありがとな」
「気にしないで」
「あ、そうだこれ」

雄二がニヤつきながらチケットを渡してくる

「映画のペアチケットだ。『誰か』と一緒に行くといい」
「うん・・・ありがとう」

なんか企んでるのか？

「あ、アキっ！　そういえば、ウチ週末に映画を観たいとおもっていたんだけど・・・」
「あ、明久君っ！私も丁度観たい映画があったんですけど！」
「へぇ？どうして２人ともそんなに殺気だってるの！？」

くっ・・・こうなったら

「ゆ、幽香、妹紅」
「ん？なにかしら？」
「ん？なに？」
「今度一緒に映画見に行こう」
「「え？」」
「アキ～」
「吉井君？」

意外と選択しミスったかも

如月グランドパーク編６　俺はお前の夢を絶対に笑わない（後書き）

最後はやっぱりいるよね。ちょっとテレビのほうをアレンジ？です

ＰＶ２５万越え記念短編　女装コンテスト（前書き）

ＯＶＡのあれです
大半会話文です

ＰＶ２５万越え記念短編　女装コンテスト

「文月学園主催、女装コンテスト～」
「さて始まりました文月学園らしいこの企画、時期はいつなのか？目的は何なのか？場所はどこなのか？」
「そういった細かいところはすべて無視して進めて行きましょう」
「解説を務めますのは、私新野すみれと」
「保健医、八意永琳と」
「学年主任、高橋洋子です」
「「「よろしくお願いします」」」

特別版

「今回は女装コンテストですが初めにこの方です」
「明久に手を出す奴は許さない。２年Ｆクラス男装少女、通称もこたんこと藤原妹紅さんです」

すると会場中央から女子制服を着た妹紅が現れた

「いや～普通に似合ってますよね」
「まぁ、顔は整ってますし普通にかわいいでしょうね」
「しかし、一番の注目は・・・胸でしょうね」
「ちなみに藤原さんのバストはＣカップですよ」
「今さらりと八意先生個人情報を吐かれましたね～」
「藤原さんは暴れそうになってますけど、吉井君に担がれていきましたね」
「吉井君の前では形無しですからね～」
「藤原さんのたれパンダ状態を眺めながら行きましょう」

part1

「それではエントリーナンバー1番、卑怯、変態、女装趣味と三拍子そろった外道！
2－B代表根本恭二さんです」
「いや～これは思った以上に汚い絵ですね～初っ端から誰得～な企画か分からなくなってきました」
「そんなことを言ってはいけませんよ、新野さん。
彼の変態としてのプライドを傷つけてしまっては可哀そうです」
「変態としてのプライドなんてものはむしろズタズタにされるべきだと思いますが気にしないでおきましょう」
「むしろ抹消するべきだと思います」
「ちょ～っと八意先生が危険な発言をしましたが無視しましょう」

『ガタンッ』

「なお審査員は点数をつける代わりに、出場者を強制的に退場させる権限を持ちます」

審査員　木下優子　風見幽香

「審査員がこれ以上見るに堪えないと思ったらボタンを押すわけですね」
「そしてあまりにひどい場合は私が追加を押します」
「さらりと問題発言がありますがそうなります」

part2

「エントリーナンバー2番、Fクラス代表坂本雄二さんです」

『ガタンッ』

「それはいきなり厳しい評価、ターンすらさせて貰えませんでしたね」

「坂本君は中央・・・つまり」

「はい、それ以上は言わせませんよ？」

「八意先生が高橋先生を気絶させてるのは無視して次いきましょう」

part3

「さてエントリーナンバー三番、本日は撮る側ではなく撮られる側、ムッツリ商会の若き経営者、土屋康太ことムッツリーニさんです」

「これはレベルが高い、普通にかわいいです」

「土屋君は背も低いですしあまり喋りませんからね」

「なんだか高橋先生が気絶していますが無視して、普通に渡り切りましたね」

part4

「続いてエントリーナンバー4番、学年きってのバカと言われたかと思うと1000点以上という驚異的な点数を出した観察処分者こと吉井明久さんです」

恰好としてはメイド服にロングスカート金髪蒼眼である

「なんていうか女性として負けた気分になりますね～というよりあの細い腕でどうやって壁走りとかしてるのでしょうか」

「ちなみに吉井君は蹴りでコンクリートを砕くくらいの膂力がありますね」

「ちょっとした恐怖情報ですね。あら？立ち止まりましたね」

『ニコッ』

「「「「「「／／／

ＰＶ２５万越え記念短編　女装コンテスト（後書き）

うん、結構ムズイな

プール編　準備（前書き）

水着なんでわからないな・・・

プール編　準備

ある放課後

「吉井、此処にいたか」
「西村先生、どうしたんですか？」
「実は・・・・」

「プール掃除？」
「そうそう、一人じゃさすがにきつくてね」
「べつに構わねえが、きつくねぇか？」
「・・・・・重労働」

確かにそうだけど

「褒美という程じゃないけど掃除した後プールを自由に使っても良いって」
「ほう」
「秀吉達も来ない？」
「楽しそうじゃし行くかのぅ」
「・・・・・他には？」
「そうだね～咲夜達は後で誘うとして、幽香、妹紅、ちょうどよかった」

するとちょうどよく幽香と妹紅が帰ってきた

「ん？なに、明久？」
「実はね・・・・」

少年説明中

「ってことなんだけど来る？」
「行きたいけど・・・」
「そうね・・・私達水着がないわね」
「それなら買いに行けばいいし、今週末する予定だよ」
「わかったわ」
「慧音誘っていい？」
「うん、誘う予定だったし」
「ＯＫ」
「んじゃ後は・・・島田、姫路」

雄二が二人に声をかける

「どうしたの坂本？　何か用？」
「呼びましたか、坂本君？」
「２人とも今週末は暇か？学校のプールを貸し切りで使えるんだがどうだ？」
「「え・・・」」

？どうしたんだ？

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな・・・？プールって言うと、やっぱり水着だし・・・」
「そ、そうですよね。水着ですよね・・・その、えっと・・・」

なんかあるのかな?

「で、どうするんだ2人とも?」
「い、行くわ！　その、イロイロと準備をして・・・」
「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

行くみたいだね

「よし、あとは翔子を誘うだけだな」
「へぇ、雄二から誘うなんて意外だね」

『ポン』

「もしもこれで誘わなかったらどうなるか・・・わかるだろ?」
「・・・うん、ごめん」

その後、咲夜と永琳を誘いに行くと行くと即答され、全員分の水着の買い物に手伝わされた

まぁ、確かに荷物持ちはほしいよね

プール編　準備（後書き）

外伝も考えながら～書く～

プール編2　着替えそして傷跡（前書き）

もう一回言います。明久は秀吉を男と認識しています

プール編2　着替えそして傷跡

そしてその週末。

「おはよー。絶好のプール日和だね」
「おはようじゃ明久、良い天気じゃな」
「おはようございます明久君、今日は良い1日になりそうですね」
「おはようみんな」
「あ、上白沢先生と八意先生も来たんですね」
「あぁ、ちょうど休みだったからな」
「先生、口調・・・」
「これが素だ。気にするな」

確かに知らないと驚くよね

「あ、ムッツリー・・・」
「・・・・・（カチャカチャ）」
「撮ったらコワスヨ？」
「・・・・・（渋々）」
「ていうか撮れないでしょう」
「確かにな・・・・」

まぁ、あれじゃあね・・・

「・・・問題ない」
「・・・・・・・・・輸血の準備は万全」

最初から鼻血の予防を諦めてるあたりどうかと思うけど・・・

「準備と言えば、秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？忘れずに買って来たの？」
「うむ。無論じゃ」
「ちなみに買って来た水着じゃが・・・」
「・・・・・！！（くわっ！）」
「・・・トランクスタイプじゃ」
「バカなぁぁぁあっ！！」

なっ！！ムッツリーニが叫んだ！？

「無視していきましょうか」
「そうだね」
「そうね」

ふう・・・・

『タタタタタッ』

「お兄ちゃん、おはようですっ！」
「おっと・・・」

フランもそうだがちっさい子はなんで突っ込んでくるんだろうか

「もう葉月ってば、アキがビックリしてるでしょ？」
「葉月ちゃんか、久しぶりだね」
「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですか？」
「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

「呼んだら呼んだで暴れそうなバカがいるけどな」
「そうね」

幽香、妹紅・・・

「明久・・・おかしいと思うのは私だけかしら・・・」
「咲夜・・・言わないで・・・」

虚しくなるから・・・
ん・・・雄二が鍵取ってきたみたいだね

「おはよう雄二、霧島さん」
「おう。きちんと遅れずに来たようだな」
「・・・皆おはよう」
「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行ってくれ。
着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。
姫路さんと美波、幽香と妹紅、慧音と永琳、咲夜は霧島さんに。
僕とムッツリーニと秀吉と葉月ちゃんは雄二に。

「・・・ん?こらこら、葉月ちゃんは向こうでしょ?霧島さんについて行かないとダメだよ」
「えへへ。冗談ですっ」
「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」
「し、島田!?わしは男じゃぞ!お主までそんな目でワシを見るように!?」

ドンマイだよ秀吉・・・

「なら、秀吉と誰か一緒に着替えればいいだろ?」
「そうだね・・・じゃあ行こうか秀吉」
「な、アキ!!」
「吉井君!?」
「「「「はいはい、いくよ~」」」」
「あ、アハハ」

そこで皆と別れ着替えに向かった

更衣室で

「残念だったね、秀吉」
「この頃皆がわしを女子として見ておるのぅ・・・」

普通はわかるのにね

「・・・!?明久・・・」
「ん?どうしたの?」
「その傷・・・」

秀吉が言ってるのは左胸の傷かな?

「昔事故でね」
「そうか・・・」
「さっ、みんな待ってるだろうし行こうか?」
「じゃな」

僕達はプールに向かうのだった

おまけ

「秀吉・・・」
「なんじゃ？」
「その水着・・・女用だよ？」
「な、なんじゃとおおお！！？？」

プール編2　着替えそして傷跡（後書き）

傷に関しては外伝で書いております

プール編3　水着、そして鼻血（前書き）

水着の知識はないですがなんとか説明入れました

プール編3　水着、そして鼻血

「やっぱり女子はまだ着替え終わっていないみたいだね」
「・・・・・（コクリ）」
「ま、女性が準備に時間がかかるってのは、当然だからな」

気が利いてる雄二なんて・・・（ｒｙ

「で、秀吉はどうしたんだ？」
「それは・・・」

少年説明中

「確かにそれは・・・ところで明久、やっぱそれ着けてるんだな」

結晶を見て雄二が言う

「大切だからね」
「後、やっぱ目立つなその傷」
「あはは」

『タタタタタ』

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」
「葉月ちゃん？」

なんか胸が・・・てかムッツリーニが死掛けてるよ・・・

「……弁護士を呼んで欲しい」

「アハハ・・・」
「こ、こらぁあっ?!お姉ちゃんのソレ、勝手に持って行っちゃあダメでしょっ?!　返しなさい葉月っ!?」
「ん?　今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パッ……」
「この1撃に!」
「そんなことしたら・・・」
「あ、妹紅」

上は赤いビキニに、短パンの様な水着を着ていた

「うん、やっぱ赤とかが似合うね」
「ありがとう・・・／／／／」

あれ?美波どうし・・・

「負けた・・・」
「・・・・・・・（ドサッ）」
「えっと輸血道具は・・・」
「な、翔子。なんで目を隠す」
「・・・他の人の見ちゃだめ」

黒いビキニに水着用のミニスカートを組み合わせた格好の霧島さんが雄二を目隠ししていた

「霧島さん、坂本の目を隠したら水着の感想が聞けないわよ?」
「・・・・・それは失敗だった」

幽香が突っ込むと、霧島さんが手を離した
ちなみに幽香は、黒の布を縛るタイプのビキニだ

「デカイ・・・」

美波が怖いな・・・

「すみません！　背中の紐を結ぶのに、時間がかかっちゃって・・・！」

「姫路さん！急いだらこけますよ」

咲夜と姫路さんも来たみたいだね（咲夜は青っぽいスポーツブラタイプ）

「Ｗｏｒａｕｆ　ｆｕｒ　ｅｉｎｅｍ　Ｓｔａｎｄａｒｄ　ｈａｔ　Ｇｏｔｔ　ｊｅｎｅ　ｕｎｔｅｒｓｃｈｉｅｄｅｎ，ｄｉｅ　ｈａｄｅｎ，　ｕｎｄ　ｊｅｎｅ．　Ｄｉｅ　ｎｉｃｈｔ　ｈａｂｅｎ！？　Ｗａｓ　ｗａｒ　ｆｕｒ　ｍｉｃｈ　ｕｎｇｅｎｕｇｅｎｄ！」

「神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの！？ウチに何が足りないっていうのよ！」

僕は美波の言いたいことを訳し

「ドイツ語で言ったらみんな分かんないから日本語で言おうね・・・」

「わしはそれをすぐに訳したお主がすごいと思うぞ」

後は慧音と永琳か・・・

「お待たせしたわね」

「すまん遅れた」

「あ、来たみたい・・・・」
「「「・・・・・・」」」
「皆さんスタイルいいですね・・・」
「・・・・・orz」
「やっぱすごいわね・・・」
「うん・・・」
「そうね・・・」

慧音は水色のビキニに腰に布を巻いたようにしている。（アニメの姫路がつけているタイプの水色）
永琳は赤と青の胸元と背中が大きく露出した水着だ

「どうしたのかしら？」
「どうかしたか？」
「うん・・・気にしたら負けだよ」
「で、明久君」
「なに？永琳」
「どうかしら？」
「うん、皆似合ってるよ」
「「「「／／／／／／／」」」」

赤くなってるけど・・・幽香に妹紅。なんで美波と姫路さん押さえてるんだろう・・・

「明久、傷・・・」
「隠す意味とかないからね、気にしないで慧音」

さて、僕は死にかけてるムッツリーニを診るか

プール編3　水着、そして鼻血（後書き）

絵募集中

プール編４　水中鬼、とび蹴り、映姫（前書き）

プール編ラストです

プール編４　水中鬼、とび蹴り、映姫

僕は・・・今妹紅と夕飯調理をかけて競争していた

「負けた・・・」
「危うく負けるかと思ったよ」
「明久手抜いてたくせに～！！」

さて上がるかな・・・

「明久君泳ぐの上手ですね」
「昔友達とよく勝負してたからね。姫路さんは？」
「実は私、全然泳げないんです」

そういや、姫路さん運動苦手だったっけ？

「そう言う事なら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、ウチが瑞樹に泳ぎを教えてあげよっか？得意だし」
「ホントですか」

勉強ではＡランクの瑞希が、Ｆランクの美波にいつも教えてあげているけど

「運動だと美波がＡで姫路さんがＦみたいだよね」

『ビュンッ』

「うわっと・・・」
「寄せてあげればＢ位あるわよっ！！」

なんか勘違いしてるようだ・・・

「あ、島田何やってんだ!!」
「だってアキが!!」

妹紅に任せよう

「ドンマイね、明久」
「言わないで、幽香」
「お兄ちゃんっ」
「ん？何？葉月ちゃん」

浮き輪で葉月ちゃんが泳いできた

「“水中鬼”をするです」
「水中鬼？　……水中でやる鬼ごっこかしら？」
「違うですっ。水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追い掛けるです。それで鬼が他の人を水の中に引きずり込んで、溺れさせたら勝ちです」
「・・・確かに鬼ね・・・（たしかに美波の妹ね・・・）」
「葉月ちゃん、それ危ないからね？」
「あぅ……ダメですか？」

実際したら危険だしな・・・

「葉月ちゃん？」
「なんですか？綺麗なお姉ちゃん」
「見ててね？霧島さん」

？霧島さん呼んでどうするんだ？

「……何？」

「坂本と水中鬼って遊びをやって見せてほしいの。ルールは簡単で、坂本を水中に引きずり込んで、溺れさせた後に人工呼吸ができたら霧島さんの勝ち」

「……行ってくる」

その後、霧島さんは雄二を襲撃・・・・ドンマイ・・・雄二

「あんな感じで危険だから駄目よ？」

「はいです。葉月、水中鬼は諦めるです」

「あれ？　プールを使っているのは誰かと思ったら、代表達だったの？」

「……愛子？」

えっと・・・たしかＡクラスの工藤さんだったかな？

「どうしたの？」

「僕水泳部だから、もう一人来てるし」

「「え？」」

すると

『お姉さまっ！　どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか！？』

『美春！？　アンタどうしてここにいるのよ！　プールで遊ぶなんて誰にも言わなかった筈なんだけど！？』

『美春にはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありますから！』

「・・・・」
「関わらないほうがいいわね・・・」
「じゃあボクも水着に着替えて来るね？」
「行ってらっしゃい」
すると途中で振り向いて……
「覗くなら、バレないようにね♪」
「覗かないからね？」
なんか後ろから2つの殺気が・・・あ、消えた
「ふう、さすがに遊び疲れたな・・・」
「あはは、ある意味妹紅一番はしゃいでたもんね」
妹紅は上がろうとすると・・・そこで事故が起きた
「あ・・・」
「え？」
滑ったのか妹紅がプールサイドからこっちに倒れてきた
『バシャンッ！！』
「いてて・・・」
「ごめん、大丈夫か？明久？」

「あ、うん大丈夫・・・？」

なんか手に・・・赤い布？

「え？」

「ん？・・・・あっ・・・・」

え・・・妹紅・・・何もつけて・・・

「アキ～！！」

『ドガッ！！』

「あぐ・・・」

「あ、明久！？」

後頭部に鈍痛が走った後、胸を腕で隠す妹紅に突っ込みながら気絶した

「起きなさい・・・」

「う・・ん・・・」

「やっと起きましたか、明久」

「・・・あ、映姫・・・久しぶり」

「久しぶりですね。何があったんですか？こんなとこに来て」

この少女は四季映姫・ヤマザナドゥ。閻魔さまだが同じ年位に見えないからな・・・まぁ、僕より年上だけど。てかなんで膝枕されて

るんだろう・・・

「うごけますか？」
「・・・・無理・・」
「てことは臨死体験みたいなものですね、少ししたら戻れるでしょうしお話しましょう」
「そうだね」

その後、話（主に愚痴）をしてると

「そろそろ戻るのかな？」
「そうですか。今度幻想郷に来た時は顔出しに来てくださいね」
「うん」

目が覚めると美波が正座させられていた。
話によると僕は美波のとび蹴りを食らったようだ

こうして日は過ぎて行く・・・そういやそろそろ合宿だっけ？

プール編４　水中鬼、とび蹴り、映姫（後書き）

え？妹紅に突っ込んだ後どうなったかって？それは・・・

強化合宿編1　脅迫（前書き）

友人がブレイブルーにはまってるみたいだ

強化合宿編1　脅迫

Fクラス

「む?今朝は早いのぅ、明久達」
「おはよう秀吉。なんかアラーム設定ミスっちゃってね」
「おはよう、秀吉。いや～明久早かったよ。背中にぶら下がってたけど」
「いきなり明久が走っていくから驚いたわ」
「おはようじゃ。多分強化合宿で少し浮かれておるんじゃろう」
「かもしれないね」

そう、もう少ししたら合宿なのだ

「学力強化のためとはいえ、皆での泊りがけじゃ。ワシも心躍っておるしのぅ」
「確かに4泊5日の修学旅行みたいだもんな」
「そうね、私も少し楽しみだわ」

そういや、妹紅や幽香は初めてだもんね
僕はそう思いながら鞄の中身をロッカーに移していると・・・

「ん?何だろうこれ」
「どうしたんだ明久?」
「いや・・・なんか手紙が・・・」
「あら誰かしら?」

中を見てみると

「なになに、『あなたの秘密を握っています』・・・・」
「これって・・・」
「間違いないわよね・・・」
「確かにのぅ・・・・・」

こうして僕は脅迫状をもらった

「どうしたの？アキ達」
「あ、美波おはよう」
「おはようアキ。ところでそれって・・・ラブレター？」

なんで君はいきなり戦闘態勢に入るんだ・・・

「美波変な発言は控えよう。クラスの行動に反応して、暴れそうになる二人を抑えるのはきついから」
「じゃあ、何よそれ」
「どうも脅迫文みたいなのじゃ」
「それって・・・」
「で、続きなんて書いてるの？」
「えっと、『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと』って書いてるね」
「大方、明久の近くにおる異性に強い思いを持っておるものからの悪戯かのぅ？」
「まだ裏に何か書いてるね。『この通告を聞き入れない場合、同封している写真を公開します』」
「写真？」

するとちょうど写真が入るくらいの封筒が入っていた
中身は三枚。１枚目は・・・

清涼祭での女装

「これって・・・」
「うん、盗撮だよな・・・」
「後二枚は？」

1枚は幽香を押し倒してしまったところ

「／／／／／／」
「いつの間に・・・」

もう1枚は・・・・

「？どうしたんだ？」
「これは見せれない・・・隠れてるけど」
「え？」

僕はすぐにライターで写真を燃やした

「な、何やってるのよ！！アキ」
「見られるわけにはいかないんだ・・・」

3枚目・・・それは水着を握った僕と、妹紅が一緒に写った写真

こんなの出回ったら僕犯罪者じゃないか！！

「そんなにひどかったのか？」
「口に出せないほどにね・・・」
「女装ぐらいすると思うがのぅ」

案外秀吉が女って思われるのってそれが原因じゃ・・・

「みなさん、おはようございます」
「あ、姫路さん。おはよう」
「遅かったね、姫路」
「忘れ物をしてしまいまして」
「そうじゃ、姫路よ。少々良いか？」

どうしたんだ秀吉？

「はい、何でしょうか？」
「うむ。明久の女装写真があったらどう思うかのぅ？」

いや、普通引くんじゃ・・・

「そうですね・・・とりあえずスキャナーを買います」

何故スキャナー？

「そうして、明久君の魅力をＷＥＢで全世界に配信します」
「それはいい考えね」

・・・・

『ガラッ』

「まて！！明久飛び降りようなんてするな！！」
「明久・・・すまぬ。ここまでとは・・・」
「貴方達も人権っていうものを考えなさい！！」
「離して・・・妹紅。そうだったね飛んじゃダメだね・・・」

「そうだよ、明久。だから」
「飛んでも死ねなさそうだから・・・死の点を（ボソッ）」
「幽香！！手伝え！！慧音！！お願い、早く来て！！」
「そ、そうじゃ！ムッツリー二に事情を説明して・・・」
「笑われろと？」

僕は幽香と妹紅の抑えられながら言う

「違う！事情を説明して犯人を見つけるのじゃ！」
「なるほど」

確かに彼なら・・・

「じゃあ聞いてきてみるよ」
「それより明久君。女装がどうとか・・」
「待ちなさいよアキ」
「貴女達・・・私の話聞いてなかったのかしら？」
「さすがに私も怒るぞ？」

僕はムッツリー二の席に近寄ると

「どうしたの？雄二」

そこには雄二がいた

「明久か・・・実は翔子がＭＰ３プレーヤーを隠し持ってた」
「それで？」
「没収してみたら・・・そこには捏造された俺の告白が入っていた・・・」
「・・・・・雄二・・・・」

「ＭＰ３の中身はコピーだろうし、オリジナルを消さなければ・・・」
「そうか・・・」
雄二も苦労してるね・・・
「で、明久はどうしたんだ？」
「実は・・・」
少年説明中
「何だ俺と同じか」
「・・・・同じ脅迫の被害者」
すると鉄人が入ってきた
「・・・とりあえず、調べておく」
「すまん。報酬は今度お前が気に入りそうな本を持ってくる」
「僕は・・・」
何も無いな・・・
「・・・・・明久は写真を撮らせてくれ」
「それでいいの？」
「・・・・あぁ・・・明久の写真は需要が高いからな」
こうして話は終わり、鉄人の説明が開始する
「そうだった。他のクラスと違って我々Ｆクラスは現地集合・・・」
「「「「「案内すらなしかよ！！」」」」」

「だったのだが、上白沢先生によりバスがでるそうだ」
「「「「「貴女は神だ！！」」」」」
とりあえず、慧音の手にちょっと見えた赤い物は気のせいだろう・・
・

強化合宿編２　移動中（前書き）

案外書き難し

強化合宿編2　移動中

「あとどれ位掛かりそう？」
「多分2時間位だと思うよ」

僕達は慧音が頼んだバスに乗ってるんだが、高速が込んでしまい遅れている。
まぁ、鉄人にはもう連絡してるからいいんだけどね

「ところで明久」
「なに？慧音」
「その指輪は・・・」

慧音の言ってるのは霊糸の指輪のことだろう

「七ッ夜は持っていけないからね。鉄人には許可取ってるよ？」
「そうか、ならいいんだが」
「さてじゃあ席戻るね？」

僕は席に戻ると

「あれ美波？何読んでいるの？」
「ん、これ？これは心理テストの本。１００円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの」
「へぇ～面白そうだね。美波、僕にその問題出してよ」
「あ、私も」
「私もしてみようかしら」
「うん。いいわよ」

僕と幽香、妹紅は心理テストを受けることにした

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい。緑　オレンジ　青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

「えっと・・・って美波睨まれたら答えにくいんだけど」

「べ、別にそんなわけ・・・！　いいから早く答えなさい！」

「……順番に緑、美波　オレンジ、姫路さん　青は・・・慧音達って感じかな」

「私は・・・緑、坂本　オレンジ、秀吉　青は明久だな」

「私も妹紅と一緒ね」

『ビリィッ！』

「ん？どうしたの？美波」

「どうしてウチが緑で上白沢先生達ってことは妹紅達が青なのか、説明してもらえる？」

「なんでって言われてもね・・・・」

なに起こってるんだ？

「どれどれ？緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はーなるほどなぁ」

雄二が本を覗き込みながらニヤニヤしている

「ところで藤原と風見はどうして明久が青なんだ？」

「だって・・・」

「ねえ？」

「「（明久眼が蒼くなるし）」」

「青って何なの？」
「絶対に教えない・・・・・・第２問目行くわよ。『一から十の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に二つ挙げて下さい』だって。どう？」

１から１０・・・

「俺も参加するかな５，６だ」
「ではワシも２・７じゃな」
「私は３・９です」
「僕は１・４だね」
「私は５・８だね」
「私も５・８ね」

雄二、秀吉、姫路さん、僕、妹紅、幽香と答えて行くそれぞれの答えを聞いた後、美波はゆっくりとページを捲くった

島田「『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ・・・」

雄二・クールでシニカル
秀吉・落ち着いた常識人
瑞希・温厚で慎重
明久・死になさい
妹紅、幽香・人情深い

はて・・・なんか僕の罵倒では・・・

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当

の顔』だって。それぞれ・・・」

雄二・公平で優しい人
秀吉・色香の強い人
姫路さん・意志の強い人
僕・惨たらしく死になさい
妹紅、幽香・一途な人

「ねえ・・・さっきから罵倒しか聞いてないんだけど・・・」
「美波・・・いい加減にしなさいよ？」
「う・・・」
「ほら貸して。何々・・・明久は『天然たらし』、『他人思い』」
「・・・あってるわね」
「だね」
「そうかな？」
「確かにあってますね」
「上白沢先生まで！？」

いや・・・天然たらしって・・・

「……（トントン）」

不意に肩を叩かれた

「あ、ムッツリーニ。　おはよう」
「目が覚めたようじゃな」
「……空腹で起きた」
「あれ？　もうそんな時間？」

携帯電話を取り出して現在時刻を確認する。

もう昼過ぎてるね・・・

「ちょうどおにぎり作ってきてるし食べる？」

「食べる～」

「いただくわ」

「あ、妹紅。意地汚いよ」

僕の作ったおにぎりはすぐに無くなってしまった

ただ、美波と姫路さんがショック受けてたけどどうしたんだろう？

強化合宿編2　移動中（後書き）

明久の回答の答えと幽香と妹紅、のはオリジナルです。
本当にそうなるとは限りません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2653z/

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月26日22時49分発行